

下 大 五 郎 遺 跡
谷 ノ 口 遺 跡
渡 り 口 遺 跡
下 川 原 遺 跡

Shimodaigorou Site
Tanimokuchi Site
Watariguchi Site
Shimokawabaru Site

丸谷川広域基幹河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

下 大 五 郎 遺 跡
谷 ノ 口 遺 跡
渡 り 口 遺 跡
下 川 原 遺 跡

Shimodaigorou Site
Tanimokuchi Site
Watariguchi Site
Shimokawabaru Site

丸谷川広域基幹河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

序

宮崎県教育委員会では、都城市を流れる大淀川の支流丸谷川の河川改修事業に伴い、平成2年度から平成6年度にかけて下大五郎遺跡・下川原遺跡・谷ノ口遺跡・渡り口遺跡の発掘調査を行いました。

この調査では、弥生時代の遺構・遺物を中心の中近世の水田跡等が検出されました。特に下大五郎遺跡では弥生時代後期の集落跡をはじめ生活の痕跡が数多く確認され、花弁状住居等当時の人々の暮らしを垣間見ることができたことは、調査の大きな成果と言えるでしょう。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場で活用され、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解の一助となることを期待します。

なお、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関をはじめ、御指導・御助言をいただいた方々、並びに地元の方々に心からの謝意を表します。

平成17年3月

宮崎県埋蔵文化財センター
所長 宮園 淳一

例　　言

- 1 本書は、丸谷川中小河川改修事業（現丸谷川広域基幹河川改修事業）に伴い、宮崎県教育委員会が行った下大五郎遺跡・下川原遺跡・谷ノ口遺跡・渡り口遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、宮崎県教育委員会が主体となり実施した。また、整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターが平成15～16年度の2か年にわたり実施した。
- 3 発掘調査は、次の期間で行った。

下大五郎遺跡	平成2年7月30日～平成2年10月30日
下川原遺跡	平成3年7月8日～平成3年10月11日
谷ノ口遺跡	平成4年7月7日～平成4年10月30日
渡り口遺跡	平成6年3月24日～平成6年8月9日

なお、谷ノ口遺跡は、調査時点では薄谷（すすきだに）遺跡と呼称したが、報告書を執筆する際に字名の谷ノ口に名称を変更した。
- 4 現地での実測・写真撮影等の記録は、主に山田洋一郎・石川悦雄・東憲章・飯田博之・松林豊樹が行った。
- 5 空中写真撮影は、有限会社スカイサーベイに委託した。また、水田遺構などの自然科学分析については、株式会社 古環境研究所に委託した。
- 6 報告書作成における図面の作成・実測・トレース等は、山田・石川・東・飯田が整理作業員及び日
a 広人の協力を得て行った。また、遺物の写真撮影は、山田・東が行った。
- 7 本書で使用した位置図は国土地理院発行の2万5千分の1図をもとに作成し、調査範囲図は都城市作成の都城市基本図を基に作成した。
- 8 石材の鑑定は埋蔵文化財センター調査第二課調査第四係主査赤崎広志が行った。
- 9 土器観察表の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』に掲載した。本書で使用した方位は磁北である。レベルは海拔絶対高である。
- 10 本書で使用した遺構略号は以下のとおりである。

S A……堅穴住居跡	S B……掘立柱建物跡	S C……土坑	S H……ピット
------------	-------------	---------	----------
- 11 本書の執筆は、第Ⅱ章第2節を東憲章が、第3節を飯田博之が、第4節を石川悦雄が行ない、その他は山田洋一郎が執筆した。また、編集は山田が担当した。なお、編集の都合により、遺跡の掲載順は調査年度順ではない。
- 12 出土遺物・その他諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

第Ⅰ章 はじめに ······	1
第1節 調査に至る経緯 ······	1
第2節 調査の組織 ······	1
第3節 遺跡の位置と環境 ······	2
第Ⅱ章 調査の成果 ······	5
第1節 下大五郎遺跡の調査 ······	5
1 調査区の設定と概要 ······	5
2 層序 ······	5
3 弥生時代の遺構と遺物 ······	8
(1) 竪穴住居跡 ······	8
(2) 掘立柱建物跡 ······	19
(3) 土坑 ······	19
(4) 出土遺物 ······	21
4 まとめ ······	57
第2節 谷ノ口遺跡の調査 ······	79
1 調査区の設定と概要 ······	79
2 調査の経過 ······	79
(1) 調査区の設定と排水対策 ······	79
(2) 第1調査面 ······	80
(3) 第2調査面 ······	80
3 小結 ······	85
第3節 渡り口遺跡の調査 ······	92
1 調査の概要 ······	92
2 I 区の調査 ······	92
3 II 区の調査 ······	96
4 III 区の調査 ······	96
5 遺物 ······	96
6 まとめ ······	96
第4節 下川原遺跡の調査 ······	103
1 調査の概要 ······	103
2 検出遺構 ······	103
3 出土遺物 ······	103
4 まとめ ······	106

挿図目次

第1図 遺跡位置図 ······	3
下大五郎遺跡	
第2図 調査区設定図 ······	5
第3図 下大五郎遺跡遺構分布図 ······	6
第4図 下大五郎遺跡南東壁上層断面実測図 ······	7
第5図 下大五郎遺跡1号住居跡実測図 ······	8
第6図 下大五郎遺跡2号住居跡実測図 ······	9
第7図 下大五郎遺跡3号住居跡実測図 ······	10
第8図 下大五郎遺跡4号住居跡実測図 ······	11

第9図	下大五郎遺跡5号住居跡実測図	12
第10図	下大五郎遺跡6号住居跡実測図	13
第11図	下大五郎遺跡7号住居跡実測図	14
第12図	下大五郎遺跡8号住居跡実測図	15
第13図	下大五郎遺跡9号・10号住居跡実測図	16
第14図	下大五郎遺跡11号住居跡実測図	17
第15図	下大五郎遺跡12号住居跡実測図	18
第16図	下大五郎遺跡掘立柱建物跡実測図	20
第17図	下大五郎遺跡土坑実測図	21
第18図	下大五郎遺跡1号・2号住居跡出土遺物実測図	22
第19図	下大五郎遺跡3号・4号・5号住居跡出土遺物実測図	24
第20図	下大五郎遺跡6号住居跡出土遺物実測図(1)	26
第21図	下大五郎遺跡6号住居跡出土遺物実測図(2)	28
第22図	下大五郎遺跡6号住居跡出土遺物実測図(3)	30
第23図	下大五郎遺跡6号・7号住居跡出土遺物実測図	32
第24図	下大五郎遺跡7号住居跡出土遺物実測図(2)	34
第25図	下大五郎遺跡7号・8号住居跡出土遺物実測図	36
第26図	下大五郎遺跡8号・9号・10号住居跡出土遺物実測図	38
第27図	下大五郎遺跡11号住居跡出土遺物実測図	40
第28図	下大五郎遺跡11号・12号住居跡出土遺物実測図	41
第29図	下大五郎遺跡包含層出土遺物実測図(1)	43
第30図	下大五郎遺跡包含層出土遺物実測図(2)	45
第31図	下大五郎遺跡包含層出土遺物実測図(3)	46
谷ノ口遺跡		
第1図	谷ノ口遺跡排水对策概略図	80
第2図	谷ノ口遺跡基本土層図	81~82
第3図	谷ノ口遺跡第1調査面実測図	83
第4図	谷ノ口遺跡第2調査面実測図	84
渡り口遺跡		
第1図	渡り口遺跡調査区周辺地形図(S=1/2000)	93
第2図	渡り口遺跡I区土層図	94
第3図	渡り口遺跡II・III区土層図	95
第4図	渡り口遺跡遺構分布図	97~98
第5図	渡り口遺跡出土遺物実測図	99
下川原遺跡		
第1図	下川原遺跡周辺地形及び調査区位置図(S=1/2000)	104
第2図	下川原遺跡遺構配置図(S=1/400)	105
第3図	下川原遺跡出土遺物実測図(1/3)	106
第4図	下川原遺跡A区土層図①(1/40)	107~108
第5図	下川原遺跡A区土層図②(1/40)	107~108
第6図	下川原遺跡A区土層図③(1/40)	107~108
第7図	下川原遺跡B区北壁土層図(1/80)	107~108
第8図	下川原遺跡B区東壁土層図(1/80)	107~108

表 目 次

下大五郎遺跡

第1表 下大五郎遺跡出土弥生土器觀察表（1）～（9）	47～55
第2表 下大五郎遺跡出土石器計測表	56
下川原遺跡	
第1表 水田区画データ一覧表	106
第2表 畦畔データ一覧表	106
第3表 水口データ一覧表	106
報告書抄録	111

図 版 目 次

下大五郎遺跡

図版1 遺跡近景（北から）	60
図版2 1号住居跡完掘状況・2号住居跡完掘状況・3号住居跡完掘状況・6号住居跡完掘状況（南から）・長頸壺出土状況・6号住居跡完掘状況（北から）	61
図版3 8号住居跡完掘状況・4号住居跡完掘状況・9号住居跡完掘状況・10号住居跡完掘状況（南から）・12号住居跡完掘状況・1号棟持柱付掘立柱建物跡	62
図版4 1号・2号住居跡出土遺物	63
図版5 2号・3号住居跡出土遺物	64
図版6 4号・5号住居跡出土遺物	65
図版7 5号・6号住居跡出土遺物	66
図版8 6号住居跡出土遺物（2）	67
図版9 6号住居跡出土遺物（3）	68
図版10 7号住居跡出土遺物（1）	69
図版11 7号住居跡出土遺物（2）	70
図版12 8号住居跡出土遺物	71
図版13 9号・10号住居跡出土遺物	72
図版14 10号・11号住居跡出土遺物	73
図版15 11号住居跡出土遺物	74
図版16 12号住居跡出土遺物	75
図版17 12号住居跡・包含層出土遺物	76
図版18 包含層出土遺物（2）	77
図版19 包含層出土遺物（3）	78

谷ノ口遺跡

図版1 丸谷川と谷ノ口遺跡（東から）・谷ノ口遺跡全景（第XV層、南から）	86
図版2 表土掘削・排水溝の設置・排水ポンプの設置・ベルトコンベアによる排土作業・土層断面（中央の白い砂層がV層）・土層断面（2）・丸谷川の流路変化の痕跡・畦畔断面	87
図版3 第VI層（第一調査面）・足跡・農具痕・畦畔及びプリント畦畔	88
図版4 足跡の精査・足跡断面・足跡（牛）・足跡（人）・IX層に伴う畦畔・同じ位置に設定される畦畔・IX層水田	89
図版5 第XIV層（第二調査面）・畦畔検出状況（1）・畦畔検出状況（2）・畦畔検出状況（3）・水口状に凹む畦畔	90
図版6 出土遺物（表）・同上（裏）	91

渡り口遺跡

図版1 渡り口遺跡調査前の状況・渡り口遺跡I区	100
図版2 渡り口遺跡I区とII区・渡り口遺跡II区	101
図版3 渡り口遺跡出土遺物（陶磁器）・（金属製品・石器）	102

下川原遺跡

図版1 下川原遺跡調査区全景（南から）・下川原遺跡A区	109
図版2 下川原遺跡B区・下川原遺跡出土遺物	110

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

昭和63年、開発事業照会によって都城土木事務所が実施する丸谷川中小河川改修工事においていくつかの遺跡の一部が影響を受ける可能性があることが判明したため、県文化課では予定箇所の分布調査を実施し、土木事務所と随時協議を進めてきた。翌平成元年から文化課では遺跡の状況・性格を把握するため確認調査に着手した。このうち下大五郎遺跡は同年9月13日から14日にかけて確認調査を実施した。確認調査では、当初予想されていたとおり弥生土器等が出土して、また黒色土包含層が良好に残っていることから良好な弥生時代の遺跡であることが確認された。この結果を受け、文化課では遺跡の取扱いについて土木事務所と協議を行い、やむなく影響を受ける箇所について工事着工前に記録保存の措置として発掘調査を行うこととした。調査は、下大五郎遺跡が4,000m²を平成2年7月30日から10月30日まで実施し、その他の遺跡もブラントオパール分析により水田跡が確実視された箇所を中心に、平成3年度には下川原遺跡で2,100m²を7月8日から同年10月11日まで、谷ノ口遺跡は2,500m²を平成4年7月7日から同年10月30日まで、渡り口遺跡は3,300m²を平成6年3月24日から同年8月9日まで調査を実施した。

その後、諸般の事情により整理作業・発掘調査報告書の作成に至らなかったが、平成14年度に文化課と都城土木事務所との協議の結果、平成15年度から2ヵ年間で整理作業及び発掘調査報告書を刊行するはこびとなり、宮崎県埋蔵文化財センターで実施した。

第2節 調査の組織

発掘調査（平成2～6年度）

調査主体 宮崎県教育委員会

教育長	児玉 郁夫（平成2年度）	主幹兼埋蔵文化財第一係長
	高山 義孝（平成3～5年度）	岩永 哲夫（平成5～6年度）
	田原 直廣（平成6年度）	（調整担当）
文化課長	梨岡 孝（平成2年度）	埋蔵文化財係
	長友 巖（平成3年度）	主任主事 北郷 泰道（平成2年度）
	甲斐 敦雄（平成4～5年度）	主 査 面a 哲郎（平成3～4年度）
	江崎 富雄（平成6年度）	埋蔵文化財第一係
課長補佐	片野坂次彦（平成2年度）	主任主事 谷口 武範（平成5年度）
	串間 安國（平成3～4年度）	主 査 谷口 武範（平成6年度）
	田中 雅文（平成5～6年度）	（調査担当）
主幹兼庶務係長	小倉 茂光（平成2年度）	埋蔵文化財係
庶務係長	税田 輝彦（平成3～5年度）	下大五郎遺跡
主幹兼庶務係長	高山 恵元（平成6年度）	主 事 山田洋一郎（平成2年度）
埋蔵文化財係長	岩永 哲夫（平成2～4年度）	下川原遺跡
		主任主事 石川 悅雄（平成3年度）

(調査担当)

谷ノ口遺跡

埋蔵文化財係

主 事 東 憲章 (平成4年度)

調査員 松林 豊樹 (平成4年度)

渡り口遺跡

埋蔵文化財第一係

主 事 飯田 博之 (平成5~6年度)

整理・報告書作成 (平成15~16年度)

調査主体 宮崎県教育委員会

文化課

(下川原遺跡担当)

主幹兼埋蔵文化財係長

石川 悅雄

(渡り口遺跡担当)

埋蔵文化財係

主 査 飯田 博之

(谷ノ口遺跡担当)

考古博物館建設担当

主 査 東 憲章 (平成15年度)

県立西都原考古博物館

学芸普及班

主 査 東 憲章 (平成16年度)

宮崎県埋蔵文化財センター

所 長 米良 弘康 (平成15年度)

宮園 淳一 (平成16年度)

副所長兼総務課長 大蘭 和博

(整理作業担当)

副所長兼調査第二課長 岩永 哲夫

調査第二課調査第三係

総務課主幹兼総務係長 石川 恒史

主任主事 甲斐 貴充 (平成15年度)

調査第二課調査第三係長 菅付 和樹

主 事 柳田 晴子 (平成16年度)

(報告書担当)

調査第二課調査第四係

調査第一課調査第一係

主任主事 日向 広人 (平成16年度)

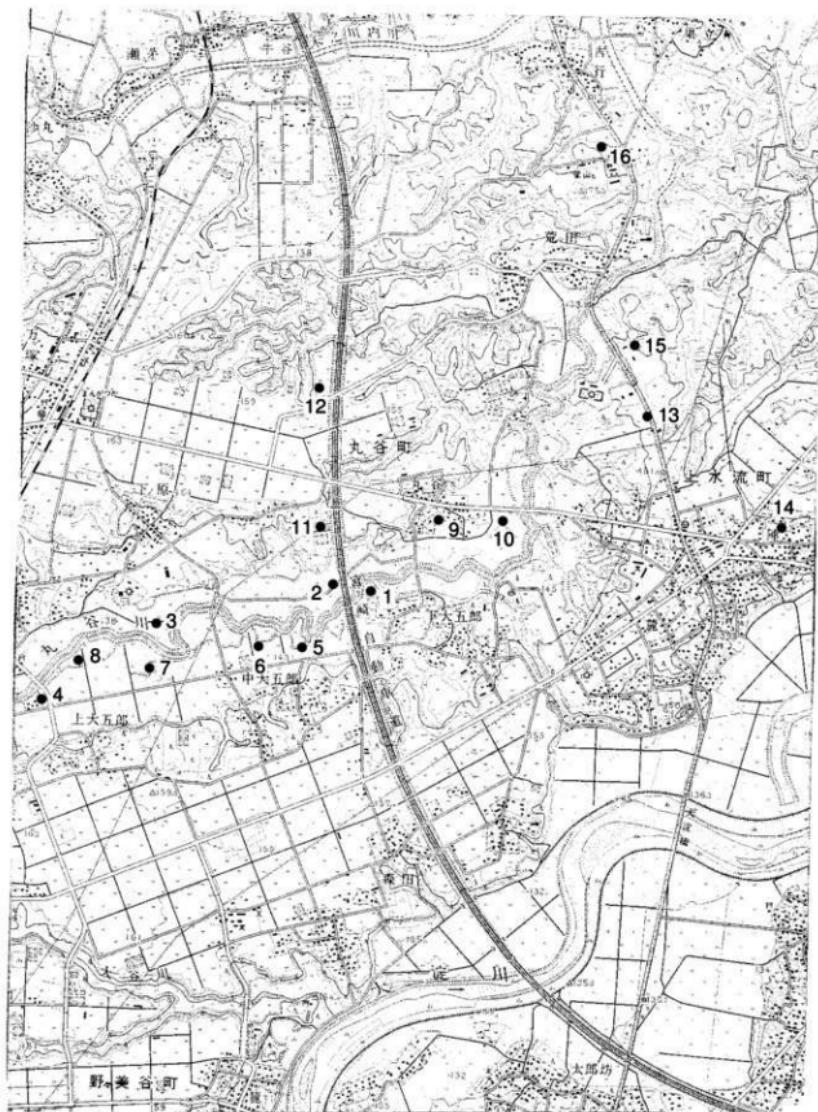
主 査 山田洋一郎 (下大五郎遺跡担当)

第3節 遺跡の位置と環境

下大五郎遺跡・下川原遺跡・谷ノ口遺跡・渡り口遺跡が所在する丸谷地区遺跡群は、宮崎県の南西部に位置する都城市の北東部に所在する。都城市は東、西、南の三方を山に囲まれた盆地の中央にあり、北西には標高1,574mの秀峰高千穂峰を仰ぎ、北西~南西は鹿児島県に接している。下大五郎遺跡は、都城市内北部を東流する大淀川水系の丸谷川沿いの河岸段丘上に位置し、標高は約140m~約142mを計る。また、下川原・谷ノ口・渡り口の各遺跡も丸谷川沿いの現水田地帯に位置し、下大五郎遺跡に比して低地に立地している。これらの遺跡からは、霧島連山の秀峰高千穂峰を遠望することができる。

近年、九州縦貫自動車道宮崎線建設に伴う発掘調査や県営圃場整備事業に伴う発掘調査等で周辺の遺跡の内容が明らかになりつつある。

都城市的遺跡は霧島連山に近いこともあり、火山灰や火碎流などの火山性堆積物が厚いため縄文時代



- | | | | |
|--------------|--------------|------------|-----------|
| 1 下大五郎遺跡 | 2 下川原遺跡 | 3 谷ノ口遺跡 | 4 渡り口遺跡 |
| 5 中大五郎第1遺跡 | 6 中大五郎第2遺跡 | 7 本池遺跡 | 8 上大五郎遺跡 |
| 9 山ノ田第1遺跡 | 10 前畠遺跡 | 11 丸谷第1遺跡 | 12 丸谷第2遺跡 |
| 13 志和地9・10号墳 | 14 築池地下式横穴墓群 | 15 屏風谷第1遺跡 | 16 堂山遺跡 |

第1図 遺跡位置図

前期を遡る遺跡は少ない。旧石器時代では、市南部の大岩田町大岩田上村遺跡のC地区で細石刃と細石刃核が出土している。

縄文時代

既に報告がなされている丸谷地区遺跡群では、縄文時代の遺構・遺物は、本池遺跡や前畠遺跡で見られた。本池遺跡B区包含層から松山式・指宿式・市来式等の後期の土器が出土している。前畠遺跡では、土坑1基が検出されていて後期の土器が出土している。両遺跡とも現河川からの比高差10m程度の低地段丘線に位置している。周辺の遺跡を見渡すと丸谷第1遺跡で後期の包含層が確認されている。また、屏風谷第1遺跡では早期の集石遺構と土器、石器、晚期の土器類が出土している。堂山遺跡では早期の土坑、集石遺構、配石遺構、土器や石器が出土している。いずれの遺跡も丸谷地区遺跡群に比して標高が20mから30m高い台地や丘陵上に立地している。縄文時代の人間活動の中心が低位段丘上ではなく、比較的高位の台地や丘陵上にあったものと推定される。

弥生時代

弥生時代になると本遺跡の周辺では多くの遺跡が営まれるようになってきた。代表的な遺跡としては、中大五郎第1・第2遺跡や本池遺跡・前畠遺跡などがある。中大五郎第1遺跡は、花弁状住居を含む竪穴住居跡7軒・周溝状遺構3基・掘立柱建物跡2棟・土坑3基が検出されている。中大五郎第2遺跡では、竪穴住居跡6軒・周溝状遺構3基・掘立柱建物跡10棟・土坑2基が検出されている。本池遺跡では、竪穴住居跡3軒・掘立柱建物跡16棟・土坑12基・溝状遺構1条が検出されている。また、山ノ田第1遺跡でも竪穴住居跡が確認されている。

古墳時代

古墳時代になると、前畠遺跡で竪穴住居跡27軒・竪穴状遺構6基・溝状遺構4条・土坑5基が検出されている。また、遺跡の東方上水流町に志和地村古墳群が古くからその所在が確認されている。大正9年に県史跡に指定された。墳丘は、永きにわたる侵食や耕作による掘削で現在では小さい円形状を呈しているものもある。また、付近に群在している地下式横穴墓群は総称して「築池地下式横穴墓群」と呼ばれ、数十基が発掘調査されている。

古代～中世

古代から中世にかけては、本池遺跡が調査されている。掘立柱建物跡や溝状遺構、土坑等が検出されている。中世から近世にかけての都城盆地は北郷氏の本拠地として栄えた。特に中世においては北郷氏（都城島津家）と伊東氏、相良氏が当地方の覇権をかけて熾烈な争いを繰り広げたことでも知られる。

参考文献

- 都城市教育委員会 1996 『丸谷地区遺跡群2』都城市文化財調査報告書第34集
- 宮崎県教育委員会 1979 『丸谷第1遺跡』『九州縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』3
- 都城市教育委員会 2000 『志和地9・10号墳』都城市文化財調査報告書第54集

第Ⅱ章 調査の成果

第1節 下大五郎遺跡の調査

1 調査区の設定と概要

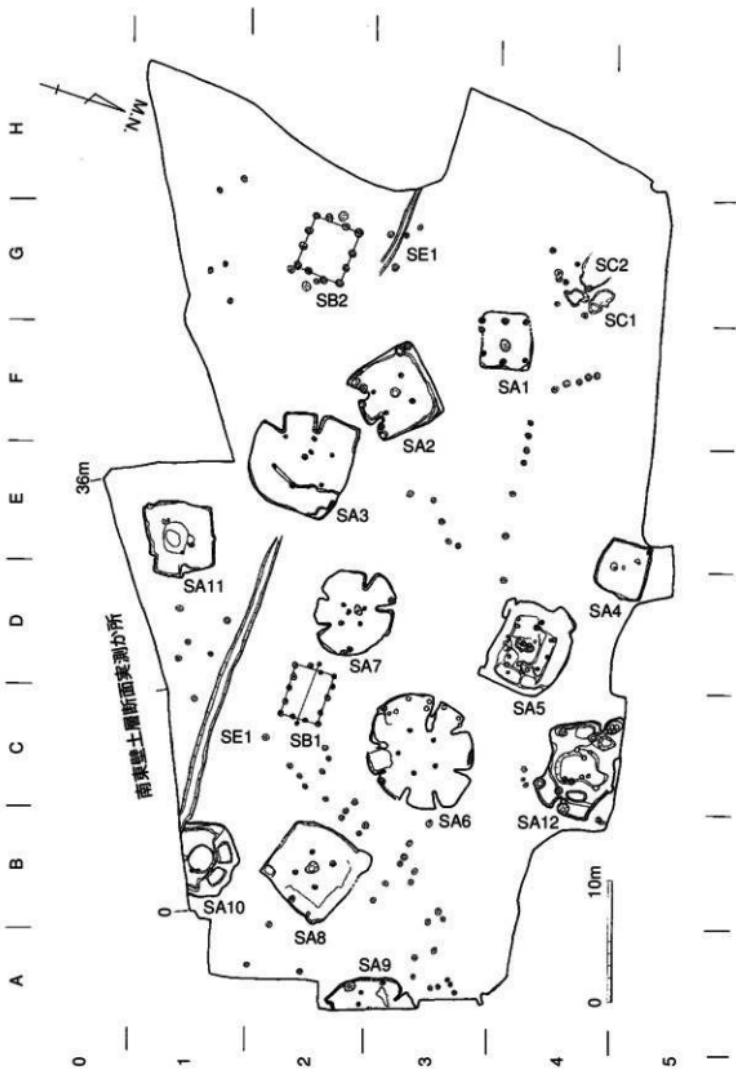
下大五郎遺跡は、宮崎県都城市丸谷町字下大五郎1495番地1外に位置する。調査は、平成2年7月30日から10月30日まで行なった。調査面積は4,000m²である。調査方法はグリッド法で行い10mのメッシュに区画した。その結果検出された遺構は、弥生時代後期の竪穴住居跡12軒・掘立柱建物跡2棟・溝状遺構1条・土坑2基である。弥生時代の竪穴住居跡12軒の内、円形を基調としたものは6号住居跡ほか4軒で他は方形プランを基調としたものである。掘立柱建物跡のうち1棟は、棟持ち柱を持った建物で鹿児島県国分市の王子遺跡・宮崎市の椎屋形第1遺跡などに同様な建物跡がみられる。

2 層序

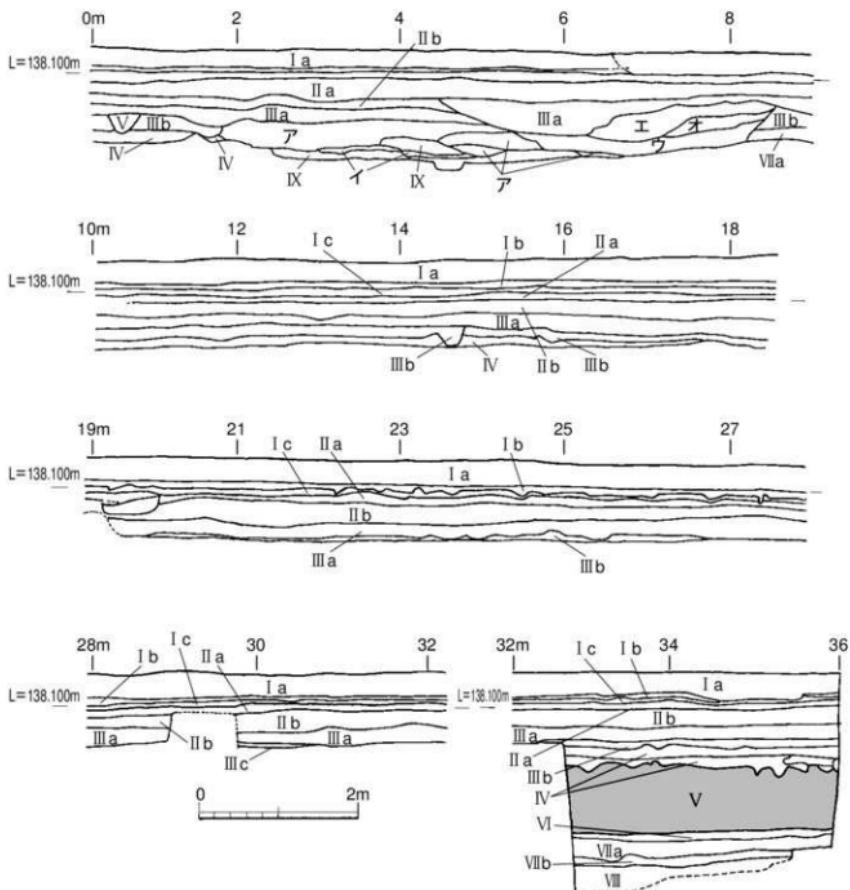
下大五郎遺跡の基本的な層序は第I層が褐灰色を呈する現耕作土あるいは旧水田土層である。近世の陶磁器や弥生土器の小破片を含んでいる。II層は、黒色土で粘性がある。遺物の数は非常に少ない。第III層は黒褐色土であり御池軽石層起源のパミスを含むものである。弥生時代後期の遺物包含層である。IV層は、暗褐色土で御池軽石を多く含んでいる。V層の漸移層である。V層は、黄色を呈する軽石などの中島御池起源の火山堆積物で通称御池ボラと呼称される軽石層である。本遺跡の周辺では層厚は数メートルに達する。第III層での遺構検出作業は大変困難であるため、第IV層ないしこの層の上面で検出した。



第2図 調査区設定図



第3図 下大五郎遺跡 遺構分布図



- I a層 現耕作土
 I b層 赤褐色土 黒色土層に白軽石(微細粒)を含む層が鉄分沈着により赤色に変化した非常に硬い層。
 I c層 暗灰色土 やや砂質で白色軽石をまんべんなく含み灰色を呈しておりやや硬い。
 II a層 黒色土 黒色土のシルト層でオレンジバミスをわずかに含み軟らかい。
 II b層 黒色土 II a層に同じだがオレンジバミスがやや大きく軟らかい。
 III a層 黒褐色土 粘質でII a層より軟らかい。10mm程度のオレンジバミスを含む。
 III b層 黒褐色土 粘質でオレンジバミスを多く含み、III a層に比べ褐色を帯びる。
 IV層 暗褐色土 オレンジバミスを多く含み明るく粒がざらついてV層の漸移層である。
 V層 御池軽石層(黄褐色軽石) 砂質を含み大きい軽石が上層へ浮き、下層はハマシで沈殿している。水の擾乱を受けたものか。
 VI層 漆黒色土 少量のアカホヤを含んでいる。いわゆる「クロボク」層で通常アカホヤ層の上面に位置する。

- VII a層 黒褐色土 アカホヤがまんべんなく混ざり、層自体は軟らかく粒子でねっとりしている。通常アカホヤ火山灰層がある層。水性の搅乱層の可能性あり。
 VII b層 暗褐色土 VII a層より黒くないが硬い層である。同じくアカホヤを含みシルト質でさらさらである。
 VIII層 灰青白色土 上層ではVII b層より薄い色で下部になるにつれ黄白色へ変わる。カシワバン層のようなくさらさらとした微粒子を含んでいる。
 IX層 黒褐色土 粘質で、オレンジバミスはIII b層に比べて少なくやや硬い。
 アイ 黒褐色土 V層に同じだがやや硬い。
 ウ 黒色粘土 10号住居内の硬化面で貼床と考えられる。粘質でオレンジバミスを多く含む。
 オ 暗褐色土 a 層より黒く粘りがある。オレンジバミスが少ないとされる。
 エ 暗褐色土 ほとんどオレンジバミスである。
 オ 暗褐色土 ばさづく。オレンジバミスは少ない。

第4図 下大五郎遺跡 南東壁土層断面実測図

3 弥生時代の遺構と遺物

(1) 穫穴住居跡 (SA)

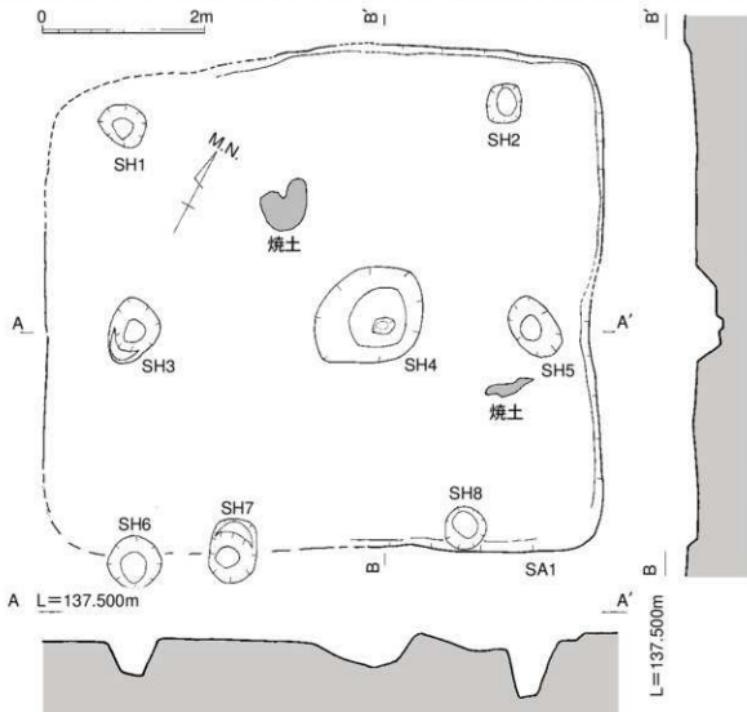
12基検出されている。なお、それぞれの出土遺物については次項で触れる。

1号住居跡 (SA 1 : 第5図)

G・F-3・4グリッドに位置している。方形プランを基調としたもので、長軸4.5m・短軸4.1mを計る。Ⅲb層から掘り込まれていると考えられたが、検出はV層上面で行った。主柱穴は2本、支柱が4本と考えられる。中央に土坑がみられる。土坑の北西部と東側部分に焼土がみられ、東側部分には炭化した木材もみられた。V層面の掘り込みは浅く、壁面の立ち上がりがようやく確認できる程度であった。遺物は、主に北東から東側で出土しているが、いずれも小片で少量である。

2号住居跡 (SA 2 : 第6図)

F-2・3グリッドに位置している。方形プランを基調としたもので南東部分に突出壁をもつものである。長軸6.5m、短軸6.3m、深さ0.25mを計る。突出壁の間にベッド状遺構はみられない。主柱穴は4本柱と考えられる。突出壁を中心に3方向の隅に貯蔵穴を持ち、甕や器台などが埋納されていた。第18図の9の甕は、北東側の柱穴7の中に横向きに倒れるように出土している。16の鉢は、南側に位置する柱穴3の中に口縁部を下にして出土している。21の器台は南東方向の柱穴1の中に口縁部を下にして出土



第5図 下大五郎遺跡 1号住居跡実測図

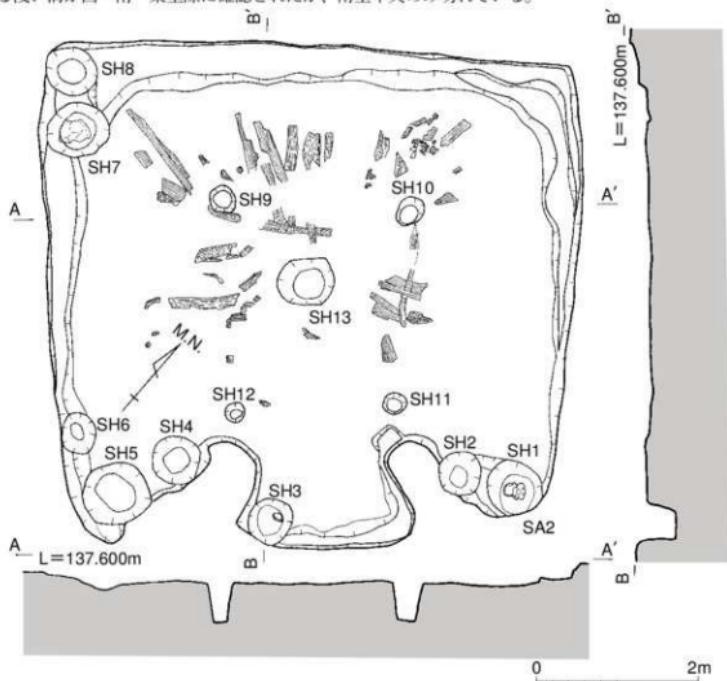
した。19の櫛描波状文の台付鉢は、柱穴4の中に口縁部を下にするように出土している。また、22と23の石庖丁は住居内の北東側の床面直上に重なり合うように出土している。いわゆる焼失住居とみられ炭化材が良好に残存しており屋根材が折り重なるように倒れている様子が観察できた。壁の内側に最大0.40m程のベッド状の部分があり、ベッド状遺構を削平し床面を拡張した痕跡と考えられる。また、中央に炉とみられる土坑がみられ、炭が多く出土し底まで入りこんでいた。底の色は、赤褐色になっていた。この他、埋土中には焼土や微細なベンガラ粒が多くみられた。

3号住居跡 (SA 3 : 第7図)

E・F-2グリッドに位置している。2号住居跡と同様に方形プランを基調として西～南西部分に突出壁を2箇所持っている。長軸8.3m、短軸8.0m、深さ0.40mを計る。主柱穴は6本柱でその周りを開むように炭化材が残存していた。ベット状遺構は南～東側に設置され、南壁際には壁帶溝がみられる。住居の西側床面には焼土がみられる。

4号住居跡 (SA 4 : 第8図)

D・E-4・5グリッドに位置している。4号住居跡は、方形プランである。長軸4.7m、短軸4.1m、深さ0.20mを計る。柱穴については、住居の中央と北西側に各1個を確認した。遺物は少量、全体に小片が出土した。このうち第19図37の磨製石鎌は、住居内の北東部の床面直上で出土した。壁帶溝と思われる浅い溝が西～南～東壁際に確認されたが、南壁中央のみ切れている。



第6図 下大五郎遺跡 2号住居跡実測図



第7図 下大五郎遺跡 3号住居跡実測図

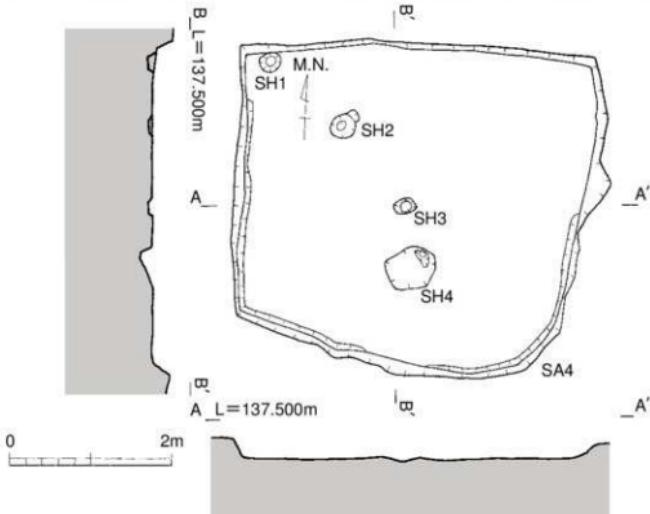
5号住居跡 (SA 5 : 第9図)

C-4、D-3・4グリッドに位置している。5号住居跡は、方形を基調として北西に張り出しを持つ。長軸8.7m、短軸7.0m、深さ0.30mを計る。明確なベッド状遺構ではないが四方に段を持ち長方形の一段低い部分の周辺に柱穴を持つ。ベット状遺構を削平し床面を拡張した痕跡と考えられる。主柱穴は、8本以上と考えられ1~2回の柱の建替え、拡張があったと思われる。また、特筆する点として、住居跡の埋土の上層と下層で磨製石鐵の剥片が多く出土している点から石器の工房跡の可能性がある。遺物は全面に小片が少量散布していた。第19図43・46の磨製石鐵は、住居内の南東部の床面直上で検出した。壁帶溝及び炭化材等はない。

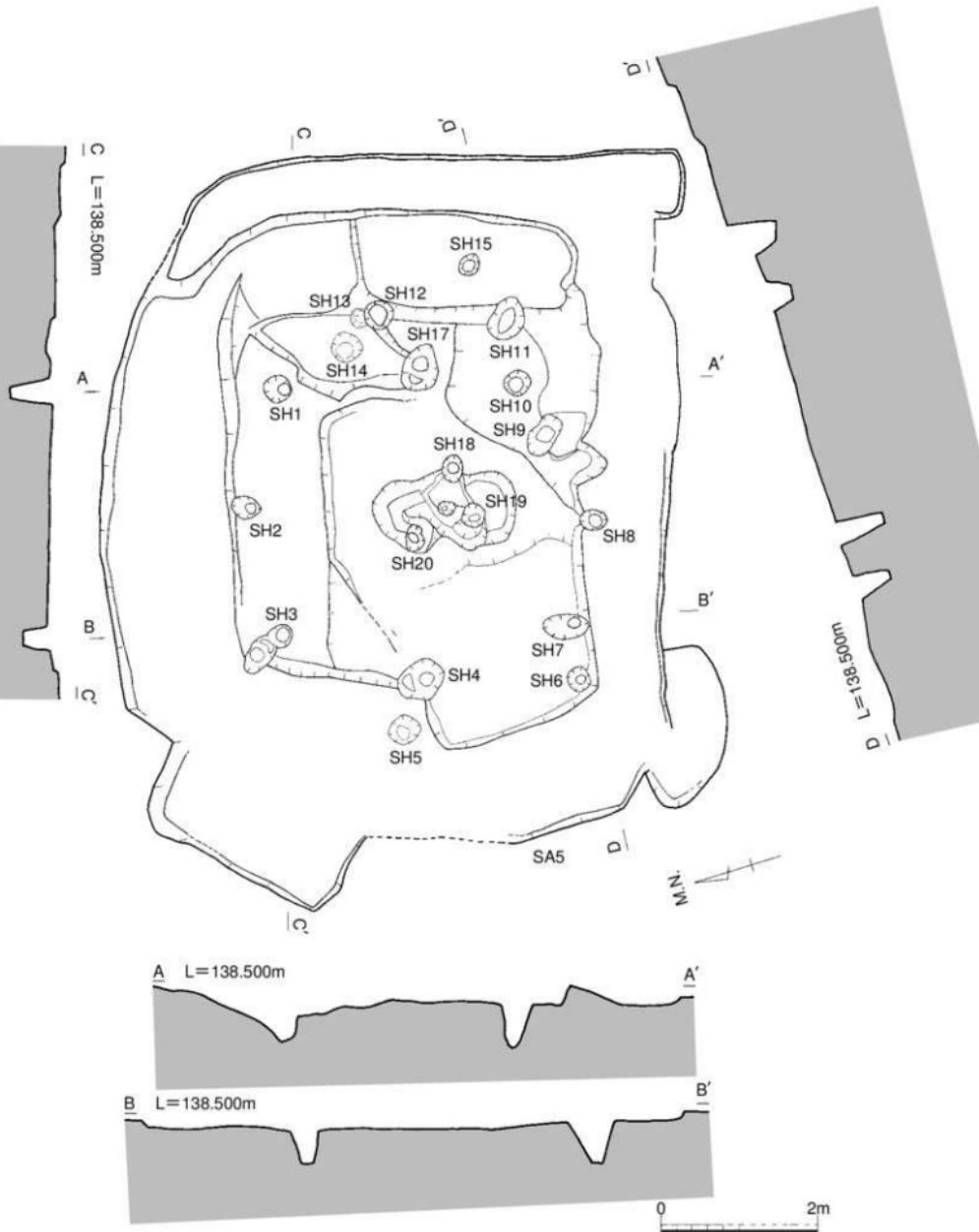
6号住居跡 (SA 6 : 第10図)

C-3グリッドに位置している。6号住居跡は、円形を基調として、7つの突出壁を持ち直径8.9~9.5mを計る本遺跡最大の住居跡である。この住居プランは、花弁状間仕切り住居跡の典型的なものであるが、明確なベッド状遺構は確認できていない。この住居の北西側間仕切り部分で8個体分の長頸壺が完全な形で出土している。また、その南側の突出は削平したような痕跡がみられる。主柱は5本で床面はオレンジバニスが非常に硬くしまっている。その中央には、深さ10cm程の浅い皿状の土坑があり、南西と北東の両端に深さ10数cmの深いピットがみられる。火を用いた痕跡はみられない。このほか周辺の間仕切り部分に支柱穴と思われるピットが、特に突出壁の削平されたところに多くみられる。

また、南側の間仕切り部分は、浅い土坑状に掘り込まれている。所々に壁帶溝がめぐっている。出土遺物のうち第20図の51の小型甕は、南側の間仕切り部に横倒しになって出土した。54の甕は、押し倒されるようにして同じ間仕切り部から出土している。85から88、91から94の長頸壺は北西側の間仕切り部に半円を描くように横倒しの状態で出土した。105の器台は住居跡内の北東部の床面直上に押し潰され



第8図 下大五郎遺跡 4号住居跡実測図



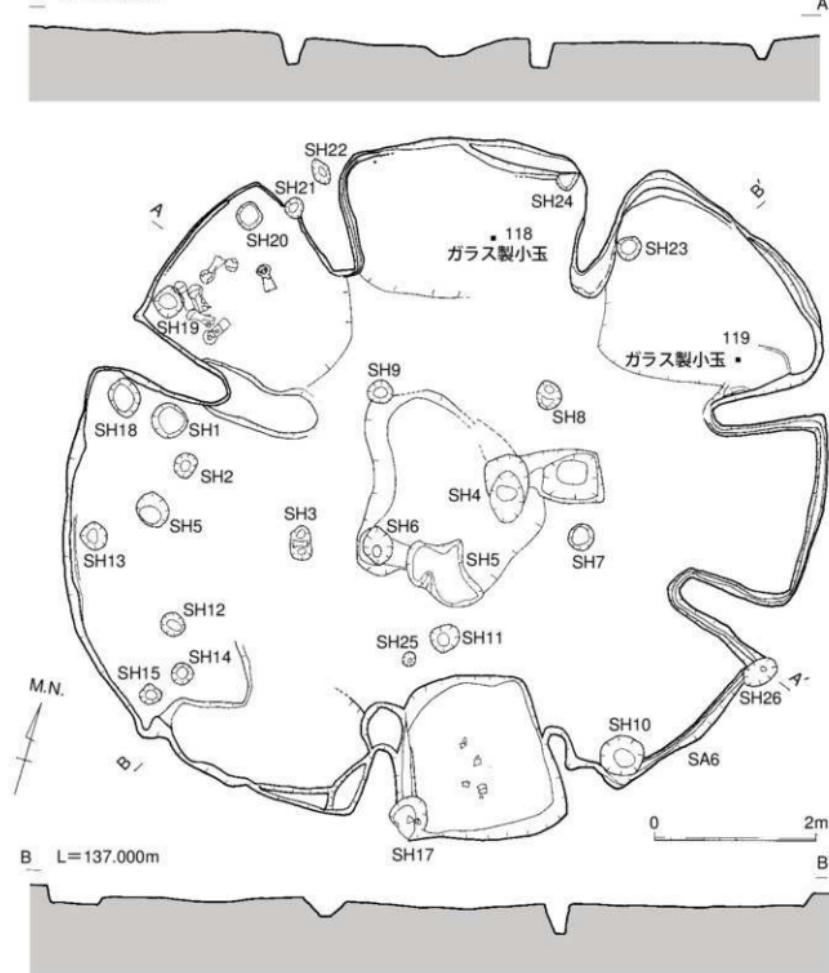
第9図 下大五郎遺跡 5号住居跡実測図

るように出土した。なお、遺物は比較的南半部に多く見られたが、同じ間仕切りの中に長頸壺やガラス製小玉が出土したことからもこの住居は、この集落の中心的な性格のものではないかと考えられる。

7号住居跡 (SA 7 : 第11図)

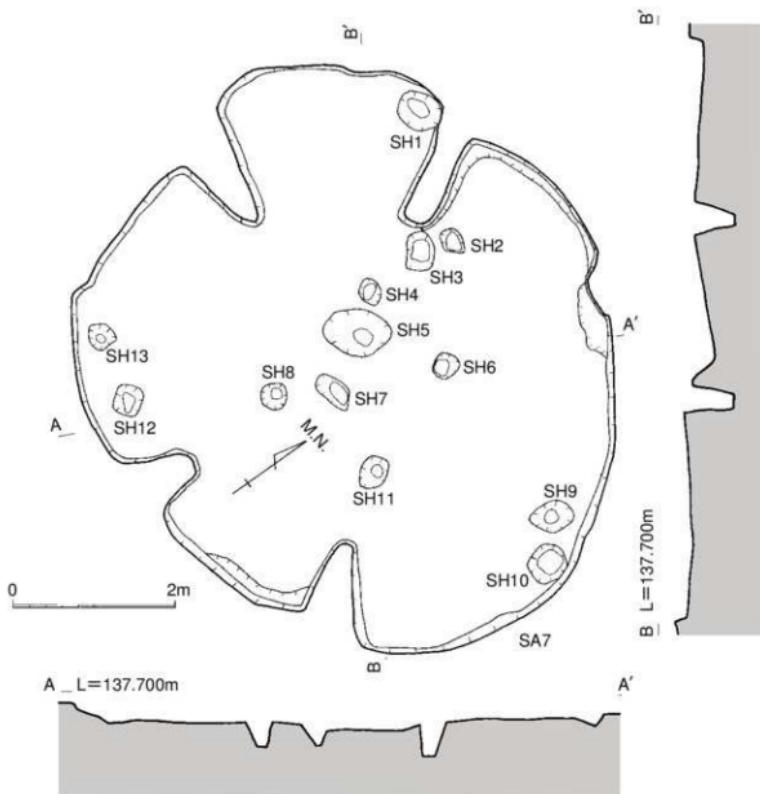
D-2・3グリッドに位置している。7号住居跡は、6号住居跡と同様に円形を基調とした花弁状住居跡である。直径が6.7~7.5mを計る。深さは0.30m程度である。主柱穴は、4本と考えられる。壁帶溝は、一部しか確認できなかった。中央に浅い皿状の窪みはあるが、明確な土坑とは認められない。火を

A L=137.000m



第10図 下大五郎遺跡 6号住居跡実測図

用いた痕跡もない。遺物は、比較的完形に近いものが多く、東側の突出壁の両側に多く出土している。このうち第24図の129から131の壺は、住居内南側突出壁からほぼ完形品で転がったような状態で出土している。148の鉢は、南側突出壁の床面直上で横倒しの状態で出土した。151の杓子の柄は、北東部の床面直上で検出されている。また、北東壁の一部にわずかな内側へのふくらみが見られ、空中写真でみる限り、突出壁を削平したような痕跡が床面に観察される。

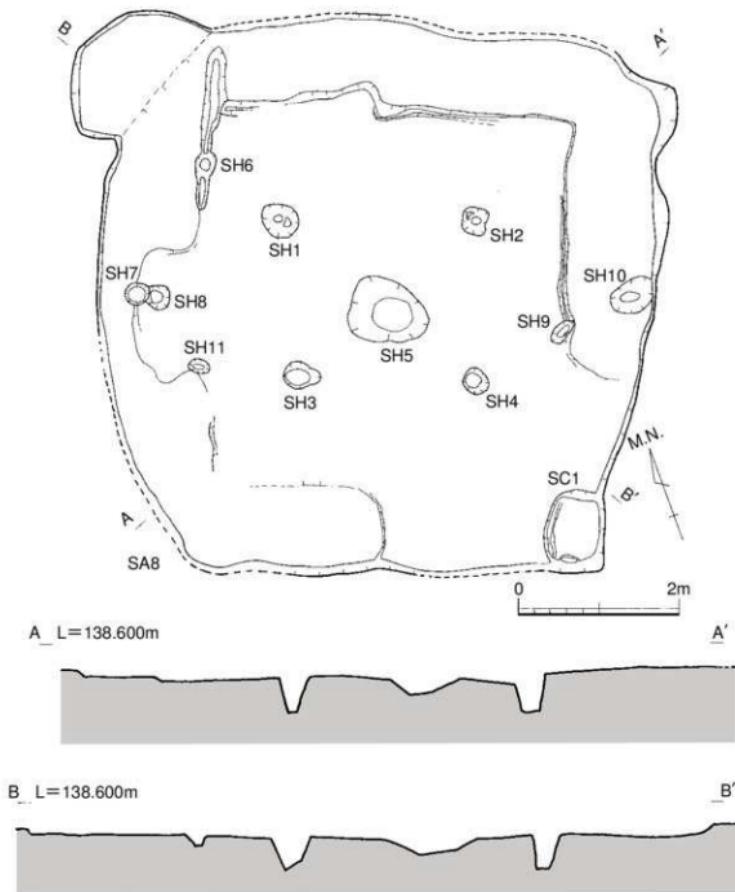


第11図 下大五郎遺跡 7号住居跡実測図

8号住居跡 (SA 8 : 第12図)

B-2・3グリッドに位置している。8号住居跡は方形プランを基調としたものである。主軸上で約6.9mの壁面中ぶくらみの隅丸方形である。主柱は4本、東西両サイドと主柱間に2本ずつ深さ10数cmの支柱穴が見られる。中央には、土坑を持っている。焼土は無い。また、炭化材も確認できなかった。

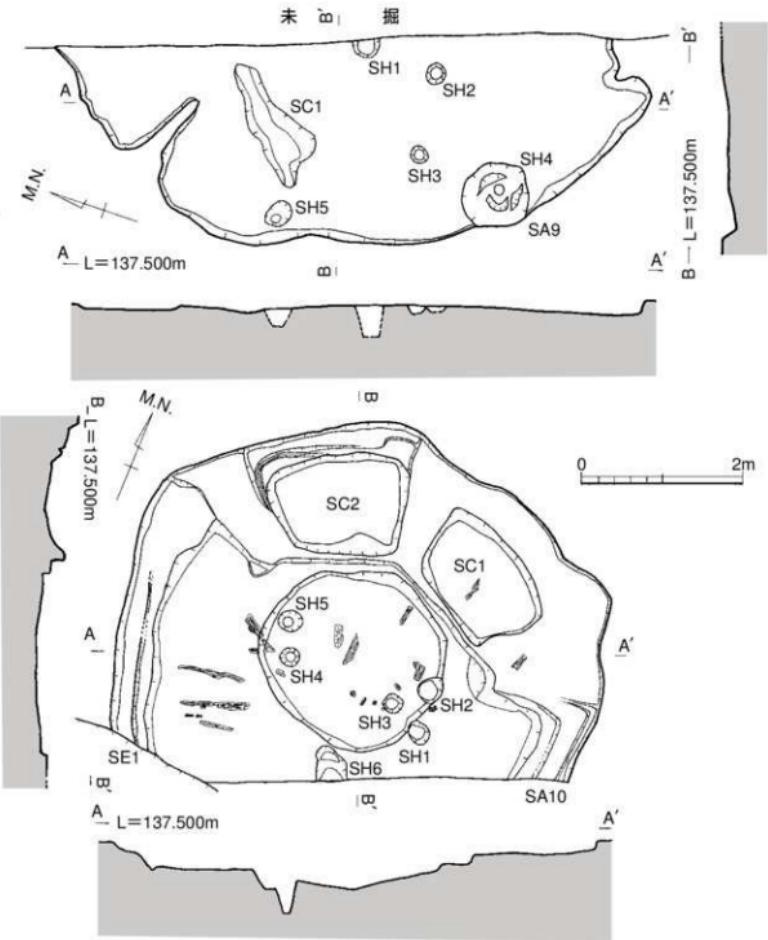
遺物は、西側の両主柱穴の西に比較的まとまって出土している。このうち第25図の154の甕は、北東部のテラス部の床面直上で横倒して押し潰された状態で出土している。高さ数cmのベッド状遺構が南東部を除いて確認できる。ベット状遺構の下には一部溝が巡る。南東隅には、深さ5cm前後の浅い土坑がみられる。



第12図 下大五郎遺跡 8号住居跡実測図

9号住居跡 (SA 9 : 第13図)

A-2・3グリッドに位置している。9号住居跡は、東半分が崖にかかっており全掘できなかつたが形状から円形を基調とした間仕切り住居跡と考えられる。主柱穴は不明である。円形プランとした場合の復元直径は約8m前後になると思われ、深さは現状で検出面から0.30m程度である。ベッド状遺構等は確認されていない。中央に近く深さ40cm程のピットが検出されている。このほか第26図の172の鉢は北西部の間仕切り部の北側の床面直上で検出している。173と174は中央部の床面直上で出土している。突出壁は現状では1か所で、その南側のつけ根付近に土器の集中がみられ、土製勾玉(175)が出土している。炭化材等は検出できていない。



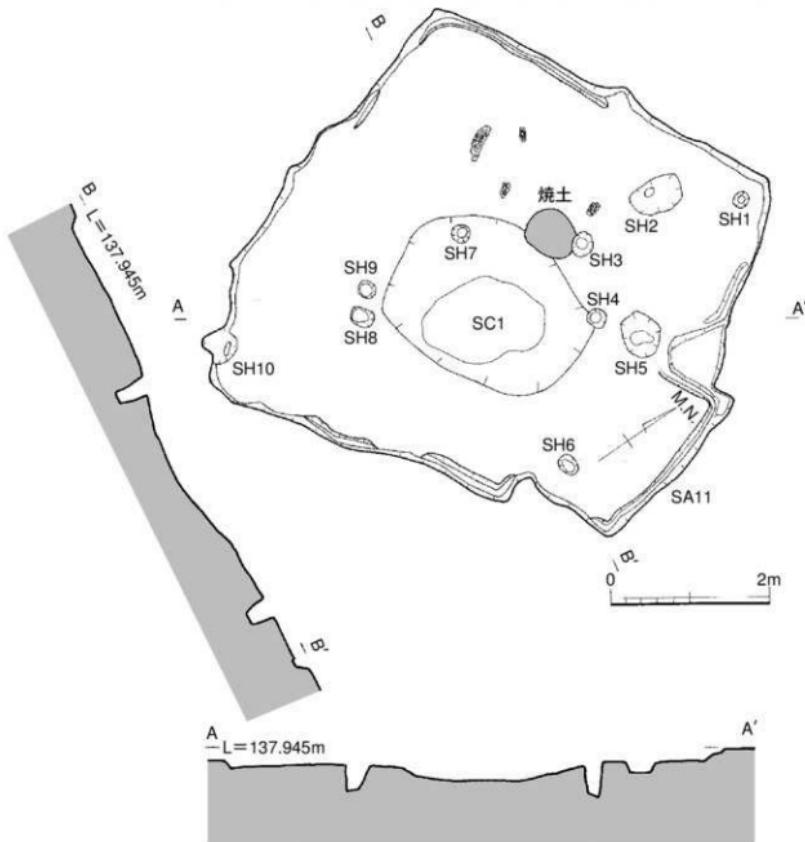
第13図 下大五郎遺跡 9・10号住居跡実測図

10号住居跡 (SA10: 第13図)

B - 1 グリッドに位置している。10号住居跡は、一部調査区外になるために全体の形は検出できていない。基本的には円形プランを基調としている。主柱穴は中央の深さ20cm程の土坑の縁に検出され、2本柱と考えられる。少なくとも1回の建て替えがあったものと考えられる。一部南西端を溝状遺構に切られている。中央の土坑は、角張った円形に近く、中央になるに従ってやや低くなっている。また、現状で突出壁を削平したよう2本の痕跡がみられ、その間仕切りの間のベッド状遺構上に深さ20cm前後の土坑を2か所造っている。壁面近くには周囲をめぐるようにベット状遺構や壁帶溝跡らしい溝がみられ、扯張した痕跡の可能性が考えられる。遺物は中央の土坑の南西と北側の縁付近に集中して出土した。また、埋土下層から微量のベンガラ粒や中央から放射状に断片的に炭化材が確認された。

11号住居跡 (SA11: 第14図)

D・E - 1 グリッドに位置している。11号住居跡は、長軸6.1m、短軸5.2mの方形プランを基調として

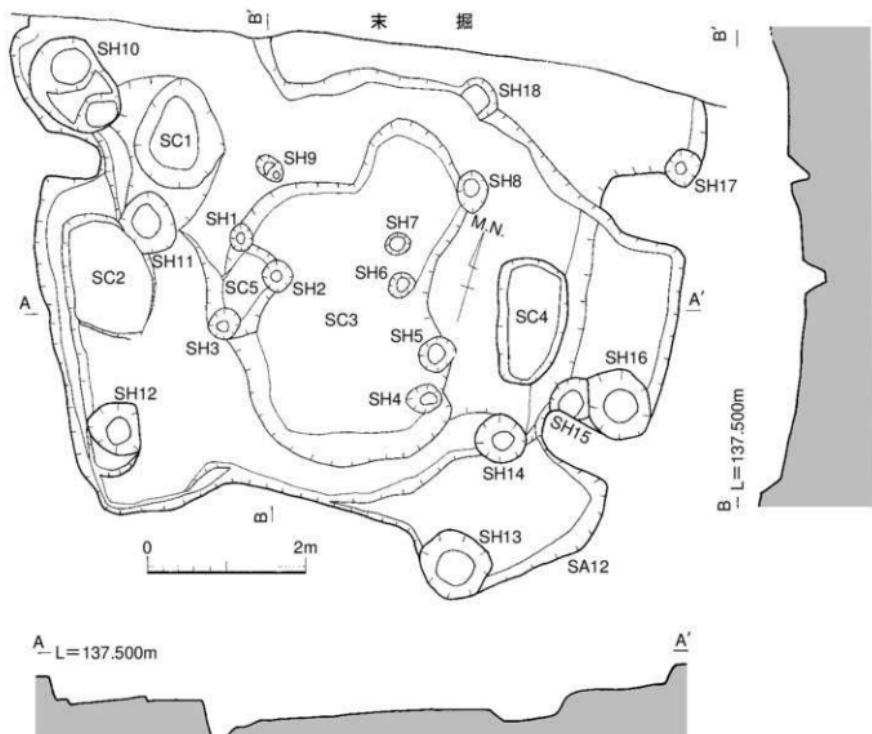


第14図 下大五郎遺跡 11号住居跡実測図

いる。主柱穴は中央の土坑の2本、あるいはその南側面サイドの2本を含む4本柱と考えられる。土坑内のピットは深さ約40cm、南側のピットは約30cm前後である。中央には深さ0.2m程の楕円形の土坑及びその北西縁に焼上面がみられる。一部に壁帶溝もみられるが、記録した溝以外に空中写真からは他の溝らしきものが観察されるため、現在1か所ある突出壁は以前は土坑を挟んで東西対になっていたところを西側は完全に削平された可能性もある。遺物は南側を除いてほぼ全面で出土したが、北半の方に多くみられた。このうち第27図188の甕は、北東側の床面直上で押し潰されたように出土した。203の長頸壺は、住居跡内の中央土坑(SC1)の西側付近に押し潰されるように出土している。205の高环は、南西部の壁付近に押し潰されるように出土し、206の鉢は、北西部の壁付近の床面直上に出土している。208・209の磨製石器については北壁・南壁沿いの床面直上で出土している。また、炭化材も北西側に出土している。

12号住居跡 (SA12; 第15図)

B・C-4・5グリッドに位置している。12号住居跡は、現況で3か所の突出壁を持つ不整形の間仕切り住居跡である。間仕切り部分には、ベッド状遺構や浅い土坑がみられる。中央に不整形の浅い土坑



第15図 下大五郎遺跡 12号住居跡実測図

がみられるが川縁の崖に近く全掘していないため全体形が不明である。壁帶溝は南西角に一部みられる。主柱穴は特定しづらいが、土坑の縁に位置するピットが深さ30~40cmと比較的深いものである。また、遺物のうち第28図の210の甕は住居跡内の北西隅の土坑付近の床面直上で出土した。

（2）掘立柱建物跡（SB）

掘立柱建物跡は、2棟ほど検出されている。このうちの1棟は棟持ち柱を持つ建物跡である。

1号掘立柱建物跡（棟持柱付）（SB 1；第16図）

C・D-2グリッドに位置する。2号掘立柱建物跡と30mほど離れている。本建物跡はIV層上面の検出であったが、実際の柱穴の掘り込みはⅢ層中から認められる。

本建物跡は、IV層上面の検出のため柱穴の実際の掘り込みは大きいものと考える。現在確認できる柱穴の掘り込みでみればSH 1-SH 5 : 420cm、SH12-SH 8 : 450cm、SH 1-SH12 : 360cm、SH 5-SH 8 : 380cmである。梁行3間×桁行4間で棟持柱をもつ建物である。 $\angle SH\ 1\ SH\ 5\ SH\ 8$ は93°、 $\angle SH\ 5\ SH\ 8\ SH12$ は87°、 $\angle SH\ 8\ SH12\ SH\ 1$ は90°、 $\angle SH10SH\ 1\ SH\ 5$ は81°である。棟持柱SH15-SH16を結んだ線よりSH 1は180cm、SH 5も180cmである。SH15-SH16での主軸の方位は、N-82°-E、SH1-SH5はN-97°-E、SH8-SH12はN-83°-Eをとる。柱穴の大きさは、長径0.20m、短径0.12m、深さ28cmで梁間柱間は340cm、桁行間390cm（北側）、410cm（南側）の平均を計る。

2号掘立柱建物跡（SB 2；第16図）

G-2グリッドに位置する。本建物跡もIV層上面の検出である。現在確認できる柱穴の掘り込みでみるとSH 1-SH4 : 440cm、SH7-SH10 : 440cm、SH1-SH10 : 370cm、SH4-SH7 : 370cmである。梁行3間×桁行3間の建物である。 $\angle SH\ 1\ SH\ 4\ SH\ 7$ は93°、 $\angle SH\ 4\ SH\ 7\ SH10$ は86°、 $\angle SH\ 7\ SH10\ SH\ 1$ は96°、 $\angle SH10SH\ 1\ SH\ 4$ は86°である。主軸はN-86-Eをとる。柱穴の大きさは、長径30cm、短径20cm、深さ20cmで梁間柱間は370cm、桁行間は440cm（北側）、430cm（南側）の平均を計る。

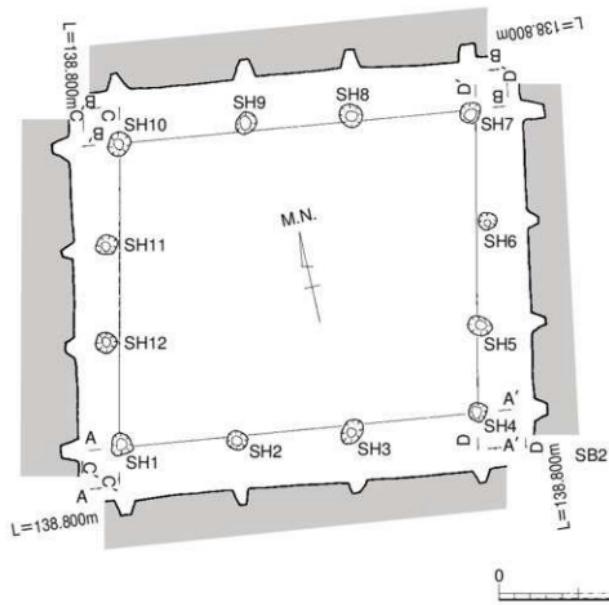
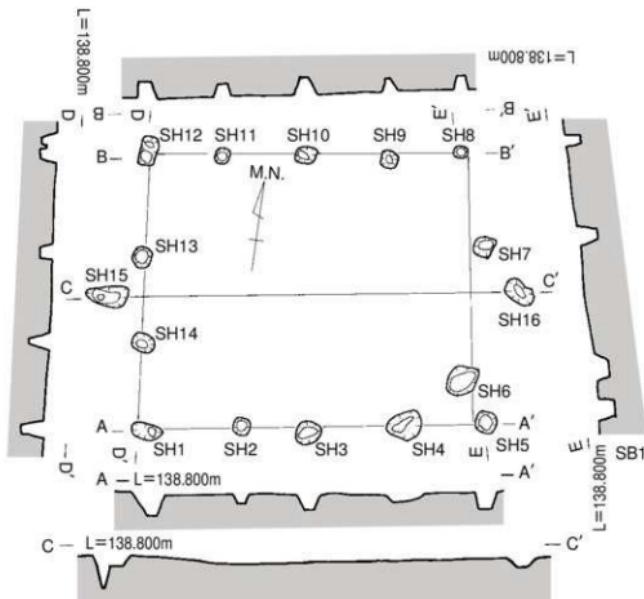
（3）土坑

1号土坑（SC 1；第17図）

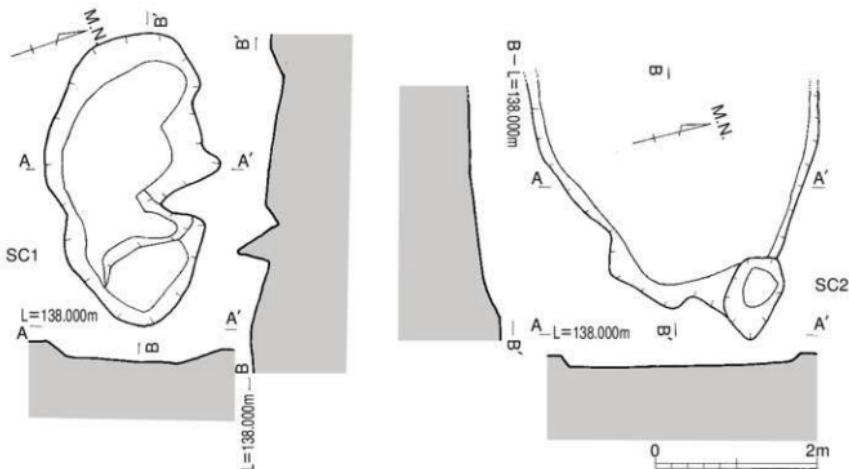
1号土坑は、G-4グリッドに位置している。形状は、半分ほど攪乱で消失しているが楕円形プランと思われる。深さは、0.10m程度の浅い掘り込みを持つ。北東部は、柱穴が切っているので、周りの柱穴よりも若干古いと思われる。土坑本体に伴う遺物は無かったが、周りは、弥生時代後期の土器が出土しているため弥生時代の所産と考えられる。

2号土坑（SC 2；第17図）

2号土坑は、同じくG-4グリッドに位置している。形状は不定形なもので、深さは0.30m程度の浅い掘り込みを持つ。1号と同じく土坑本体に伴う遺物は無かった。



第16図 下大五郎遺跡 挖立柱建物跡実測図



第17図 下大五郎遺跡 土坑実測図

(4) 出土遺物

1号住居跡出土の土器 (第18図)

甕・壺 (1~3) 1は甕形土器の口縁部で口縁がわずかに外傾する先細りの形状を呈する。外面頸部に工具痕が見られ、胴部には煤が付着している。内面の調整は横または斜方向のナデである。2はくの字状に外反する甕の口縁部で、口縁部付近横ナデ、その下位は縱方向のハケ目である。胴部付近に煤が付着する。内面の調整は口縁部付近横ナデ、その下位に斜方向の浅いハケ目が見られる。3は複合口縁壺の口縁部で、外面に櫛描きの波状文と平行文が見られる。

高杯・鉢 (4~7) 4は大きく外反する高杯の口縁部である。風化が著しい。5は杯へ脚部で、脚台付鉢の可能性がある。内外面とも風化が著しく、調整は不明である。6・7は高杯の脚裾部で、7は裾部に円形透かしを持つ。透かし穴は5か所程度と考えられる。内面は風化著しいがナデ調整と思われる。

1号住居跡出土の石器 (第18図)

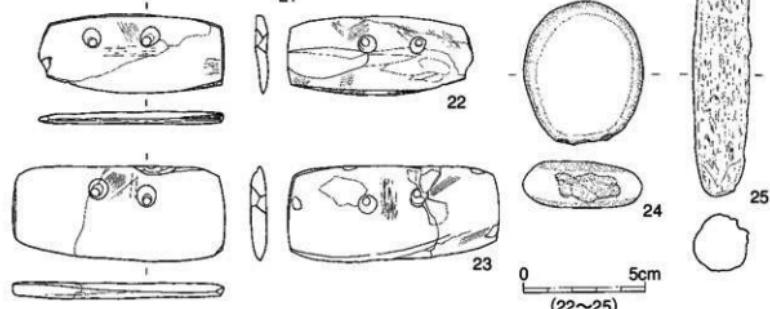
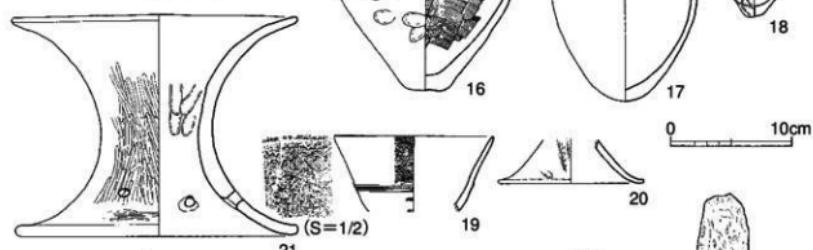
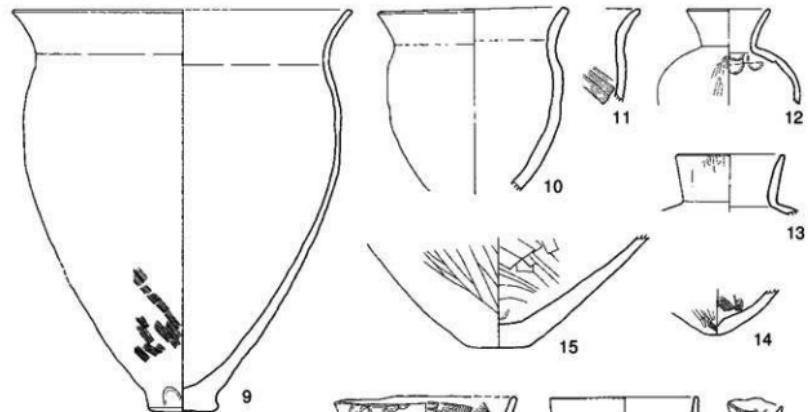
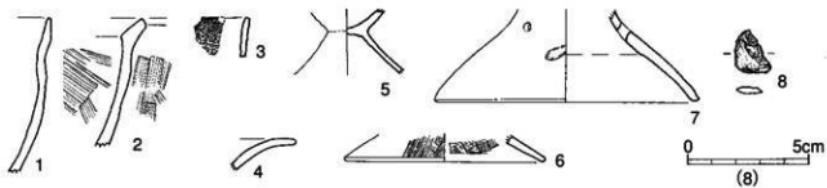
剥片 (8) 8は磨製石鎌等に用いられる頁岩の小片で、節理面と思われる滑らかな表面を持つ。

1号住居跡は検出面がごく浅かったので、遺物の出土量は少ない。

2号住居跡出土の土器 (第18図)

甕 (9~11) 9は口縁部がくの字状に大きく外反して伸びるほぼ完形の甕形土器である。胴部には煤が付着している。底部付近に板状工具によるナデや指壓さえ痕が見られる。10は口縁部が大きく外反する甕で、外面に縱方向の板状工具によるナデ等が見られる。外面胴上部に煤が付着。11は緩やかに外反する甕の口縁部である。内面口縁部はナデ、その下位に斜方向のハケ目が見られる。

壺 (12~15) 12は小型の壺形土器で口縁部が外反し胴部が球形に張るものである。外面は口縁部がナデ、胴部は風化著しいがミガキが見られる。13はわずかに外傾する口縁の直口壺である。口縁部の先端は磨滅して先細りになっている。内面は風化気味であるが横ナデ調整を施している。14は小さな平底を呈する壺の底部である。外面はナデの上に上部はミガキが施されている。内面は板状工具による横ナデが全面に見られる。15も平底の壺の底部である。内面底部付近には指壓さえ痕が確認できる。



第18図 下大五郎遺跡 1・2号住居跡出土遺物実測図

鉢・ミニチュア土器（16～19） 16は平底の完形の鉢形土器である。内面には板状工具による斜方向のナデが見られ、底部付近にベンガラと思われる赤色顔料が見られる。17は卵殻を横半分に切ったような器形の稜線が曖昧で小さな平底の鉢である。18は手捏ねのミニチュア土器で外面に指頭圧痕が見られる。19は薄手の小型の鉢で、外面胴部に施された低い突带上に3条の細い沈線文、その上下に横方向の大変細かな櫛描波状文が描かれている。

高环・器台（20・21） 20は高环の脚裾部でラッパ状を呈する。外面は横ナデの上に一部縦ナデが見られる。21はほぼ完形の器台で裾部から受部にかけて大きく外反する。外面はナデ調整の上に受部下位から縦方向のミガキ、裾部は横方向のミガキが施されている。また裾部に外側から貫通させた円形透かしが6か所見られる。内面は受部・裾部とも横ナデである。

2号住居跡出土の石器（第18図）

石庖丁（22～23） 22・23の石庖丁は、住居跡北東側の床面直上に重なりあうように検出された。22は不整長方形を呈し、研磨によって扁平に加工されている。しかし横長の剥片を利用したために全体にやや湾曲している。両面からの穿孔が2か所見られる。23も22同様平面形は不整長方形を呈し、全体的に湾曲している。両面からの穿孔が2か所背面に沿って開けられている。

敲石（24） 24は砂岩製の敲石で、25の軽石製品と接する状況で住居跡の南東側の床面直上で検出された。敲打痕が長軸側側面に1か所、両平面にはわずかに磨痕が見られる。

軽石製品（25） 25は表面の風化が著しい棒状に加工されたと思われる軽石製品で、敲石の近くで確認された。

3号住居跡出土の土器（第19図）

甕（26～29） 26はいわゆる中溝式の甕形土器の口縁部片で、緩やかにカーブしながら外反する口縁部の下に布目圧痕のある刻目貼付突帯を有している。外面突帶下位は板状工具による縦ナデである。27はくの字状に大きく外反する甕の口縁部である。内面口縁部は横ナデ、その下位に斜方向のハケ目が見られる。28もくの字状に軽く外反する甕の口縁部で刻目貼付突帯を有している。29は布目圧痕の見られる押圧刻目突帯を有する甕の胴部片である。外面はハケ目の上に上部を横ナデする突帯、内面は浅いハケ目が見られる。

3号住居跡出土の石器（第19図）

剥片（30） 30は最大長5.4cmの磨製石鐵等に使用される頁岩の剥片である。

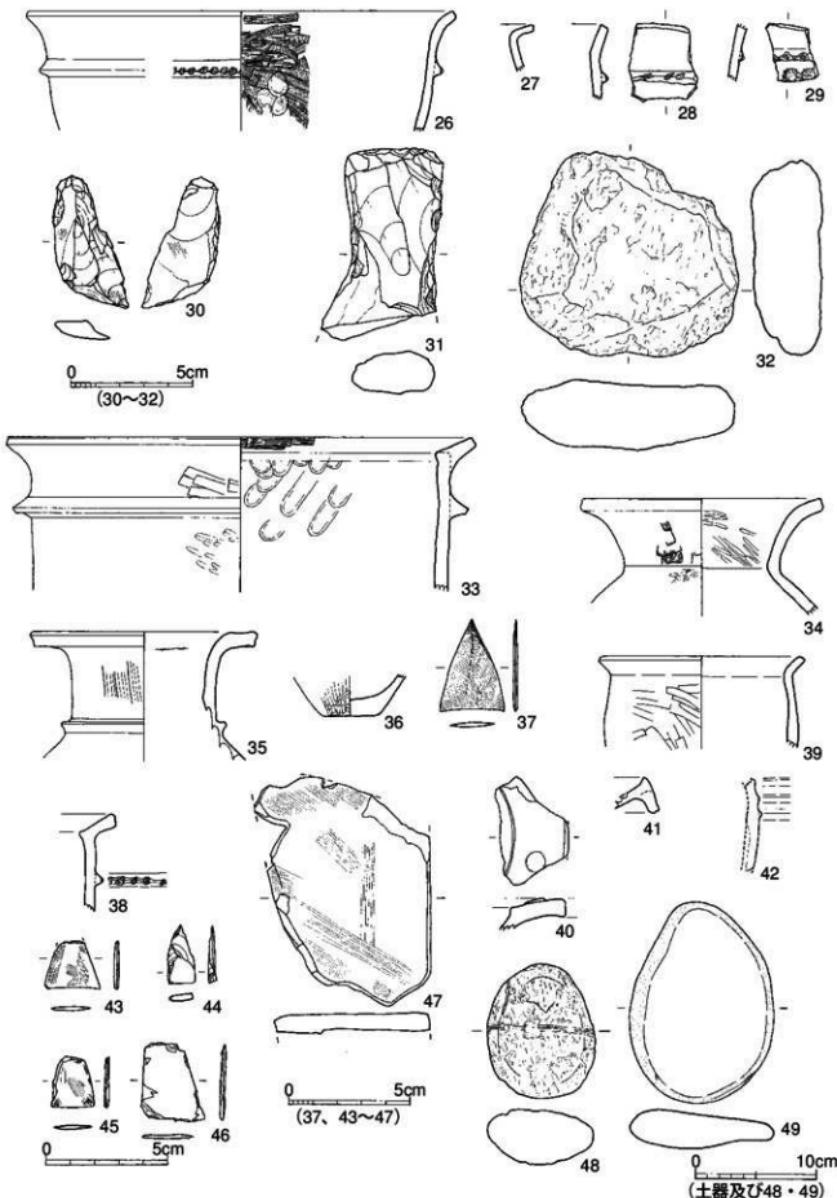
打製石斧（31） 31は打製石斧の基部で、刃部は欠損している。

軽石製品（32） 32は最大長8.35cmの不定形の軽石製品と思われるものである。両平面がわずかに湾曲し滑らかな面を有する。

4号住居跡出土の土器（第19図）

甕（33） 33は甕形土器で厚い台形状の口縁が外面上端部に斜めに貼り付けられ、その下位に台形状の貼付突帯を有している。外面の調整は、口縁及び貼付突帯は横ナデが施され、その下位はヘラナデ状の工具の単位と光沢が見られる。

壺（34～36） 34は口縁部が大きく外反する壺で、全体的にかなり風化しているが、外面調整は口縁部



第19図 下大五郎遺跡 3号・4号・5号住居跡出土遺物実測図

横ナデ、頸部ハケ目、肩部横方向のミガキが見られる。内面は口縁部が横ナデの上をミガキ、胴部は斜方向のナデが施されている。35は水平に張り出す口縁部と頸部に三角状突帯を有する壺である。口唇部は窪んで凹面をなす。風化が著しいが、口縁部付近に横ナデが、頸部に縦方向のハケ目が見られる。36は平底の壺の底部である。外面及び底面はミガキを施し、内面はナデである。

4号住居跡出土の石器（第19図）

磨製石鏃（37） 37は二等辺三角形状を呈した磨製石鏃である。

5号住居跡出土の土器（第19図）

甕（38～39） 38は、胴部上端に斜めに貼り付けられた口縁の内端が突出する甕形土器で、口縁の下位に布目圧痕のある押圧刻目を持つ貼付突帯が施されている。外面の横ナデ調整の下地に縦ハケ目痕がうっすらと見られる。39は推定口径約17.0cmの小型甕の口縁部片である。口縁部がくの字状に短く外反し、調整は外面口縁部付近が横ナデ、胴部には微かに斜方向のハケ目痕が見られる。

壺（40～42） 40は鋤先状口縁を持つ壺形土器で口縁上面に径1.8cm程の円形浮文が貼り付けてある。内外面ともに横ナデを施されているが、外面下部には縦方向のヘラミガキが一部見られる。41は口縁端部が上方につまみ上げられ外面が下方に垂れ下がった口縁部を持つ壺である。口縁部外面に煤が付着している。42は3条の三角突帯を持つ壺の胴部片で、内面は剥離が著しいが斜方向のハケ目と思われる。

5号住居跡出土の石器（第19図）

磨製石鏃・剥片（43～46） 43は二等辺三角形の磨製石鏃で先端部が欠損している。44は磨製石鏃に用いられる頁岩の剥片である。45は二等辺三角形を呈する磨製石鏃で、43同様に先端部が欠けている。46は最大長は3.2cm、最大幅2.65cmの台形状の磨製石鏃の未製品と考えられる剥片である。

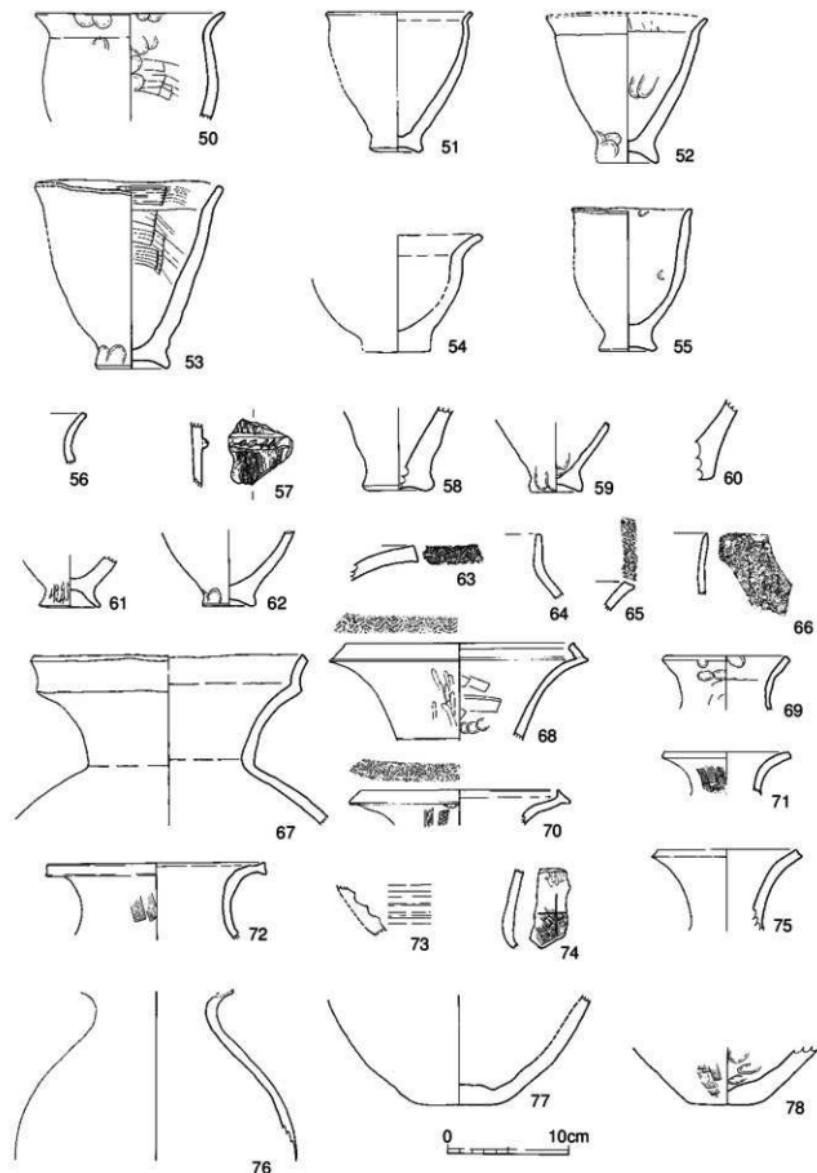
砥石（47） 47は砥石である。図中、上側面と左右両側面に面取りしたような研磨痕が見られ、下側面は自然面のままである。裏面は剥離した面に若干の研磨痕が見られる。砥面は大変滑らかでごくわずかに凸面を呈する。

軽石（48） 48は梢円形を呈した軽石である。特に加工した痕跡は見られないが、図中、正面中央部と裏面の一部に、横方向にごく浅く糸状のもので縛ったような痕跡が2条観察できる。

石皿（49） 49は表裏両面に使用により磨滅した光沢面が観察できる石皿で、梢円形を呈している。

6号住居跡出土の土器（第20～23図）

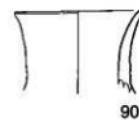
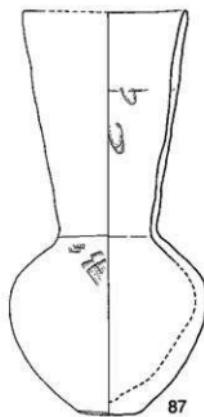
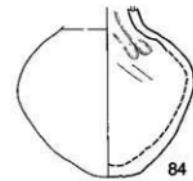
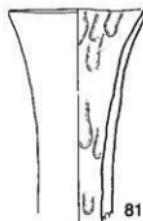
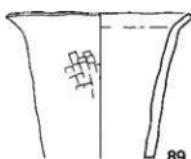
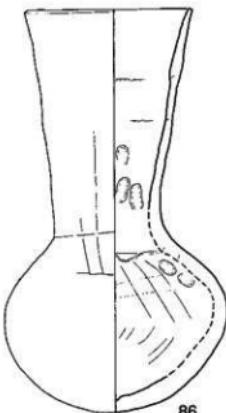
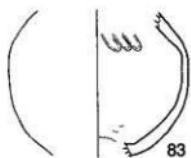
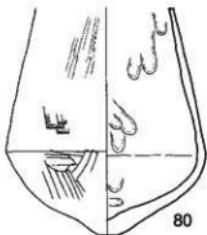
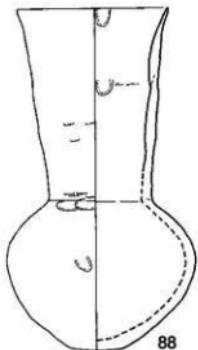
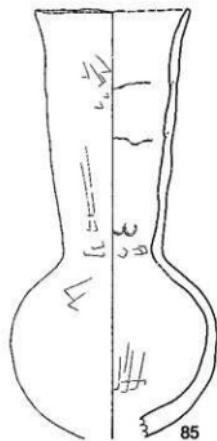
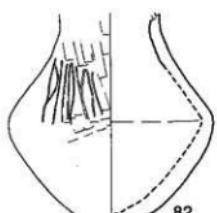
甕（50～60・62） 50はくの字状に緩くカーブした口縁部をもつ甕形土器で、外面の調整は口縁付近が板状工具による縦方向のナデ、胴部は縦ナデである。表面には煤が付着しており被熱によると思われる剥離が進んでいる。51は口縁部が小さなくの字状に緩やかに外反するほぼ完形の小型の甕である。外面の調整は口縁部が横ナデ、胴部が縦ナデ、底部付近には指押さえが残り上げ底を呈している。52も同様の器形・調整で底部付近は横ナデが、胴部には縦方向の工具の単位が観察できる。一部に黒変。内面胴部以下は縦ナデである。53は口縁部の外反が緩やかなほぼ完形の甕である。外面は風化や剥離が著しいが、口頸部横ナデ、底部付近には指押さえが観察でき上げ底である。内面は胴部まで横方向のハケ目、胴部下半は縦ナデである。54は口縁部が外反して長く伸びる甕で、器高が低く底部は広い。外面口縁部に横ナデ、胴部の横ナデと底部付近の縦ナデには幅の狭い板もしくはヘラ状の工具痕・単位が見られる。



第20図 下大五郎遺跡 6号住居跡出土遺物実測図（1）

が、光沢はない。底部はナデ調整の平底である。内面は一部にヘラナデ状の単位が見られる。55は口縁端部がわずかに外傾した丁寧な作りの小型甕で、底部は上げ底である。外面調整は口縁部に横ナデ、胴部から底部にかけて縦ナデが、底部付近は横ナデが施される。内面は口縁付近が横ナデ、胴部以下は縦ナデである。56は緩やかに外反して伸びる口縁部片である。外面口縁部は横ナデ、胴部は縦方向のハケ目と思われる。57は刻目貼付突帯を有する甕の胴部片である。58は上げ底気味の甕の底部である。外面はナデ調整と思われる。底部付近に縦方向の板状工具の端部痕が残る。59は上げ底を呈する甕の胴～底部片である。全体的に風化が著しいが、外面はナデ、底部には指押さえ痕が残る。内面は斜方向のナデか。60は外面に板状工具によると思われる縦ナデ、底部端は指押さえ痕が残る。62は上げ底の甕の底部で、外面底部付近は指押さえ痕が残る。51～55の完形に近い小型甕形土器は南東部の間仕切り付近から出土している。

壺（63～94） 63は口唇部に櫛描波状文が施された壺形土器である。外面口縁直下の調整は横ナデ、その下位に斜方向のハケ目痕が見られる。内面は口縁端部横ナデ、その下位は横あるいは斜方向のハケ目である。64は直口の短頸壺もしくは大型の鉢と思われる口縁部片で外面は丁寧な横ナデを施す。65も63同様口唇部に櫛描波状文が施された壺の口縁部片である。66は口縁上端に櫛描波状文が施された壺の口縁部片である。67は複合口縁壺の口縁～胴部で、口縁部内外面は横ナデ、外面頸部は縦ナデが見られる。全体的に風化が著しく胴部付近の調整ははっきりわからない。ナデか。68も複合口縁壺であるが、口縁の内傾した拡張部には櫛描波状文が施されている。外面の調整は縦方向のミガキで、頸部との境に1条の横走沈線文が見られる。内面の調整は口縁付近の横ナデの下に横方向のハケ目が見られる。69は壺の口縁部片で、口縁端部付近は横ナデ、外面縦方向のハケ目が施される。70は櫛描波状文が施された複合口縁壺の口縁部片であるが、68と異なり口縁端部に粘土帯をT字状に貼り付けるか折り返すかして外面端部を摘み拡張部を成形したものである。拡張部の内外面の調整は横ナデ、外面には指押さえ痕が残り、頸部は縦方向にハケ目が施されている。71は外反する口縁部である。口縁端部外面に指頭痕と爪痕と思われるものが多く残っている。頸部には縦方向のハケ目が施される。内面の口縁端部表面がすべて剥離していることや外面の指押さえ痕など複合口縁が剥落したようにも思えたが、表面の剥離が一様ではないためここでは單口縁として報告する。72は口唇部下端を拡張させた壺の口縁～頸部片で、内外面とも横ナデ、外面頸部には縦方向のハケ目が見られる。全体的に風化が著しい。73は3～4条の貼付突帯を持つ壺の胴部片である。74は長頸になる壺の頸部と思われる。外面上部は縦方向のヘラミガキ、頸屈曲部付近は斜方向のハケ目が見られ、その上に十字形の線刻が施されている。75は71同様外反する壺の口縁部片で、外面は口縁部付近が横ナデ、頸部が縦ナデである。76は壺の頸部から胴部下半である。風化が著しいが、内外面ともナデ調整と思われる。77は曖昧な稜線を持つ平底の底部で、内外面とも縦ナデ調整である。78も曖昧な平底の底部である。外面にハケ目痕が見られ、内面はナデの上に7～8か所の指頭痕の大穴が残る。79はやや上げ底の広い平底を持つ壺の底部である。外面調整のナデには細かな繊維の筋状の調整痕が見られる。内面にも同様の調整痕が見られる。80は胴部最大径が下位下がる無頸壺と思われる。底部は稜線が曖昧な小さな平底を呈し、胴部屈曲部のやや上方から調整法が変化している。外面上部はナデ、下部はハケ目が見られる。また、内面は上部が指幅の縦ナデ、下部がハケ目調整である。82は屈曲の曖昧なそろばん玉状の胴部を持つ長頸壺の頸部下半である。外面全体に板状工具によるナデ調整が施され、底部は稜線が曖昧な平底を呈する。頸部内面はしづらの痕跡が明瞭である。83



0 10cm

81は7号住居跡

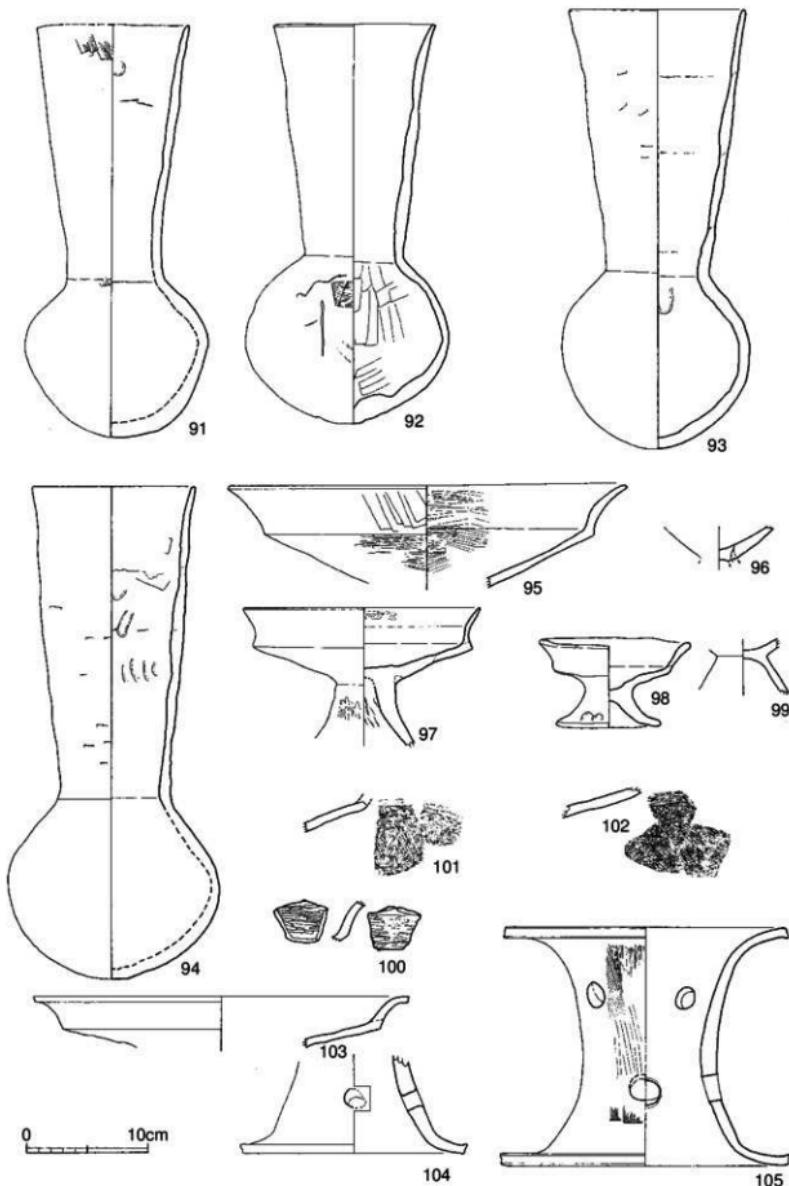
第21図 下大五郎遺跡 6号住居跡出土遺物実測図（2）

は長頸壺と思われる球形の胴部で、頸部から上方及び底部は円形に欠落している。内面には頸部を絞った痕跡や指押さえ痕などの調整痕が見られる。84も長頸壺の頸部から底部である。外面は頸部付近縦ナデ、胴部上半は横に近い斜方向の、下半は斜方向のナデである。底部は稜線がはっきりしない。内面は83同様の調整が施される。

6号住居跡の北西方向の間仕切り部分からは、ほぼ完形に復元できる長頸壺が8個体分一括出土している。これら完形の長頸壺の外面にはその殆どに1~2か所の黒斑が見られる。

85はほぼ完形の長頸壺である。球形の胴部から円筒形の長い口縁部が立ち上がるもので、外面調整は口頸部縦ナデ、胴部上半は横ナデ、下半は丁寧なナデが施される。内面は口縁部から頸部にかけて縦または斜方向に丁寧にナデを施し、胴部は縦ナデ、底部の調整・成形はごく粗い。長い頸部は幅広の粘土帯を積み上げて作られている。86は底部の稜線が見られず殆ど丸底と言える程であるが、中心から偏った位置に4.5cmほどの平坦な底面がある。胴部は中位よりやや上部にわずかに張りが見られる。外面調整は胴部の張りの上まで工具による縦ナデ、下部は丁寧にナデ調整される。内面の幅広粘土帯の接合部には指押さえが確認できる。87は長頸壺の完形品で、口縁部から肩部にかけては縦ナデ、胴部最大径付近は斜方向、下半は再び縦方向にナデ調整が見られる。ナデは板状工具によるものである。胴部外面の3分の1は剥離している。頸部内面は粘土帯の接合部に沿って窪みが見られ、横ナデ調整されている。88もほぼ完形の長頸壺である。内外面の調整や頸部の作り方、外器面の剥離など87とほぼ同様である。89は他の長頸壺と異なり口縁端部がラッパ状に外反するもので、粘土帯の接合方法も他と異なっているが、外面口縁部に横ナデ、その下位は板状工具などによる縦ナデ調整が見られるため、長頸壺として掲載する。この縦ナデは器面がかなり乾燥した後に施されたものと考えられ、工具痕の小さな凹凸が多く見られる。90は短めの口縁が緩やかに外反する壺である。91は86同様、底部が殆ど丸底に近い長頸壺の完形品である。中心から偏った位置に4.7cmほどの平坦な底面がある。調整法や接合法など他と殆ど同じであるが、縦ナデは口頸部まで胴部上半は横ナデ、下半は斜方向にナデ調整されている。黒斑部分の器表面は剥離している。92も同じく中心から偏った位置に径4.0cmほどの平坦な底面がある完形の長頸壺である。外面は大変丁寧なナデ調整が施してあるが、底部付近に多くのキズ窪みが、また黒斑のある胴部には板の角状の部分が強く押しつけられた様な縦のへこみが見られる。93の長頸壺は胴部の半分及び底部付近が欠損しているため図中底部付近は推定復元である。外面口縁～肩部は板状工具による縦ナデ、胴部最大径付近は横ナデ、下半は斜方向のナデである。外面の剥離が著しい。94の長頸壺も口縁部の一部が欠損し胴部下半の一部が表面剥離している以外はほぼ完形品である。底部は中心から若干横にずれた位置に不整形なわずかに凸レンズ状に盛り上がった径4.5cm前後のものが見られるが、据わりも悪く殆ど丸底に近い。内外面の調整は93と同様である。

高坏（95~103） 95は強く屈曲し外反する高坏の坏部で、繊維の筋が見られる板もしくはヘラ状の工具によりナデを施した後、内面全てと外面体部にミガキを施している。96も高坏の坏部片である。風化が著しく調整は不明である。脚部との間に充填された粘土塊の下側は成形時に押されて凹面をなす。97は口縁部が直立し外反する高坏である。脚柱上端に坏部を接合し成形している。98は6号住居跡南西部のSH14付近の間仕切り出土のほぼ完形の高坏である。97に類似した器形の小型のもので、風化がすんでいる。99の高坏はかなり風化しているため調整は不明である。100は内外面ともに丁寧なヘラミガキを施した丹塗り磨研の坏部片である。101も坏部片で口縁部が剥離している。外面に斜方向のハケ目



第22図 下大五郎遺跡 6号住居跡出土遺物実測図（3）

が見られ一部にはミガキもあるようである。内面は丁寧に磨かれ光沢が見られる。102は同じく环部片であるが、外面のハケ目の上に斜方向のミガキが一部見られるほかは、調整・胎土・焼成・口縁部の接合法等101と同一個体の可能性がある。103は95と同様の器形の环部片で、外面部にミガキと思われる光沢が見られる。

器台（104～105） 104は4分の1弱残存している器台の裾部片で、円形透かしが1箇所見られるが4箇所と想定して図化した。透かしを含む表面の剥離が見られる。105はほぼ完形に復元できる器台で、円形の透かしが上下2段に4箇所ずつ互い違いに計8箇所施されている。調整は、口縁と裾部の外外面が横ナデ、ほかは板状の工具により縱ナデが施される。

鉢（61・106～110） 61は脚台を持つ鉢形土器の底部で、外面に縱方向のヘラミガキが施されている。106は底部が殆ど欠損しているが、曖昧な稜線を持つ平底と思われる。風化が著しいがナデ調整のようである。107は厚手の平底を持つ小型の鉢で、内面は板状工具によるナデ調整が見られる。108は平底の鉢で外面下部に下向きのケズリが見られる。109は鉢の口縁部片で風化が著しい。110は稜線の曖昧な広い平底を持つ鉢で、内外面とともに風化剥離が著しいがわずかにナデ調整が見られる。

6号住居跡出土の石器（第23図）

剥片（111） 111は石礫の未製品と考えられる頁岩の剥片である。

砥石（112） 112は両面ともにかなり使用された砥石で3片以上に割れて出土した。側面も面取りされている。

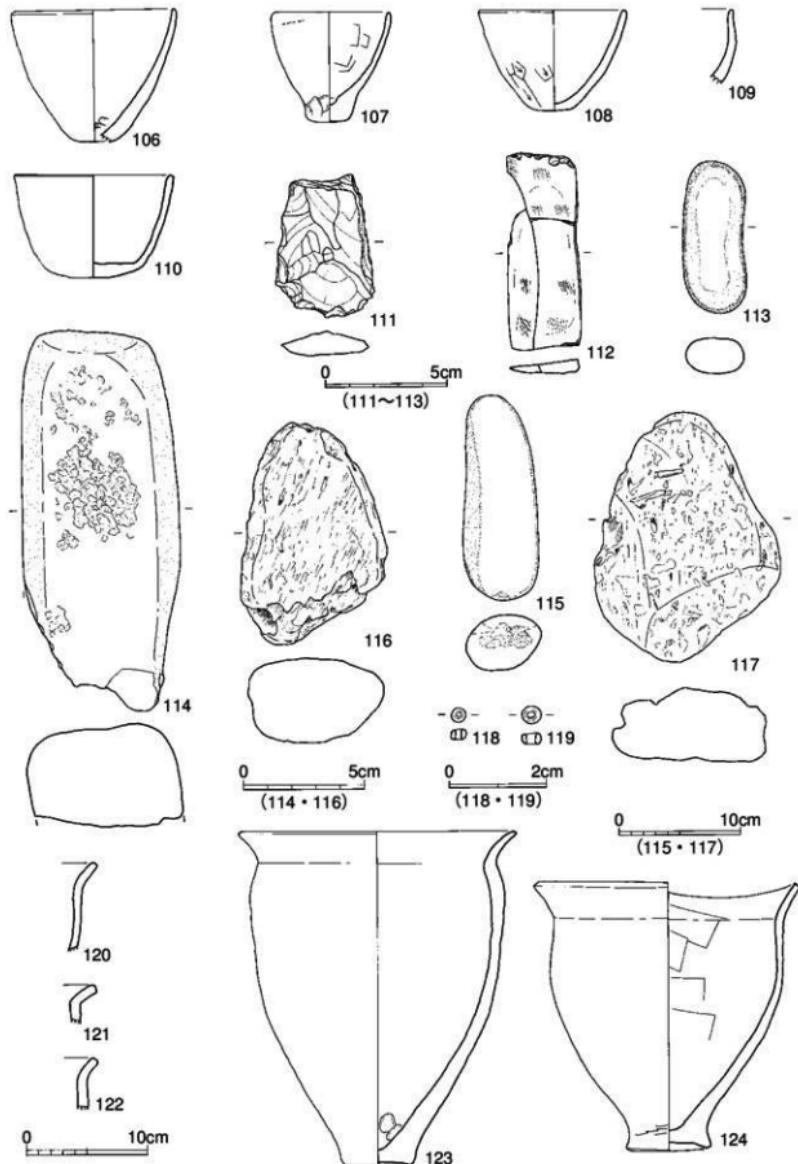
磨石・敲石・凹石（113～115） 113は砂岩の自然礫であるが、両面が節理面にしては多少摩耗しているように見えるためここでは磨石としておく。114は砂岩の凹石である。片面は剥離欠損している。正面中央が敲打により窪んでいる。115は砂岩の磨石・敲石である。図の正面に磨面が、裏面と長軸両端部に敲打痕が見られる。

軽石（116～117） 116～117は、不整形の軽石である。116は表面が摩耗し、117は図の左上と裏面下部に刃物状のものが当たったり削り取ったような痕跡が見られるが定かではない。

ガラス製小玉（118～119） 118～119は、ガラス製と思われる小玉である。小さな気泡を多く含み薄青色を呈している。6号住居跡の北東方向の間仕切り部分から出土している。

7号住居跡出土の土器（第23～25図）

甕（120～128） 120は緩やかに外反する甕形土器の口縁部片である。外面に煤が付着している。121はくの字状に外反する甕の口縁部片である。外面頸部の下位には縦方向のハケ目が見られる。122は120と同じく緩やかに外反する甕の口縁部片である。外面には煤が付着している。123は甕の口縁～底部片で縦に5分の1程度しか残存していない。全体的に風化が著しいが、調整は外面上部に横あるいは斜方向のナデ、下半に縦ナデが見られる。また、外面上部に若干の煤が付着する。124は緩く外反する口縁の甕で口唇部が浅く窪む。外面胴部や内面底部付近の剥離風化が著しい。外面上部に煤が付着し、下部は縦方向にハケ目調整が見られる。内面は単位のはっきりしない工具痕が残る。125は甕のほぼ完形で、くの字状に強く外反する口縁を有する。外面は底部近くまで横ナデ、底部付近に縦ナデが施してある。上半部中心に煤が見られる。126は2分の1強残存する小型の甕である。内外面ともかなり風化しており外面底部付近に辛うじて縦ナデが見られるものの、内面は混和材の砂粒が浮いて見られる程である。



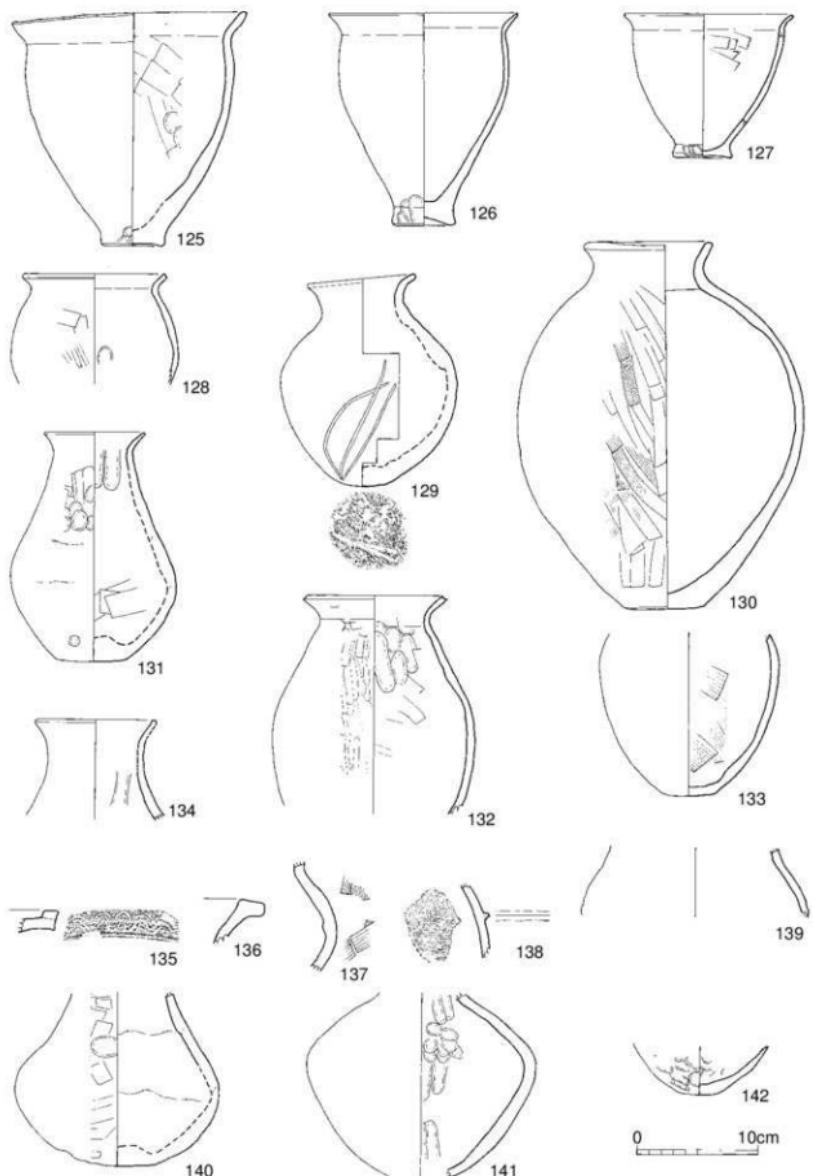
第23図 下大五郎遺跡 6号・7号住居跡出土遺物実測図

127は口縁から胴部下半、頸部付近から底部までの同一個体と考えられる2個の破片を図上で多少強引に合成復元した小型の壺である。内外面ともにナデ調整が見られる。

壺（81・128～144） 81は長頸壺の口頸部片で、6号住居跡出土の小片と接合しているが殆どの破片は7号住居跡出土である。口縁部内面は指で押さえてラッパ状に広げたような窪みが多数残る。128は広口壺の口縁～胴部片である。内外面ともに表面の剥離が多いが胴部外面には斜方向にミガキが施され光沢が見られる。129は完形の壺である。口縁部が一部欠けている。底部は、直径3.5cm前後の境の稜線が曖昧な小さな平底が中心からずれた位置に付けられる。胴部下半に弧状線と2本の沈線が線刻され、また、底部にも縦方向の繊維筋のある物体の押圧痕もしくは短沈線状の刻文が見られる。130も平底の完形の壺である。かなり表面の風化が進んでいるが、外面は斜めもしくは縦方向のハケ目が見られる。また、底部に黒斑がある。131は胴部最大径が下に下がった重心の低い壺で、口縁部の多くが欠けている以外はほぼ完形である。底部は摩耗によるものか光沢が見られ、黒斑がある。132は長胴の壺で、外面調整は口縁部付近横ナデ、胴部はミガキが見られる。内面は口縁部横ナデ、頸部から胴部にかけて指ナデもしくは指押さえ痕が、胴部はハケ目痕が見られる。133は壺の胴～底部片で外面の調整は縦ナデであるが光沢を持つ。134は壺の口縁部で外面調整が光沢のある縦ナデであるが、133と同様の工具を使用しているとみられ、工具の幅や中に見られる筋などがよく似ている。また、焼成の状況、胴部径などからも同一個体の可能性がある。内面は頸部に絞ったような凹凸が見られ、縦方向に指ナデした痕跡か指の押圧痕かと考えられる。風化が進んでおり表面の剥離が著しい。

135は櫛描波状文を有する口縁部である。内面の丁寧なミガキや口縁の幅広粘土帯の貼付け、口径の大きさや傾きなど壺というより器台である可能性があるが、ここでは一応壺の中で報告する。136は壺の口縁部片である。倒L字状口縁の口唇部分は中央がやや凹み、内外面とも横ナデの後一部ミガキが施される。137は球形胴を有する壺の胴部片でハケ目調整が見られる。138は貼付突帯を有する胴部片である。139は壺の頸部から胴部片で風化が著しいがナデ調整と思われる。140は胴上半部が長く伸びる壺の胴部から底部である。外面調整は、胴部最大径の上までが板状工具によるナデ、その下は光沢のある横ナデが見られる。内面は頸部を絞ったような凹凸が胴上半部にかけて見られ、下半は斜方向の粗い工具ナデが見られる。底部は殆ど丸底を呈するが、中心から少しづれた位置に境の稜線がはっきりしない径6.5～8.0cmの楕円形のやや球面をなす底が作られ、大きな黒斑が見られる。141は長頸壺と考えられる胴部片である。外器面は風化が進行しているがナデ調整と思われる。内面は主に指を使ったと考えられるナデ調整が見られる。142は殆ど丸底といえるような底部であるが、境のはっきりしない2.5cm前後の小さな平底が見られる。内外面に多数の指頭圧痕と思われる凹凸が残り、その上をナデ調整されている。143は4条の断面三角形の貼付突帯を有する壺の胴～底部片である。外面調整は、突帯の貼付前は斜方向のハケ目、突帯貼付後は横ナデ、その上下はヘラミガキである。底部付近は風化のため不明。内面も風化のため器面が殆ど剥離しているが、わずかに横ナデ調整が残る箇所がある。144は小型の長頸壺で、調整は6号住居跡出土の長頸壺に類似して外面は口縁部横ナデ、頸部から胴部上半まで0.9cm前後の幅の工具による縦ナデ、胴下半部は同工具による斜方向のナデ調整が見られる。内面口縁～頸部までは横ナデ、指押さえ痕が見られるが、胴部は斜方向のハケ目が残る。頸部内面も前例同様に粘土帯の接合箇所が良く残っている。また、底部付近には黒斑が見られ、胴部の半分強は器表面が全て剥離している。

高环（146～147） 146は円形透かし穴を持つ高环の脚裾部である。透かし穴は半欠で個数は不明であ



第24図 下大五郎遺跡 7号住居跡出土遺物実測図（2）

る。全体に風化が進んでいる。147は高环の裾部で外面は横方向のミガキが見られる。

鉢（145・148～150） 145はわずかに上げ底の鉢の底部である。丁寧な作りで外面はナデ調整が施され煤が付着している。148もわずかに上げ底の鉢である。外面はハケ目のはか底部付近に横ナデが見られる。149は口径が広いほぼ完形の丸底の鉢である。全体的に風化しているがナデ調整と思われる。150は底部が欠損した鉢であるが内外面ともにナデ調整である。器面に剥離面が多い。

杓子形土器（151） 151は杓子形土器の柄と考えられる土製品である。手捏ねによる指頭圧痕が残る。

7号住居跡出土の石器（第25図）

砥石（152） 152は自然石を用いた砥石である。部分的に側面調整を行っている。図の正面が主要砥面である。

軽石（153） 153は不整形を呈する軽石であるが、断面U字状の溝が7箇所以上認められる。

8号住居跡出土の土器（第25～26図）

甕（154～160） 154は完形に近い甕形土器である。断面台形状の口縁を胴部上端にくの字状に、また細い三角形状の突帯をその直下に貼り付けている。内外面ともハケ目調整が見られる。外面胴部に黒斑がある。底面は木の葉底と思われ、葉脈状の細い羽状の線が見られる。155はくの字状に外反する甕の口縁部である。器面に薄く煤及び炭化物が見られる。156は緩く外反する甕の口縁で口唇部が少し窪む。外面に一部煤が付着する。157は下城式の直立する甕の口縁部で、内外面ともに横ナデである。口縁端部と突帯に同時施文の刻目が施される。158は155同様の器形で、口唇部をやや窪ませる。159も同様に外反する甕の口縁部で口唇端部は丸みを帯びている。内外面とも口縁部は横ナデ、その下はハケ目が見られる。160は甕の胴部片と思われる。内外面とも板状の工具でナデ調整を施すが、暗い色調や器壁の厚さなどいわゆる山間部地域に多い厚手の弥生土器と考えられる。

壺（161～163） 161は壺形土器の胴部片で、3条の断面三角形の貼付突帯を有する。風化が著しい。わずかに外面の突帯部分が横ナデの後粗いミガキ、その上下はおそらくハケ目の上をミガキのようである。内面調整はナデもしくは一部ハケ目かと思われる。162は壺の肩部付近で3条の貼付突帯を有する。風化が著しい。163は壺の胴下半部で1条の貼付突帯を持つ。内外面とも風化著しい。

鉢（164） 164は鉢形土器で内面は丁寧なナデが施されわずかに光沢を持つ。口縁内外面は横ナデされる。

コップ形土器（165） 165は甕形土器の底部にしては直立する円筒状の土器のためここではコップ形土器としておく。外面はヘラ状の工具で縦ナデ、底部付近横ナデ、底面は丁寧なナデであるが接地面と思われる部分はやや風化している。出土位置は8号住居跡の南西部のベッド状遺構付近である。佐土原町下那珂遺跡の昭和42年の調査で同様の器形の土器が出土している。

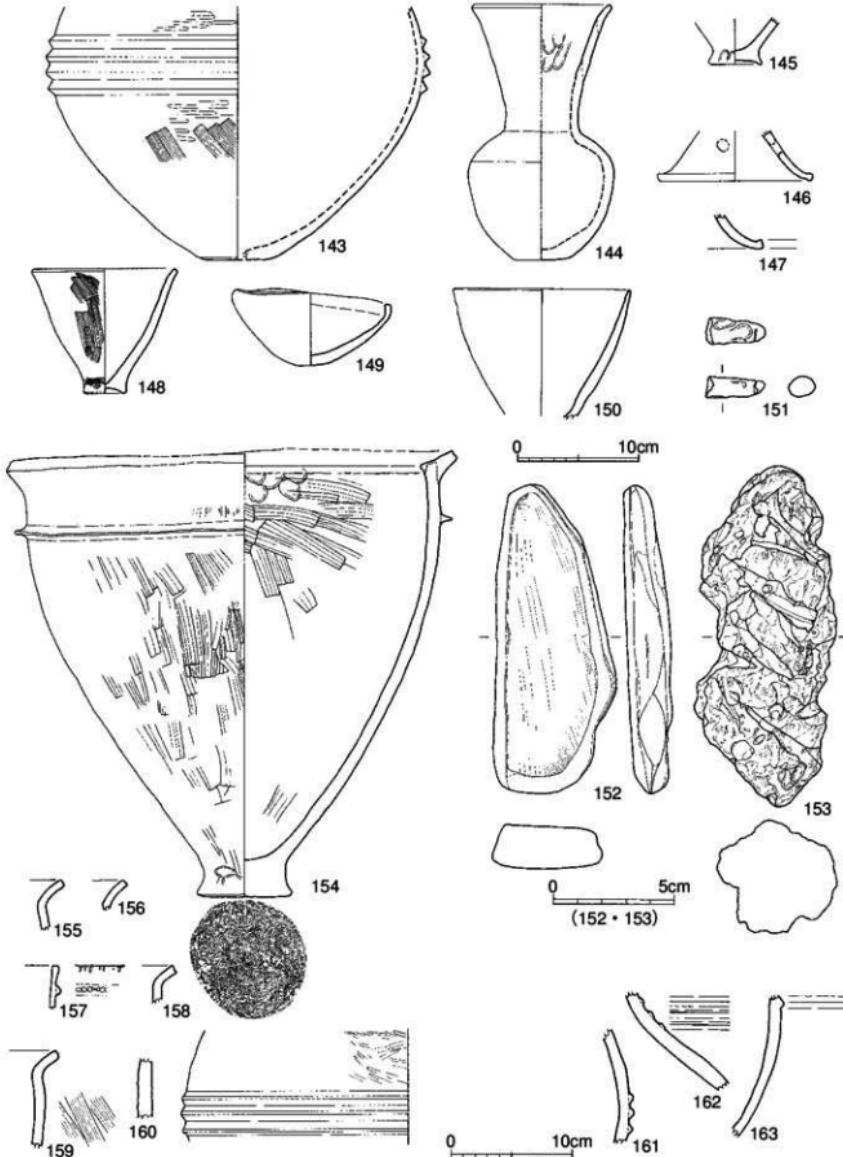
ミニチュア土器（166） 166は手捏ねの鉢で内面は丁寧にナデ調整される。北東部のベッド状遺構付近出土。

8号住居跡出土の石器（第26図）

磨製石鏃（167） 167は磨製石鏃の未製品で刃部の先端付近は研ぎ出していない。

剥片（168） 168は頁岩の剥片である。

砥石（169） 169は砥石で4面全てに研磨痕と一部敲打痕が見られる。上部は折損。



第25図 下大五郎遺跡 7号・8号住居跡出土遺物実測図

9号住居跡出土の土器（第26図）

高坏（171） 171は坏部屈曲の上に緩やかに外反する口縁部を有する高坏である。

鉢（170・172） 170は口縁部片であるが、傾きからは鉢形土器もしくは甕の蓋の口縁部片と考えられる。口縁内外面は横ナデであるが、内面に斜方向のハケ目調整が見られる。172は上げ底を呈する鉢で、外面の調整に縱方向のヘラナデと考えられる光沢のない工具ナデが見られる。

ミニチュア土器（173～174） 173～174は手捏ねの鉢形の土器で、173は全体に指頭圧痕や指紋が残る。

土製勾玉（175） 175は土製の勾玉である。棒状の工具で両側から穿孔している。表面に曲げた時のあるいは乾燥時のひび割れがそのまま残る。

10号住居跡出土の土器（第26図）

甕（177） 177は甕形土器の口縁部片で外面は縱方向のハケ目の上を口縁端部内外面のみ横ナデしている。外面の一部に煤付着。

壺（178～181） 178は壺形土器の口縁部片で外面に櫛描波状文を施す。179は凸レンズ状の平底を持つ壺で、外面調整は粗いミガキである。180と181は同一個体の壺で口縁端部は横ナデ、外面は工具による縱ナデが施されるが、丸底の底部付近は風化のため不明である。風化した器表面付近に一部煤が見られる。

鉢・高坏・器台（176・182～185） 176は内外面をヘラミガキされた鉢形土器片である。11号住居跡出土の口縁部片とも接合している。表面の剥離が著しい。182は内外面ともに横ナデを施し、外面の一部にミガキのような光沢が見られる鉢である。183は高坏の坏部で、外面屈曲部が丸く飛び出している。風化が進んでいる。184は器台の裾部で円形の透かしが1か所、半分程度残存している。185は口縁が内湾する鉢で、外面の下位に斜方向のハケ目が見られるほかはナデ調整である。

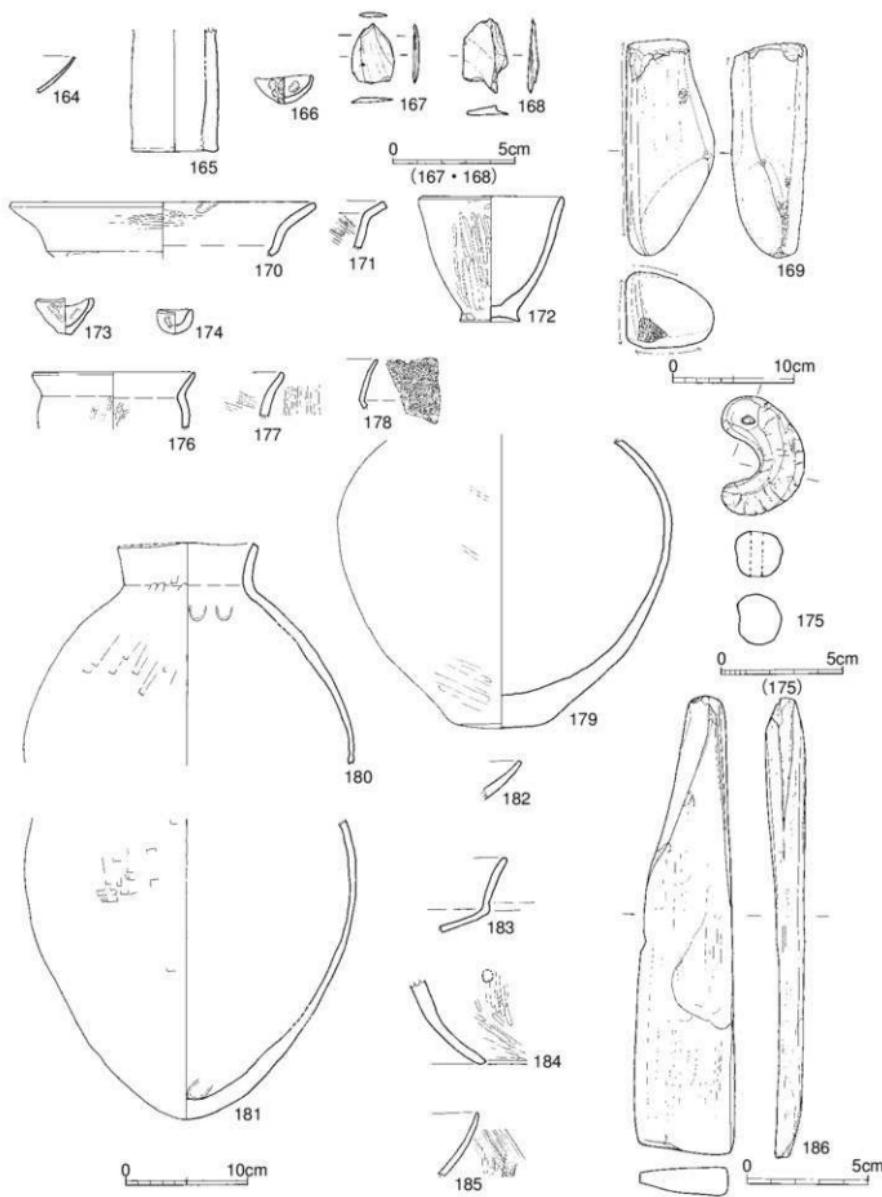
10号住居跡出土の石器（第26図）

砥石（186） 186は滑らかな砥面を持つ砥石で、側面には面調整を行った擦痕が顕著に残っている。東側のベッド状遺構付近から出土した。

11号住居跡出土の土器（第27～28図）

甕（187～195） 187・189は中溝式の甕形土器で、貼付刻目突帯を持つ。187は風化が進んでいるが外面突帯下に斜方向のハケ目が、内面は斜方向のハケ目の下位は丁寧なナデが見られる。外面の一部に煤、内面下部に炭化物が少量付着する。195と同一個体である。189の突帯の刻目はその下位に見られるハケ目原体と同一の工具によるものと考えられる。同様に外面には煤が付着している。188はくの字状に稜をなして外反するほぼ完形の甕である。外面ははっきりとしたハケ目や指押さえ痕らしき窪み等が見られる。胴部内面のナデは大変丁寧なものである。190は刻目突帯を有する甕の胴部である。191は甕の口縁部で、内面のナデは板状工具=ハケ目の原体による可能性がある。192・193は倒L字状口縁がくの字状に跳ね上がった甕の口縁～胴部片で、193は貼付突帯を有している。194はくの字状口縁の甕で内外面にハケ目調整が施されている。195は187と同一個体の甕の底部付近である。外面の風化が著しい。内面は丁寧なナデ。

壺（196～198・200～204・207） 196は短く外反する壺形土器の口縁部片である。197は風化により器



第26図 下大五郎遺跡 8号・9号・10号住居跡出土遺物実測図

表面が殆ど剥離している。頸部の径が小さめであることから壺の口縁部片と思われる。198はいわゆる四線文土器の壺の口縁部片で、拡張された口唇部に2条の凹線を持つ。赤褐色の独特的な色調を呈している。2号住居跡からも同一個体と思われる小片が出土している。200は3条の貼付突帯を有する壺の頸部で、外面下部にわずかに光沢のあるヘラナデ状の調整があることから斜方向のヘラミガキを施していると思われる。内面は器表の剥離が著しい。201は頸部が大きく外反する壺でかなり風化しているが外面下部にミガキと思われる工具の単位が見られる。202は壺の口縁部片と考えられる。先端を欠く。203は口縁端部が緩く外反する長頸壺で、外面は縱方向のヘラミガキ、内面は縦ナデが施され調整は丁寧である。204は壺の頸部で外面には半截竹管状の工具による平行曲線が見られる。207は円形浮文の見られる壺の口縁部片である。

器台（199） 199は成形がメリハリを持ち丁寧で、また外面の縦ナデも光沢を持ち全体に調整が丁寧に成されていることなどから器台の口縁部と考えられる。

高坏（205） 205は四線文土器系の高坏と考えられ、頸部に7本の沈線文を施している。11号住居跡の南西の床面直上の出土である。口縁部内外面は横ナデ、外面は縱方向のヘラミガキが施され、また坏部内面の縦ナデもわずかに光沢が見られることからミガキが風化したものである可能性がある。脚部内面は強く横ナデしケズリ状に見える調整である。口唇部にはわずかなくぼみが1条廻るが脚裾には見られない。

鉢（206） 206は口唇部を凹線状にくぼませ、口縁端部外面に突帯を口縁帯状に貼付ける鉢もしくは甕形土器である。外面上部の一部に煤付着。

11号住居跡出土の石器（第28図）

磨製石鎌（208～209） 208は欠損した先端部を再度研磨したものと思われ、先端が三角形の形状を成さずに欠損面が残る。209は先端と基部を欠く。

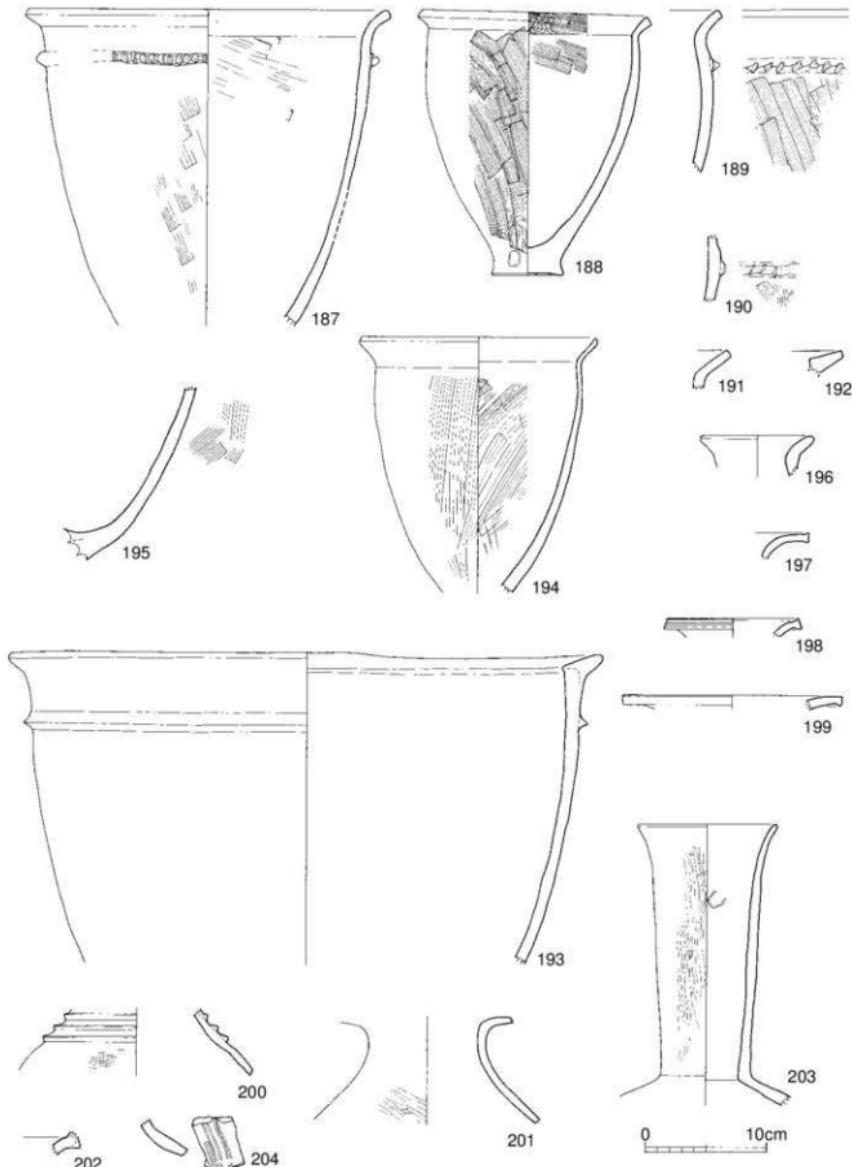
12号住居跡出土の土器（第28図）

甕（210・212・214） 210は完形の甕形土器で12号住居跡の北西隅の土坑付近から出土した。図のように口縁部付近の器形が部分的に異なるが、基本的には断面図のようにくの字口縁が外反して長く伸びるタイプのものである。肩部が張り底部近くで急にすぼまり小さな上げ底の底部に至る。内外面ともにナデ調整で特に内面は調整が丁寧である。外面に煤付着。212は甕のくの字状に外反する口縁部である。外面に煤付着。214は小型の甕の底部と考えられる。内面中央が窪む。

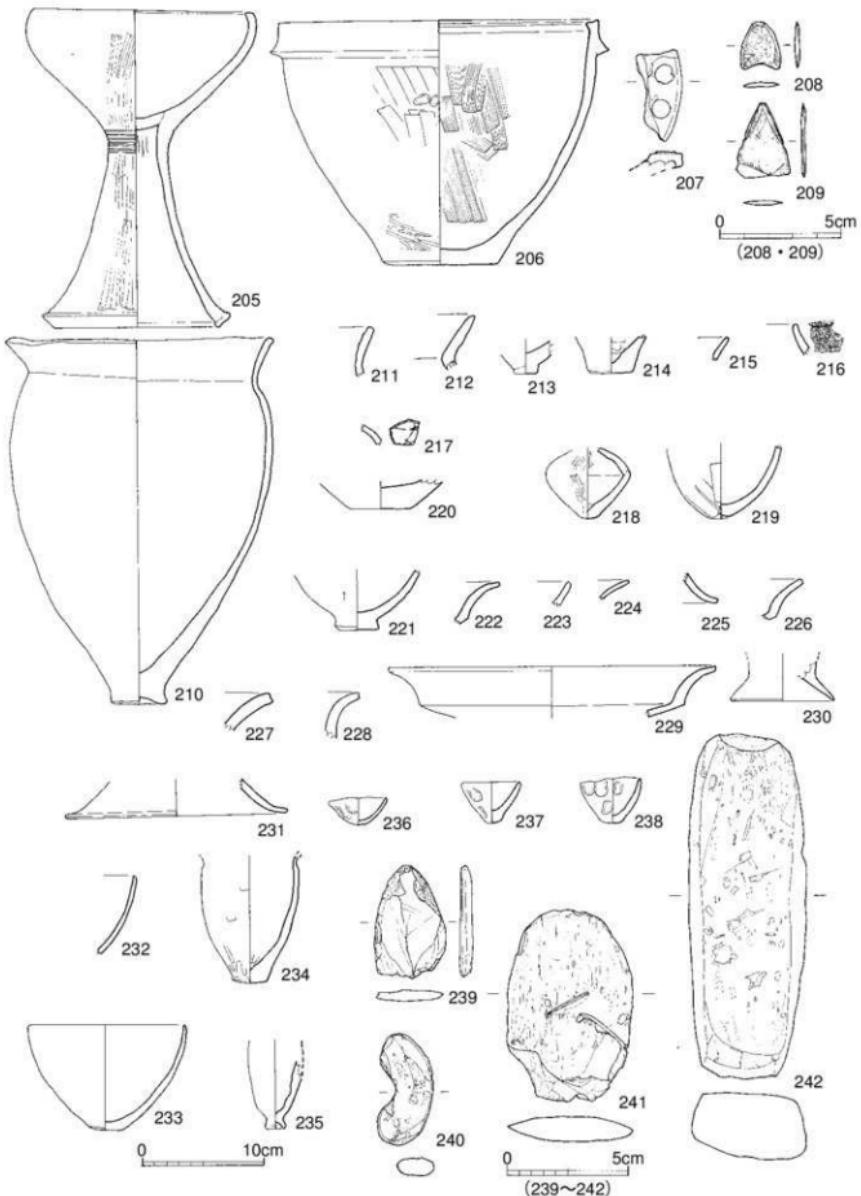
壺（211・216・219～220・223・227） 211は短く外反しながら立ち上がる壺形土器の口縁部で全体的にかなり風化している。216は複合口縁壺の口縁部片で外面に櫛描波状文が施されている。219は小型の壺の胴部下半である。平底の底部は若干窪む。220も壺の平底の底部片である。223はわずかに内湾する小口径の口縁部片と思われ、ここでは壺の口縁としておく。227は大型の壺の口縁部と思われる。口唇部がわずかに窪む。

高坏（222・225～226・228～229・231） 222・226・228～229は高坏の口縁部片である。225・231は高坏の脚裾部片で焼成や胎土、色調などから同一個体の可能性がある。

鉢（215・224・230・232～233） 215は器壁が薄く口径は広いと考えられることから鉢形土器または甕の口縁部と思われる。内外面ともに風化が進んでいる。224は径の割に薄手の土器でここでは鉢として



第27図 下大五郎遺跡 11号住居跡出土遺物実測図



第28図 下大五郎遺跡 11号・12号住居跡出土遺物実測図

おく。調整はナデか。風化著しい。230は脚台付鉢の脚台片か。232は鉢の口縁部片で、内面には特に丁寧なナデ調整が見られる。233は薄い円盤の凸レンズ状の平底を有する鉢で、特に外面は丁寧なナデ調整が施されている。

ミニチュア土器 (213・217~218・234~238) 12号住居跡は手捏ねのミニチュア土器がSH15・SH16付近を中心に多く出土している。213はミニチュアの鉢形土器の底部と思われる。内外面ともかなり風化している。217はミニチュアの壺形土器の胴部片と思われ外面に線刻が施される。外面は滑らかで若干の光沢がありミガキ調整であろう。218も小型の壺で、実用的ではないミニチュア土器と考えられる。外面にはミガキが施され、内面下部は丁寧なナデ調整である。底部は小さな平底を呈し、内面は窪んでいる。234と235はミニチュアの壺形土器で、234は比較的丁寧な作りである。235は外面調整は丁寧なもの内面は手捏ねのままと思われる粗い調整である。脚台状の底部を呈する。236~238は手捏ねの鉢で内外面に指頭圧痕や指紋などが残っている。

12号住居跡出土の石器 (第28図)

剥片 (239) 239は三角形に形状を整えた磨製石器の未製品と考えられる剥片である。

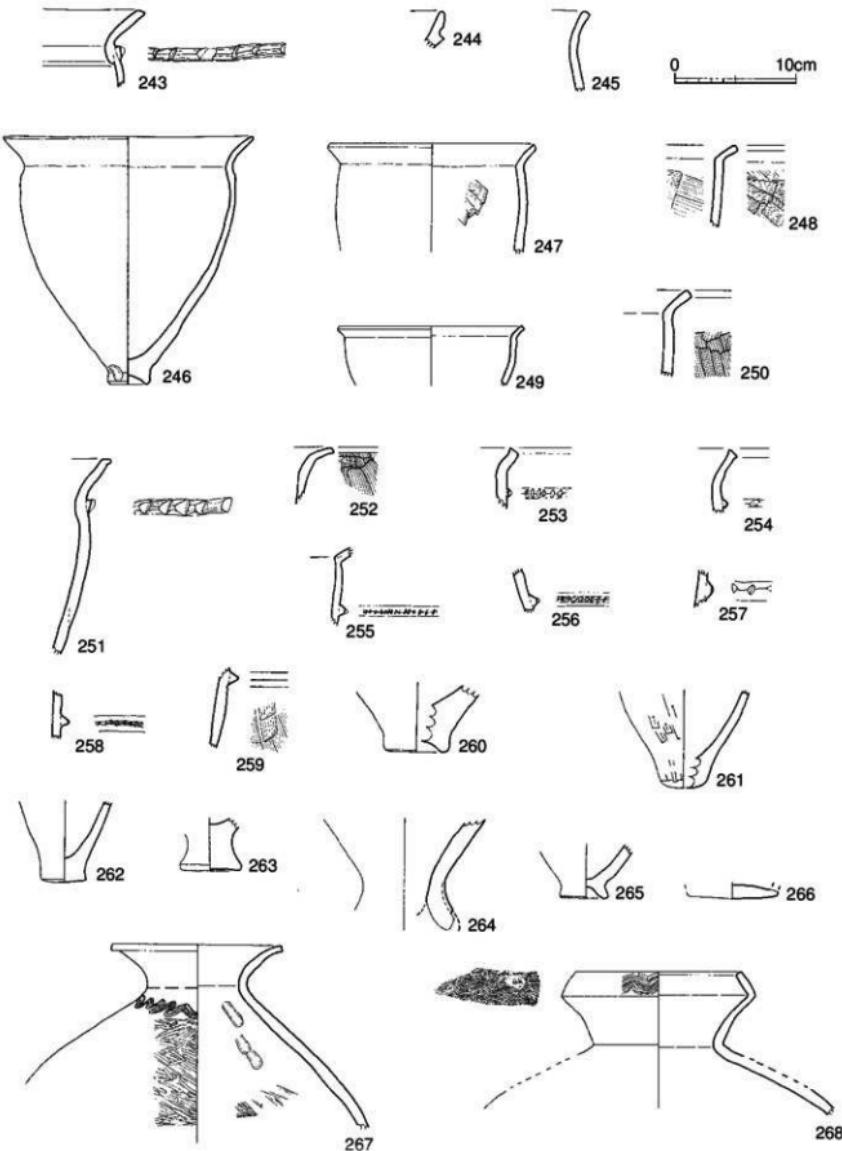
軽石製品 (240~242) 240は勾玉の形状をした軽石製品である。241は扁平に加工された軽石製品で、時期不明の傷が見られる。242は長方形に成形された軽石製品である。これらは12号住居跡の東側のベッド状遺構から出土している。

包含層出土の土器 (第29~31図)

下大五郎遺跡では包含層から多くの遺物が出土した。本遺跡の住居跡の編年を考える上で特徴的な遺物を中心に84点を図化し報告する。

甕 (243・245~266・273・278) 口縁下に突帯を有する243・251・253~259、突帯のない245~250・252・273・278の2種類の壺形土器がある。このうち突帯のない甕は、口縁部内面に稜を有し、く字状に屈曲する247~248・250、口縁が長く伸びて外反する246・273・278、短く外反する249、口縁が緩やかに外反する245・252などに細分できる。246~249は外面に煤が付着し、243・246は著しく風化または剥離が進んでいる。一方、突帯を有する甕は、口縁が外反して伸び直下に大きな刻目の突帯を持つ243・251、口縁端部が上方に摘み上げられる253・254、口縁部がないが頸部でく字状に屈曲し小さな刻目突帯のある255とその同一個体と思われる256・258、刻目のない突帯を有する259などが見られる。243・251・253~256の刻みはヘラ状工具によるもので、255の外面には煤が付着する。底部は上げ底の260・265、充実した小さな平底の261・262、充実し横に張り出した263、凸レンズ状の広い平底の266、全体像が不明だが甕の底部かと思われる264などが見られる。260は内面に炭化物が付着し調整が明確ではなく、264は内面に乾燥が進んだ後ナデたような光沢のあるミガキ状の調整痕が見られる。266は風化著しい。

壺 (221・244・267~269・271~272・274・279・281~292・294~297) 壺形土器には、口縁部が外反して長く伸びる267、短く外反する広口壺の269、複合口縁を有する268・271・297、内湾気味の口縁が外傾し外面に凹線を持つ244・279、大きく開く口縁端部が断面台形や三角形に肥厚する272・274・281



第29図 下大五郎遺跡 包含層出土遺物実測図（1）

などが見られる。このうち267は口縁部から肩部まで横ナデされ、肩部の櫛描波状文以下は全面ミガキの丁寧な作りの壺である。内面は剥離が著しい。268は口縁拡張部に櫛描波状文が描かれ、これもまた丁寧な作りの土器である。272は全面風化が著しいため調整不明。274は外面口唇部に鋸歯文が線刻されるが口縁上面には円形浮文等は見られない。281の口縁上面は一部ミガキ状の光沢が見られるが、ヘラなどの単位は不明である。297は拡張部分が剥離している。282から292は壺の胴部片である。断面三角形の貼付突帯を持つ282・285～288・292、断面M字状の貼付突帯を持つ289・291、その他が見られる。このうち285は突帯下部に下端を押し潰した梢円形の浮文を貼り付けている。この285ほか286・288も内面の風化が著しい。291は下部に煤がわずかに付着する。283は風化著しいが胴屈曲部に刻みがあぐる。また、284は頸部に刻目突帯をめぐらす。290は薄手の胴部片で鉢の可能性もある。全体形が不明。221・294～296は壺の底部と考えられる。221は外面に工具による上方への強いナデ調整が見られる。294はわずかに平坦面が見られるが丸底である。295は稜線が曖昧な平底を呈し、外面上部にミガキと思われる光沢面が見られる。296は稜線の曖昧な凸レンズ状の平底の底部である。

高坏 (298・300～301・303・305～306) 高坏は浅い坏部に大きく外反する口縁のものが見られる。このうち298は内外面に煤様の炭化物が付着する。また298と300は内外面ともかなり風化していて調整が不明瞭である。306は坏部と脚部を別個に作り円錐状の粘土塊を充填したものである。

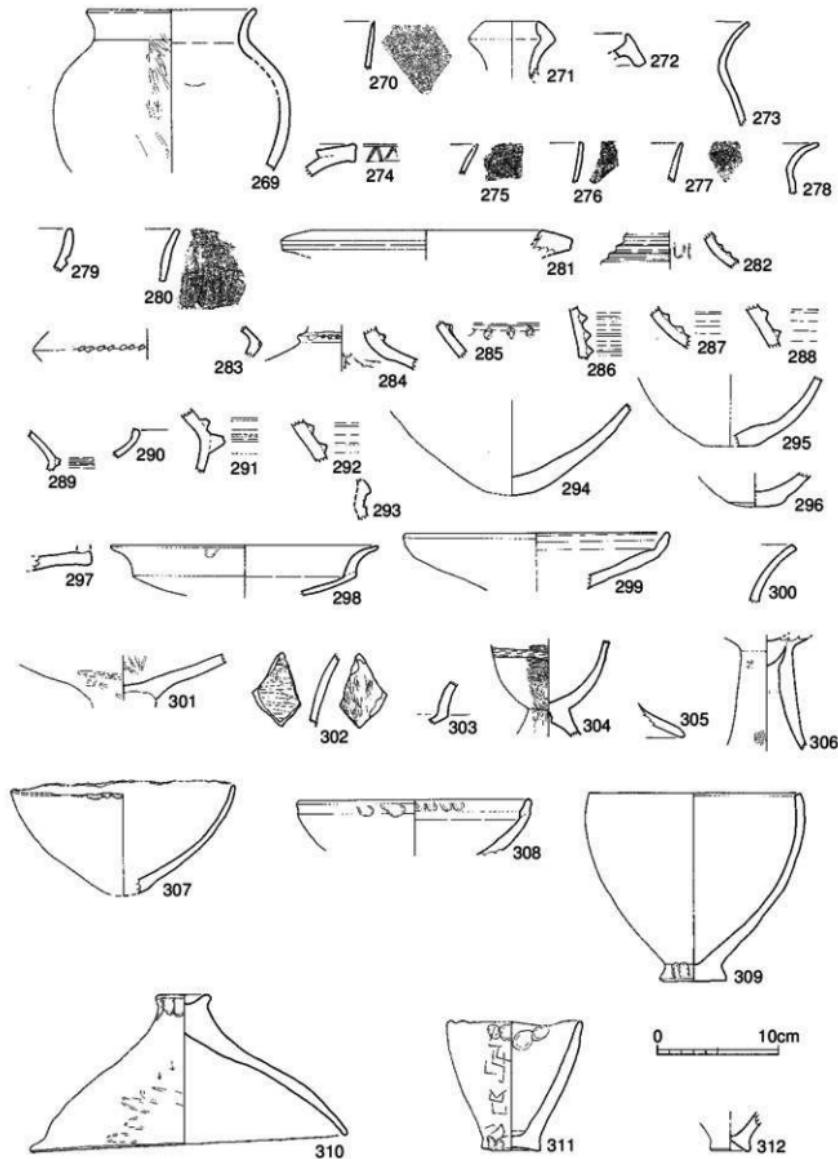
鉢 (270・275～277・280・299・302・304・307～309・311) 鉢形土器には、外面に櫛描波状(鋸歯状)文を描く270・275～277・280・304、内面に段を有する299・308、口径が広く丸底の307、平底の309・311などが見られる。このうち280は径が小さな鉢か壺の口縁部の可能性がある。また304は270などと同じく細かな櫛描波状文を施し、胴部の帶状の低い突帯に3本の沈線をめぐらす丁寧に磨かれた端正な作りの脚台付鉢形土器である。2号住居跡出土の19の鉢と同一個体かもしくは同様の器形になると考えられる。299は内外面とも風化のため調整が不明瞭である。302は内外面にミガキが見られ、径が比較的小さそうであることや傾きなどから鉢としておく。307は底部を一部欠くが据わりの悪い丸底になると考えられる。

蓋 (310) 310は鉢形の土器であるが、口縁端部付近の内外面が黒っぽく変色し、内面の変色部分の内側端部には弧状に煤様の炭化物が付着していること、口縁端部を含む全体の作りや調整が他の鉢に比べて大変粗いことなどから漿形土器の蓋と考えられる。

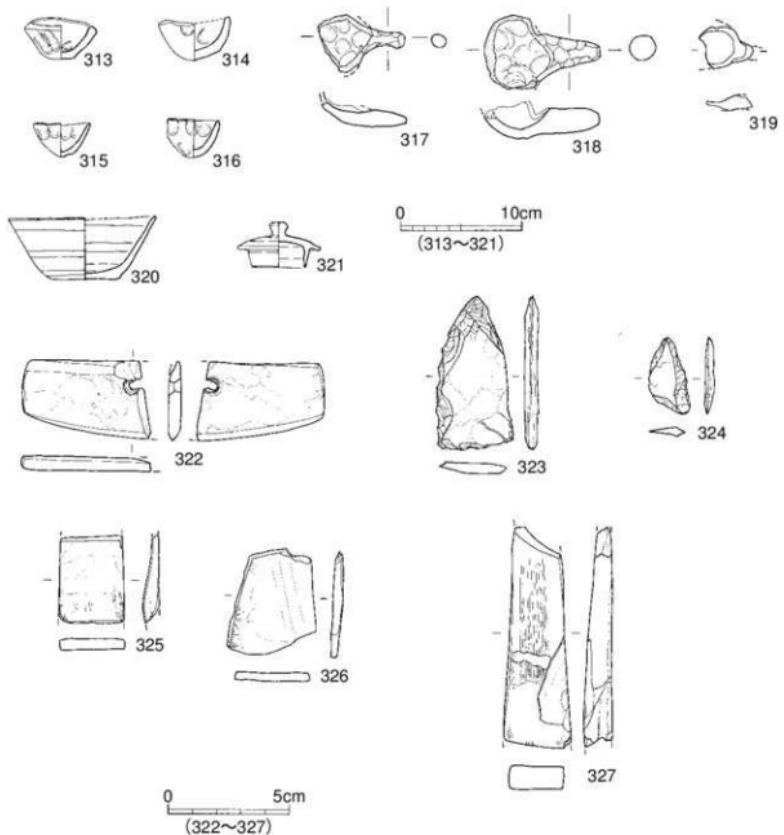
ミニチュア土器 (312～316) 312はミニチュアの漿形土器もしくは鉢の底部と考えられる。外面は丁寧なナデ調整が施される。313から316までは手捏ねの鉢形土器で指頭圧痕が多く見られる。

杓子形土器 (317～319) 317～319は杓子形土器である。いずれも手捏ねで成形され指頭圧痕が多く残る。

土師器・陶器 (320～321) 320は底部ヘラ起こしの土師器の坏で古代末の土器である。321は19世紀代の薩摩焼きの蓋である。



第30図 下大五郎遺跡 包含層出土遺物実測図（2）



第31図 下大五郎遺跡 包含層出土遺物実測図（3）

包含層出土の石器（第31図）

322は石庖丁である。323～324は剥片である。323は形状を整えた磨製石鎌の未製品と考えられる。325～327は砥石である。325・327は両面及び側面も研磨痕が見られる。326の裏面は剥離欠損している。側面は若干の調整痕が見られる。

第1表 下大五郎遺跡出土弥生土器觀察表（1）

() は推定

標番	出土 地点	器種・ 部 位	法量 (cm)			手法・調整・文様他		色 調		胎土の特徴	
			口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
1	1号住居	甕・口縁部	—	—	—	ナデ	横ナデ、口縁指押さえ痕	に赤い黄粒	に赤い黄粒	4mm以下の茶褐色砂粒を多く含む。	
2	1号住居	甕・口縁部	—	—	—	横ナデ、縦方向のハケ目	横ナデ、斜方向のハケ目	に赤い黄粒	に赤い黄粒	1mm以下の灰白・黒色の砂粒を含む。	
3	1号住居	甕・口縁部	—	—	—	柳描波状と平行文	横ナデ	に赤い粒	淡黄粒	2mm以下の褐・黒色の砂粒を含む。	
4	1号住居	高环・口縁部	—	—	—	横ナデ	横ナデ	浅黄粒	浅黄粒	1mm以下の黒色の砂粒を含む。	
5	1号住居	鉢・底～脚部	—	—	—	不明	不明	浅黄粒	浅黄	2mm以下の褐・灰・茶褐色砂粒、透明粘物粒を多く含む。	
6	1号住居	高环・脚部	—	(16.3)	—	斜方向のハケ目の後 縦方向のハケ目	横方向のハケ目	に赤い黄粒	に赤い黄粒	2mm以下の茶・黒・灰色の砂粒を含む。	
7	1号住居	高环・脚部	—	(21.0)	—	縦・斜方向のナデ、 円形透かし 5か所か	ナデ	浅黄粒、 褐灰	浅黄	2mm以下の褐・黒色砂粒、光沢のある黑色粘物粒を含む。	
9	2号住居	甕・口縁～ 底部	(27.3)	5.4	33.0	横ナデ、ナデ、板状 工具による板ナデ	横ナデ、斜方向のナ デ、横ナデ	に赤い黄粒	黑褐	3mm以下の黒・茶・灰白色砂粒を多く含む。2mm以下の透明粘物粒を含む。	
10	2号住居	甕・口縁～ 底部下	—	15.6	—	板状工具による上 部の縦ナデ、ナデの上 を工具の纏ナデ	横ナデ、纏ナデ	浅黄粒	褐	2mm以下の褐灰・灰・黒色の砂粒を含む。	
11	2号住居	甕・口縁部	—	—	—	ナデ	斜方向のハケ目	に赤い黄粒	に赤い黄粒	2mm以下の灰白・褐色砂粒、透明粘物粒を含む。	
12	2号住居	甕・口縁～ 脚部	(6.6)	—	—	ナデ、 縦方向のミガキ	ナデ、指押さえ	灰白・灰	灰黄	2mm以下の褐色砂粒、光沢のある透明及び柱状黑色粘物粒を含む。	
13	2号住居	甕・口縁～ 脚部	(8.5)	—	—	縦方向のミガキ	横ナデ	に赤い粒	淡黄	2mm以下の茶褐色砂粒、光沢のある透明及び柱状黑色粘物粒を含む。	
14	2号住居	甕・底部	—	1.6	—	縦ナデの上を一部ミ ガキ	板状工具による横ナ デ	灰黄・黒褐	灰黄・黄灰	1.5mm以下の灰褐色砂粒、光沢のある透明粘物粒を多く含む。	
15	2号住居	甕・底部	—	5.2	—	斜め・縦方向の工具 具によるナデ、指押 さえ	斜方向の板状工具 によるナデ、指押 さえ	に赤い黄粒	黄粒	3mm以下の黒・茶・茶色砂粒を多く含む。2mm以下の透明粘物粒を含む。	
16	2号住居	鉢・口縁～ 底部	—	14.8	3.35	指押さえの後横ナデ	板状工具によるナ デ、ベンガラ痕	明黄褐	に赤い黄粒	3mm以下の茶・白・灰砂粒、透明粘物粒を含む。	
17	2号住居	鉢・口縁～ 底部	(11.9)	(2.4)	10.1	丁寧なナデ	横もしくは縦ナデ	に赤い粒	灰黄	1mm以下の褐・灰色砂粒、1mmの大 きな黒柱状の粘物粒を少量含む。	
18	2号住居	ミニチュア 上槽	—	4.55	1.5	3.15	指頭痕痕	指頭痕痕	に赤い粒	灰白	2mm以下の茶褐色砂粒、1mmの大 きな黒柱状の粘物粒を少量含む。
19	2号住居	鉢・口縁～ 脚部	(13.0)	—	—	柳描波状文、脚部突 帯上に3条の沈線	横ナデ	浅黄粒	に赤い黄粒	1mm以下の黒色砂粒、透明粘物粒を含む。	
20	2号住居	高环・脚部	—	(11.3)	—	横ナデの上に纏ナデ	横ナデ	灰黄	灰黄	1.5mm以下の黒・茶褐色砂粒を多く含む。	
21	2号住居	脚行・口縁～ 脚部	—	23.2	23.3	18.2	ナデ、縦横方向のミ ガキ、円形透かし 6 角によるケリ後纏 ナデ	に赤い黄粒	褐灰	2mm以下の褐色・黑色砂粒、透明粘物 粒を多く含む。	
26	3号住居	甕・口縁部	(34.9)	—	—	横方向のハケ目の上 を纏ナデ、刮削工具 の下に纏ナデ	横ナデ、板状工具に ある纏ナデ	に赤い粒	褐	3mm以下の茶褐色砂粒を少量含む。	
27	3号住居	甕・口縁部	—	—	—	横ナデ	横ナデ、ハケ目	灰黄褐・灰黄褐・に 赤い黄粒	に赤い黄粒	2mm以下の透明粘物粒、1~2mm大 きな白・茶・灰砂粒を含む。	
28	3号住居	甕・口縁部	—	—	—	横ナデ、刻目貼付突 帯、縦方向のハケ目	横ナデ	に赤い粒	褐	3mm以下の茶褐色砂粒を少量含む。	
29	3号住居	甕・脚部	—	—	—	横ナデ、刻目貼付突 帯、縦方向のハケ目	横方向のハケ目	相	相	1mm以下の白・茶・黒・灰砂粒を含 む。	
33	4号住居	甕・口縁～ 脚部	(38.1)	—	—	横ナデ、ヘラナデ状 の工具痕、貼付突帶	指押さえ痕、丁寧な 横ナデ	に赤い黄粒	相・に赤い 1cm以下の赤褐色岩片、1~2mm大 きな白・茶・灰砂粒、透明粘物粒を多く含む。	1cm以下の赤褐色岩片、1~2mm大 きな白・茶・灰砂粒、透明粘物粒を多く含む。	
34	4号住居	甕・口縁～ 脚部	(19.2)	—	—	横ナデ、縦方向のハ ケ目、ミガキ	横ナデ後ミガキ、斜 方向のナデ	に赤い粒	褐	4mm以下の茶褐色砂粒を多く含む。	
35	4号住居	甕・口縁～ 脚上部	(18.2)	—	—	横ナデ、ハケ目、貼 付突帶	ナデか	相	相	3mm以下の茶褐色砂粒を少額含む。	
36	4号住居	甕・底部	—	(4.7)	—	縦方向のミガキ	ナデ	相・ に赤い粒	暗灰黄・黄 灰	1mm以下の黒・茶・灰砂粒を多く含 み、また2mm以下の透明粘物粒を含む。	
38	5号住居	甕・口縁～ 脚部	—	—	—	横ナデ、刻目貼付突 帶	横ナデ	に赤い黄粒	茶色砂粒、1mm 以下の透明粘物粒を含む。	2mm以下の白・茶・茶色砂粒、1mm 以下の透明粘物粒を含む。	
39	5号住居	甕・口縁～ 脚部	(17.0)	—	—	横ナデ、斜方向のハ ケ目	横ナデ、斜方向のナ デ	に赤い黄粒	に赤い黄粒	5mm以下の茶色・2mm以下の黒・ 茶・白砂粒、透明粘物粒を多く含む。	
40	5号住居	甕・口縁部	—	—	—	円形浮文、工具によ る横ナデ、一部ミガ キ	工具による横ナデ、 ナデ	に赤い粒	褐	1mm以下の黒・灰・茶色・2mm以下 の透明粘物粒を含む。	
41	5号住居	甕・口縁部	—	—	—	横ナデ	横ナデ	相	相	2mm以下の灰砂粒、透明粘物粒を含 む。	

第1表 下大五郎遺跡出土弥生土器觀察表（2）

器番号	出土 地点	器種・ 部・位	法量 (cm)			手法・調整・文様他		色 調		胎土の特徴
			口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面	
42	5号住居	壺・胴部	—	—	—	3条の貼付突帯、横ナデ	斜方向のハケ目	明闇	にぶい黄	4~2mm以下の白色半透明胎土粒、黒色砂粒を多く含む。
50	6号住居	壺・口縁～底部	(15.2)	—	—	板状工具による縦ナデ、縦ナデ	板状工具による横ナデ、指押さえ	棕・黒褐	棕	5mm以下の茶褐色砂粒を多く含む。
51	6号住居	壺・口縁～底部	(11.8)	4.4	11.5	横ナデ、縦ナデ、指押さえ	横ナデ	棕	浅黄褐	3mm以下の茶・黒・灰色砂粒、透明胎土粒を多く含む。
52	6号住居	壺・口縁～底部	13.0	4.8	12.3	横ナデ、縦ナデ、指押さえ	横ナデ、縦ナデ	にぶい黄	浅黄褐	3~1mmの黒・茶・灰色砂粒を多く含む。また3mm以下の透明胎土粒を含む。
53	6号住居	壺・口縁～底部	14.85	5.5	15.3	横ナデ、指押さえ	横方向のハケ目、縦ナデ	にぶい棕	棕	3mm以下の茶・黒・灰色砂粒を多く含む。2mm以下の透明胎土粒を含む。
54	6号住居	壺・口縁～底部	—	5.6	9.55	横ナデ、縦ナデ、指押さえ	横ナデ	にぶい黄	浅黄褐	3~1mmの黒・茶・灰色砂粒を多く含む。2mm以下の透明胎土粒を含む。
55	6号住居	壺・口縁～底部	9.5	4.5	11.75	横ナデ、縦ナデ、指押さえ	横ナデ、縦ナデ	にぶい黄	棕	3mm以下の茶・黒・灰色砂粒を少量含む。
56	6号住居	壺・口縁部	—	—	—	横ナデ、縱方向のハケ目	横ナデ	にぶい棕・相	にぶい棕	2mm以下の黒・茶・灰色砂粒を含む。
57	6号住居	壺・胴部	—	—	—	朝目貼付突帯、縱方向のハケ目	斜方向のナデ	にぶい黄	浅黄褐	2mm以下の茶褐色砂粒を少量含む。
58	6号住居	壺・底部	—	(6.0)	—	ナデか・工具痕、指押さえ	縦ナデ	相・にぶい	にぶい棕	4mm以下の茶・黒・灰色砂粒を多く含む。2mm以下の透明胎土粒を含む。
59	6号住居	壺・胴～底部	—	(4.0)	—	ナデ、指押さえ	ナデ、指押さえ	相	相	3mm以下の茶・黒・灰色砂粒、透明胎土粒を多く含む。
60	6号住居	壺・底部	—	—	—	縦ナデ、指押さえ	ナデ、指押さえ	褐灰	黒闇	2mm以下の黒・茶・灰色砂粒を含む。
61	6号住居	壺・底部	—	(5.0)	—	ヘラミガキ、ナデ	ナデ	相	茶	2mm以下の白・茶・灰色砂粒を含む。
62	6号住居	壺・胴～底部	—	4.4	—	縦ナデ、指押さえ	ナデ	相	浅黄褐	4mm以下の白・灰色、2mm以下の黒色砂粒、透明胎土粒を含む。
63	6号住居	壺・口縁部	—	—	—	柳描波紋状、横ナデ、斜方向のハケ目	横ナデ、横・斜方向のハケ目	にぶい黄	黒闇	2mm以下の黒・茶・茶色砂粒、透明胎土粒を含む。
64	6号住居	壺・口縁～胴部	—	—	—	横ナデ	横方向のハケ目、横ナデ	にぶい黄	にぶい黄	3mm以下の茶・灰色・黑色の砂粒を含む。
65	6号住居	壺・口縁部	—	—	—	柳描波紋状、横ナデ	横ナデ	にぶい黄	にぶい黄	2mm以下の透明胎土粒、黑色砂粒を含む。
66	6号住居	壺・口縁部	—	—	—	柳描波紋状、縦ナデ	横ナデ	浅黄褐	にぶい黄	1mm以下の黑色砂粒を含む。
67	6号住居	壺・口縁～底部	(22.1)	—	—	横ナデ、縦ナデ	横ナデ	相	黄褐	5mm以下の灰色砂粒、3mm以下の透明胎土粒、2mm以下の黒・灰色砂粒を多く含む。
68	6号住居	壺・口縁～底部	(18.8)	—	—	柳描波紋状、縦・斜方向のヘラミガキ、1条の線文	横ナデ、横方向のハケ目、指頭圧痕	にぶい棕・相	にぶい黄	3mm以下の茶・灰色砂粒、黑色砂粒を多く含む。1mm以下の透明胎土粒を含む。
69	6号住居	壺・口縁部	(10.6)	—	—	横ナデ、縦方向のハケ目	横ナデ、指押さえ	にぶい黄	相	2mm以下の茶・黑色砂粒、黑色砂状の胎土粒を多く含む。
70	6号住居	壺・口縁部	(16.3)	—	—	柳描波紋状、ナデ、斜方向のハケ目、指押さえ	横ナデ	相	にぶい黄	3mm以下の茶褐色砂粒を多く含む。
71	6号住居	壺・口縁部	(10.2)	—	—	横ナデ、指押さえ、縦方向のハケ目	横ナデ	相	相	3mm以下の茶褐色砂粒を多く含む。
72	6号住居	壺・口縁部	(18.2)	—	—	横ナデ、縦方向のハケ目	横ナデ	浅黄褐	浅黄褐	3mmの大茶・黒・灰色砂粒、透明胎土粒を多く含む。
73	6号住居	壺・胴部	—	—	—	横ナデ、3条の貼付突帯	ナデ	にぶい黄	褐灰	2mm以下の茶褐色砂粒を少量含む。
74	6号住居	壺・胴部	—	—	—	縦方向のミガキ、斜方向のハケ目、縫刻	ナデ	相	にぶい棕	3mm以下の茶褐色砂粒を少量含む。
75	6号住居	壺・口縁～底部	(11.5)	—	—	横ナデ、縦ナデ	横ナデ	黄褐	相	4mm以下の灰褐色砂粒を多く含む。
76	6号住居	壺・胴～底部	—	—	—	指ナデ、斜方向のナデ	斜方向のナデか	にぶい黄	相	5mm以下の灰闇・茶褐色砂粒を多く含む。5mm以下の茶・灰色砂粒、2mm以下の黑色砂粒の胎土粒を少許含む。
77	6号住居	壺・底部	—	(6.9)	—	縦ナデ	縦または斜方向のナデ	にぶい棕	茶	3mm以下の茶褐色砂粒を多く含む。
78	6号住居	壺・底部	—	6.3	—	斜方向または縦方向のハケ目、指押さえ	ナデ、指押さえ痕か	にぶい棕・相	にぶい黄	4mmの大茶色・2mm以下の茶・灰色砂粒、1mm以下の透明胎土粒を多く含む。
79	6号住居	壺・胴～底部	—	(10.8)	—	縦ナデ	横ナデ	浅黄	茶	4mmの大茶色・2mm以下の茶・灰色砂粒、透明胎土粒を含む。
80	6号住居	壺・胴～底部	—	1.8	—	縦ナデ、斜め・縦方向のハケ目	縦方向の指ナデ、斜方向のハケ目	相	相	3mm以下の茶・黒・灰色砂粒を多く含む。

第1表 下大五郎遺跡出土弥生土器觀察表(3)

器 器番 号	出土 地點	器種・ 部	法量(cm)			手法・調整・文様他		色調		胎土の特徴
			口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面	
81	7号住居	壺・口縁～ 腹部	10.85	—	—	縦ナデ	指押さえ痕	柾	柾	3mm以下の灰白・褐・黒色砂粒を多く含む。
82	6号住居	壺・頭～底 部	—	4.2～ 5.3	—	10条の短縞削、板状 工具による縦ナデ	しづび痕、板状工具 による斜方向のナデ	黄白・にぶい黄白	にぶい黄 白	2mm以下の黒褐・灰褐・灰白・ 浅黄白にぶい植色砂粒、透明・ 光沢のある黒色鉱物粒を含む。
83	6号住居	壺・胴部	—	—	—	横・斜方向・縦方向 のナデ	しづび痕、指押さえ 縦ナデ	にぶい黄柾	灰柾	2mm以下の黒・褐・灰白・ 白色砂粒を含む。
84	6号住居	壺の頭～底 部	—	—	—	縦・斜方向のナデ	しづび痕、指押さえ 板状工具による斜方 向のナデ	柾	黒	3mm以下の灰・褐・黒色砂粒を多く含む。
85	6号住居	壺・口縁～ 底部	(12.4)	—	(35.3)	縦ナデ・横ナデ・T 型・斜方向のナデ	にぶい黄白・ 板状工具による斜方 向のナデ	にぶい黄柾 ・浅黄白 ・灰柾	明黄柾	5.5mm以下の断続・3.5mm以下の 縫隙・2mm以下の灰白・ 植色砂粒・下 部灰白
86	6号住居	壺・口縁～ 底部	13.4	4.5	33.2	縦ナデ・斜めまたは 斜方向のナデ	縦ナデ・指押さえ	明黄柾・明 柾	柾	5mm以下の断続・明黄柾・灰柾・ 灰白・色砂粒、透明・光沢のある 黒・白色鉱物粒を多く含む。
87	6号住居	壺・口縁～ 底部	(13.3)	(4.9)	33.4	縦・斜方向のナデ・ 横・斜方向のナデ・ 一部工具痕	横・斜方向のナデ・ 一部指押さえ	にぶい黄柾	にぶい黄柾	3mm以下の赤褐・2mm以下の黒褐・ 褐色砂粒を含む。
88	6号住居	壺・口縁～ 底部	12.5	4.25～ 4.5	28.2	縦・斜方向のナデ・ 横ナデ	にぶい黄柾	にぶい黄柾	3mm以下の黒褐・灰白・ 白色砂粒を含む。	
89	6号住居	壺・口縁～ 腹部	14.95	—	—	横ナデ・縦方向の工 具ナデ	にぶい黄柾	にぶい黄柾 ・にぶい柾	にぶい黄柾	2mm以下の黒・灰・茶色砂粒を多く含 む。1mm以下の透明鉱物粒を含む。
90	6号住居	壺・口縁部	10.25	—	—	横ナデ・縦ナデ	横ナデ・板状工具に による横ナデ	柾	にぶい黄柾 ・柾	4mm以下の断続・縫隙・赤褐色 砂粒・2mm以下の透明・半透明・ 黑色柱状の鉱物粒を含む。
91	6号住居	壺・口縁～ 底部	(12.5)	(4.7)	34.0	縦ナデ・横ナデ・斜 方向のナデ	横ナデ・指頭王痕	にぶい黄柾 ・明黄柾 ・灰白	にぶい黄柾	5mm以下の赤褐・灰白・ 褐色砂粒、2mm以下の半透明鉱物粒等を含む。
92	6号住居	壺・口縁～ 底部	13.1	4.0	32.8	T型の縦ナデ・横ナ デ・斜方向のナデ	横ナデ・板状工具に による斜方向のナデ	柾・にぶい黄柾	柾・にぶい 黄柾	4mm以下の黒・灰・茶色砂粒・ 褐色砂粒、2mm以下の透明・半透明・ 黑色柱状の鉱物粒を含む。
93	6号住居	壺・口縁～ 底部付近	14.25	—	36.2	工具による縦ナデ・ 横ナデ・斜方向のナ デ	横ナデ・縦ナデ・横 ナデ・斜方向のナ デ	にぶい黄柾 ・黒柾	にぶい黄柾 ・灰柾	3mm以下の乳白色・黒褐・赤褐・灰白 色砂粒を含む。
94	6号住居	壺・口縁～ 底部	(13.2)	4.0～ 4.5	(40.4)	縦・斜方向のナデ・ 横・斜方向のナデ・ 一部工具痕	縦・斜方向のナデ・ 横・斜方向のナデ	明黄柾	明黄柾	3mm以下の茶・黒・白・灰色砂粒を多く含む。
95	6号住居	高环・环部	(32.6)	—	—	斜方向の工具ナデ・ 横・斜方向のミガキ	斜方向の工具ナデ・ 横・斜方向のミガキ	柾	明黄柾	3mm以下の赤・灰・黑色砂粒を含む。 5mmの大赤褐色砂粒を含む。
96	6号住居	高环・环部	—	—	—	縦ナデか	不明	柾・ にぶい柾	柾	2mm以下の黒・灰・茶色砂粒を多く含 む。1mm以下の透明鉱物粒を含む。
97	6号住居	高环・环～ 胴部	(19.4)	—	—	横ナデ・縦ナデ・横 方向のミガキ	横ナデ・しづび痕	にぶい黄柾 ・にぶい黄柾	にぶい黄柾	2mm以下の黒・灰・茶色砂粒を多く含 む。1mm以下の透明鉱物粒を含む。
98	6号住居	高环・环～ 胴部	12.25	8.5	7.4	横ナデ・指押さえ痕	横ナデ	浅黄柾	浅黄柾	4mmの大・白・灰・黄白・3.5mm以 下的茶・灰・茶色砂粒、透明・黑色柱 状の鉱物粒等を含む。
99	6号住居	高环・环底 ～胴部	—	—	—	ナデか	ナデか	にぶい黄柾	にぶい黄柾	2mm以下の土・灰・にぶい柾・明黄 色砂粒、黑色鉱物粒を多く含む。 0.5mm以下の灰白砂粒を含む。
100	6号住居	高环・环部	—	—	—	横方向のヘラミガ キ半・丹塗り	横方向のヘラミガ キ・丹塗り	赤・柾	赤	1mm以下の黒・灰・茶色砂粒を多く含 む。1mm以下の透明鉱物粒を含む。
101	6号住居	高环・环部	—	—	—	横ナデ・斜方向のハ ケ目	丁寧なミガキ	にぶい黄柾	にぶい黄柾	3mm以下の黒褐色砂粒を含む。1mm 以下の茶・灰・茶色砂粒を少含む。
102	6号住居	高环・环部	—	—	—	横・斜方向のハケ 目・斜方向のミガキ	横方向のミガキ	にぶい黄柾	にぶい黄柾	3mm以下の黒褐色砂粒を少含む。
103	6号住居	高环・环部	(31.0)	—	—	横ナデ・ミガキか	横ナデ	浅黄柾	にぶい柾	2mm以下の灰褐色砂粒を多く含む。2 mm以下の灰褐色砂粒を少含む。
104	6号住居	落台・裾部	—	(18.2)	—	縦ナデ・横ナデ	板状工具による縦ナ デ・横ナデ	にぶい黄柾 ・青灰	にぶい黄柾	3.5mm以下の茶・灰白・黒褐・灰 褐色砂粒。2mm以下の透明・黑色柱 状の鉱物粒を含む。
105	6号住居	落台・口縁 ～腹部	(22.85)	(23.5)	19.65	横ナデ・板状工具に による縦ナデ・横ナ デ	横ナデ	浅黄柾	浅黄柾	4mm以下の赤・茶・灰・黄白・ 褐色砂粒、黑色鉱物粒を多く含む。 0.5mm以下の灰白砂粒を含む。
106	6号住居	落台・口縁 ～底部付近	(13.0)	(2.8)	10.8	横ナデか	ナデか	明黄柾	明黄柾	5mm以下の赤褐・灰・黒・茶色砂粒を 多く含む。
107	6号住居	落台・口縁 ～底部	9.4	3.5	9.2	縦ナデ・指頭王痕	横または縦ナデ・工 具痕	柾	柾	3mm～2mmの赤褐・灰白・ 黑色砂粒を多く含む。
108	6号住居	落台・口縁 ～底部	12.3	2.9	8.1	ナデ・縦方向のケブ リ	横または縦ナデ	にぶい黄柾 ・灰	4mm以下の灰褐色砂粒を少含む。	
109	6号住居	落台・口縁部	—	—	—	横ナデか	横ナデ	柾	柾	3mm以下の黄・灰・白・ 黑色透明鉱物粒を含む。
110	6号住居	落台・口縁 ～底部	12.6	7.9	8.15	斜方向のナデ	横または斜方向のナ デ	浅黄柾	浅黄柾	5mm以下の茶・灰白・ 黑色砂粒を多く含む。
120	7号住居	壺・口縁部	—	—	—	横ナデ・縦方向のハ ケ目	板状工具による斜方 向のナデ・指頭王痕	柾	柾	2mm以下の黒・灰白色砂粒、黑色柱状 の鉱物粒を含む。
121	7号住居	壺・口縁部	—	—	—	横ナデ・縦方向のハ ケ目	横ナデ	にぶい柾	4mm以下の茶・灰白・ 黑色砂粒を含む。	

第1表 下大五郎遺跡出土弥生土器觀察表（4）

() は推定

器 器番 号	出土 地點	器種・ 部	法量 (cm)			手法・調整・文様他		色 調		胎土の特徴
			口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面	
122	7号住居	費・口縁部	—	—	—	横ナデ	横ナデ	にぶい穂・ 黒澁	にぶい黄相 明・黑色鉱物粒を含む。	3mm以下の灰・暗灰・灰・にぶい 茶白砂粒、透明 明・黑色鉱物粒を含む。
123	7号住居	費・口縁部	(22.7)	(5.4)	(27.3)	横・斜方向のナデ、 纏ナデ	ナデ、斜方向のナデ、 指押さえ痕	相	相	5mm以下の灰・茶色砂粒、3mm以下 の黒色柱状の鉱物粒を含む。
124	7号住居	費・口縁部	21.15	(6.3)	22.2	横ナデ、纏方向の 板状工具による斜 め・横方向のナデ ケ目、指頭圧痕	板状工具による斜 め・横方向のナデ 相	にぶい黄 相	4mm以下の赤褐色・灰褐色・黑色柱 片、2mm以下の透明・黑色柱状 の鉱物粒を含む。	4mm以下の赤褐色・灰褐色・黑色柱 片、2mm以下の透明・黑色柱状 の鉱物粒を含む。
125	7号住居	費・口縁部	18.8	4.85	19.2	横ナデ、纏ナデ、指 頭圧痕	板状工具による斜 め・横方向のナデ 相	相	相	6mm以下の黒澁・灰褐色砂粒を多く含 む。
126	7号住居	費・口縁部	(15.5)	5.3	17.7	不明、下部纏ナデ	不明	相	相	5mm以下の灰白・暗澁・黑色鉱 物粒、透明鉱物粒を含む。
127	7号住居	費・口縁部・ 側部	(13.7)	4.7	11.8	横ナデ、纏ナデ	斜方向のハケ目、纏 ナデ	にぶい穂・ 相	にぶい黄相 明・黑色砂粒、透明鉱 物粒を含む。	3mm以下の茶褐色・灰褐色砂粒、透明鉱 物粒を含む。
128	7号住居	費・口縁部	(11.6)	—	—	横ナデ、纏ナデ、ミ ガキ	横ナデ、纏ナデ、部 分的に指押さえ痕	相	相	3mm以下の灰・黑・茶白砂粒、透明鉱 物粒を含む。
129	7号住居	费・口縁部	8.7	3.5	17.05	隙縫、横ナデ、斜方 向のナデ、纏ナデ	横ナデ、纏ナデ、指 押さえ	相	相	5mm以下の灰白・赤褐色・にぶい相 明・黑色柱状の鉱物粒を含む。
130	7号住居	費・口縁部	10.15	6.75	30.35	横ナデ、斜方向の ハケ目、纏ナデ	横ナデ、指押さえ	相	にぶい黄	5mm以下の黒・灰・茶・褐色砂 粒、3mm以下の透明・黑色柱状 の鉱物粒を含む。
131	7号住居	费・口縁部	(8.0)	5.8	18.8	横ナデ、纏ナデ、丁 字ナナデ	横ナデ、しほり痕、 板状工具による纏ナデ 相	相	相	4mm以下の黒・灰・茶・白色鉱 物粒、2mm以下の透明鉱物粒を含む。
132	7号住居	费・口縁部	(11.0)	—	—	横ナデ、纏ナデ、纏 方向のミガキ	横ナデ、纏方向の指 ナデ、横・斜方向の ナデ、ハケ目	にぶい穂・ 相	にぶい黄相 明・明瞭な砂粒、透明黒色鉱物粒を含む。	3mm以下の灰褐色・にぶい穂・相・ 黑澁・明瞭な砂粒、透明黒色鉱物粒を含む。
133	7号住居	费・耐・底 部	—	(4.0)	—	纏ナデ	斜方向のハケ目	相	浅黄相	2mm以下の透明・黑色柱状の鉱物粒、 灰色の砂粒を含む。
134	7号住居	费・口縁部	(9.4)	—	—	横ナデ、纏ナデ	横ナデ、指ナデか	相	浅黄相	3mm以下の茶・灰褐色砂粒、2mm大 の黑色柱状の鉱物粒を含む。
135	7号住居	费・(?)・ 口縁部	—	—	—	櫛波紋波状、横ナデ、 一部横方向のミガキ	横方向のミガキ	にぶい穂・ 相	にぶい穂・ 相	2mm以下の黒・茶褐色砂粒、透明・黑 色鉱物粒を含む。
136	7号住居	费・口縁部	—	—	—	横ナデ、斜方向のミ ガキ	横ナデ、ミガキか	にぶい黄	灰褐色	2mm以下の黒・灰褐色砂粒、透明黒色 鉱物粒を含む。
137	7号住居	费・頭・側 部	—	—	—	纏ナデ、纏・斜方 向のハケ目、指頭圧痕	ナデ、指押さえ、 斜方向のハ ケ目	にぶい穂・ 相	にぶい穂・ 相	2mm以下の黒・茶・茶褐色砂粒、透明 黒色鉱物粒を含む。
138	7号住居	费・頭・側 部	—	—	—	貼付突帯、横ナデ	横方向のハケ目	にぶい穂	にぶい黄	2mm以下の暗青灰・黑色砂粒を少く含 む。
139	7号住居	费・頭・側 部	—	—	—	ナデか	纏ナデ	相	相	5mm以下の灰褐色砂粒を多く、茶褐色 鉱物粒を少く含む。
140	7号住居	费・耐・底 部	—	6.5~8	—	板状工具による纏ナ デ、横ナデ	しほり痕、斜方向の ナデ	相	黄灰	3mm以下の灰・黑・白・黃澁・暗褐色 鉱物粒、透明鉱物粒を含む。
141	7号住居	费・頭・側 部	—	—	—	斜方向のナデ、丁寧 な纏ナデか	指ナデ、指押さえ	相	相	2mm以下の黒・白・茶褐色砂粒、1 mm以下の透明・黑色鉱物粒を含む。
142	7号住居	费・頭・底 部	—	2.5	—	纏・斜方向のナデ、 指頭圧痕	纏ナデ、指頭圧痕	黄澁	相	3mm以下の灰色砂粒、2mm以下の黑 色柱状・透明の鉄物粒を含む。
143	7号住居	费・耐・底 部	—	(6.2)	—	4種の貼付突帯、横 ナデ、横方向のミガ キ、斜方向のハケ 目	横ナデか	にぶい穂・ 相	浅黄相・相	3mm以下の灰・黒・白・黃澁・暗褐色 鉱物粒、透明鉱物粒を含む。
144	7号住居	费・口縁部	(11.2)	(4.8)	21.0	横ナデ、纏ナデ、斜 方向のナデ	横ナデ、指押さえ、 斜方向のハケ目	相	相	3mm以下の灰・暗青灰・灰褐色砂 粒を多く含む、2mm以下の半透明鉱 物粒を少く含む。
145	7号住居	费・底部	—	4.1	—	纏ナデ、指押さえ	纏ナデ	灰褐色	にぶい穂	2mm以下の茶褐色砂粒、1mm以下 の透明鉱物粒を含む。
146	7号住居	高坏・ 脚部	—	(12.2)	—	横ナデ、円形透かし	横ナデ	相	相	2mmの大粒灰・2mm以下の黒・茶・ 灰白色砂粒を含む。
147	7号住居	高坏・ 脚部	—	—	—	横方向のミガキ、横 ナデ	横ナデ	にぶい穂・ 相	暗青灰	2.5mm以上の赤褐色・灰褐色砂 粒、透明・黑色鉱物粒、0.5mm以下の 褐色砂粒を含む。
148	7号住居	费・口縁部	(11.5)	(3.1)	10.25	斜・纏方向のハ ケ目、横ナデ	横ナデ	にぶい穂	にぶい穂	3mm以下の茶褐色砂粒を少量、2mm 以下の灰褐色砂粒を多く含む。
149	7号住居	费・口縁部	(12.4)	—	6.2	横ナデか	横ナデか	にぶい穂	にぶい穂	3mm以下の灰・白・茶褐色砂粒を多 く、2mm以下の半透明鉱物粒を含む。
150	7号住居	费・口縁部	(14.4)	—	—	横ナデ、纏ナデ	板状工具による斜め または横方向のナ デ、纏ナデ	浅黄相	浅黄相	4mm以下の灰・灰白・茶色砂粒、黑色 柱状の鉱物粒を多く含む。
151	7号住居	沟子形上器	—	—	—	ナデ、指押さえ痕	—	相	相	4mm以下の灰褐色砂粒、赤褐色砂 粒、白色砂粒を含む。
152	8号住居	费・口縁部	—	—	—	横ナデ、纏方向のハ ケ目上の貼付突帶	横ナデ、横・斜め、 纏方向のハケ目	にぶい穂	にぶい穂	5mm以下の茶・3mm以下の黒・赤褐色 砂粒を含む。
153	8号住居	费・口縁部	—	—	—	横ナデ	横ナデ、一部纏ナデ	にぶい穂	灰褐色	3mm以下の灰・黒・茶褐色砂粒、白色 半透明鉱物粒を多く含む。

第1表 下大五郎遺跡出土弥生土器觀察表（5）

() は推定

器 番 号	出土 地點	器種・ 部・位	法量 (cm)			手法・調整・文様他		色調		胎土の特徴
			口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面	
156	8号住居	甕・口縁部	—	—	—	横ナデ	横ナデ	に赤い模様	黒灰	2mm以下の灰灰・灰白・黑色砂粒を含む。白色砂粒をわずかに含む。
157	8号住居	甕・口縁部	—	—	—	横ナデ、貼付刻目突帯、刻目	横ナデ	暗灰黄	黒褐	3mm以下の黒・茶色砂粒、1mm以下の透明藍物粒を含む。
158	8号住居	甕・口縁部	—	—	—	横ナデ	横ナデ、指揮さえ痕	に赤い模様	に赤い模様	2mm以下の灰灰・茶褐色砂粒を多く含む。
159	8号住居	甕・口縁・ 側部	—	—	—	横ナデ、斜方向のハケ目	横ナデ、斜方向のハケ目	横	横	2.5mm以下の赤褐・黒・灰色砂粒。透明藍物粒を含む。
160	8号住居	甕・胴部分	—	—	—	斜方向の工具ナデ	横方向の工具ナデ	に赤い模様	に赤い模様	2mm以下の灰灰・灰白紺粒、1mm以下の透明藍物粒を含む。
161	8号住居	甕・胴部	—	—	—	貼付突帯、ミガキ	不明	に赤い模様	浅黃褐	4mm以下の茶褐・灰褐色砂粒を多く含む。
162	8号住居	甕・肩部	—	—	—	貼付突帯、部分的に横ナデ、ハケ目か	ナデか	模様	明黄褐	2mm以下の黒・灰・白色砂粒。透明藍物粒を含む。
163	8号住居	甕・胴部	—	—	—	貼付突帯、ナデか	ナデか	浅黃褐	模様	3mm以下の黒・灰・褐・白色砂粒。透明藍物粒を含む。
164	8号住居	鉢・口縁～ 側部	—	—	—	横ナデ、斜方向のナデ	横ナデ、丁寧なナデ	に赤い模様	に赤い模様	0.5mm以下の黒・灰色砂粒を含む。
165	8号住居	コップ形土器・底部	—	(6.6)	—	縦ナデ、横ナデ	横ナデ	灰褐黄	灰褐黄	2mm以下の黒・灰・茶褐色砂粒、透明藍物粒を含む。
166	8号住居	ミニチュア 上器	4.6	—	2.35	手捏ね、指揮正面	横ナデ	に赤い模様 ・縦灰	明黄褐	1mm以下の透明・黑色藍物粒。黒・茶褐色砂粒を含む。
170	9号住居	鉢・口縁部	—	—	—	横ナデ、斜方向のハケ目	横ナデ、斜方向のハケ目	に赤い模様	4mm以下の茶・2mm以下の灰・黑色砂粒。透明藍物粒を含む。	
171	9号住居	高坪・口縁 部	(24.8)	—	—	横方向のヘラミガキ	横方向のヘラミガキ	模様	に赤い模様	2mm以下の灰・黑色砂粒、透明藍物粒を含む。
172	9号住居	鉢・口縁～ 底部	(11.4)	(4.8)	10.25	横ナデ、粗い斜方向 のヘラナデ	横ナデ、縦ナデ	に赤い模様	に赤い模様	2mm大の茶褐色砂粒をわずかに含む。1mm以下の黒・灰・茶褐色砂粒を含む。
173	9号住居	ミニチュア 上器	(4.2)	1.0	3.05	手捏ね、指揮正面	手捏ね、指揮正面	黒褐	黒褐	1mm以下の灰色砂粒をわずかに含む。
174	9号住居	ミニチュア 上器	2.2	2.2	2.0	手捏ね、指揮正面	手捏ね、指揮正面	模様	模様	1mm以下の黒色砂粒を多く含む。黑色藍物粒をわずかに含む。
175	9号住居	土製勾玉				ナデ	ナデ	灰・黄褐 ・に赤い模 ・縦灰	—	2.5mm以下の赤い模様・1mm以下の黒褐・乳白色砂粒を含む。
176	10号住居	鉢・口縁～ 側部	(13.1)	—	—	縱方向のヘラミガキ ラミミタニ	横または縦方向へのヘラミタニ	に赤い模 ・縦灰	に赤い模 ・縦灰	4mm以下の黒・灰・茶褐色砂粒、1mm以下の黑色模様の藍物粒を含む。
177	10号住居	甕・口縁部	—	—	—	横ナデ、縱方向のハケ目	横ナデ、斜方向のハケ目	に赤い模様	に赤い模 ・縦灰	3mm以下の黒・灰・茶褐色砂粒、2mm以下の透明藍物粒を含む。
178	10号住居	甕・口縁部	—	—	—	横ナデ、櫛波波状文、 縦ナデ	縦ナデ	に赤い模 ・縦灰	に赤い模 ・縦灰	に赤い模 ・縦灰
179	10号住居	甕・胴・底 部	—	—	7.6	粗い斜方向のミガキ	斜方向のナデ。一部 ハラナデ	に赤い模 ・縦灰	灰白・灰 ・縦灰	1mm以下の灰・灰・茶色砂粒を多く含む。1mm以下の黑色藍物粒を含む。
180	10号住居	鉢・口縁～ 側部	—	—	10.8	横ナデ、縦ナデ	縦ナデ、横ナデ、指 頭正面	に赤い模 ・縦灰	浅黃褐	3mm以下の灰灰・黒褐・に赤い模様の藍物粒を含む。
181	10号住居	甕・胴・底 部	—	—	—	縦ナデ	斜方向のナデ	に赤い模 ・縦灰	浅黃褐	3mm以下の黒・茶・灰色砂粒。透明藍物粒を含む。
182	10号住居	鉢・口縁部	—	—	—	横ナデ、一部ミガキ か	横ナデ	に赤い模 ・縦灰	に赤い模 ・縦灰	2mm以下の透明藍物粒、茶褐色砂粒を少量。黒褐色砂粒を多く含む。
183	10号住居	高坪・底部	—	—	—	斜方向のミガキか	ナデか	に赤い模 ・縦灰	浅黃褐	3mm以下の灰灰・黒褐・茶褐色砂粒を含む。
184	10号住居	薄台・底部	—	—	—	縦・斜方向のミガキ	横ナデ	に赤い模 ・縦灰	浅黃褐	黑色柱状の藍物粒を少量。3mm以下の茶褐色砂粒を多く含む。
185	10号住居	鉢・口縁部	—	—	—	横ナデ、斜方向のハ ケ目	横ナデ、縦ナデ	模様	に赤い模 ・縦灰	1mm以下の黒・灰白・茶褐色砂粒。透明藍物粒を含む。
187	11号住居	甕・口縁～ 側部	(29.4)	—	—	横ナデ、貼付刻目突 帶、斜方向のハケ目	横ナデ、斜方向のハ ケ目、ナデ	横・周灰 ・に赤い模 ・縦灰	模様	2mm以下の灰灰・黒・に赤い模・灰白色砂粒。微細な灰白色半透明・黑色・透明の藍物粒を多く含む。
188	11号住居	甕・口縁～ 底部	—	—	18.5	横ナデ、斜め、縦方 向のハケ目、縦ナデ	斜方向のハケ目、同 ナデ、横方向のハケ 目	に赤い模 ・縦灰	浅黃褐	2mm以下の黄褐・橙・灰・灰白・黒褐色砂粒。透明・黑色藍物粒を含む。
189	11号住居	甕・口縁部	—	—	—	横ナデ、貼付刻目突 帶、斜方向のハケ目	横ナデ、斜方向のナ デ	に赤い模 ・縦灰	浅黃	3mm以下の黒褐・褐・黑色砂粒。白色半透明・黑色藍物粒を含む。
190	11号住居	甕・胴部	—	—	—	横ナデ、縦方向のハ ケ目	斜方向のナデ	に赤い模 ・縦灰	浅黃	2mm以下の赤い模様・灰白色砂粒。微細な黑褐色砂粒を含む。
191	11号住居	甕・口縁部	—	—	—	横ナデ、縦方向のハ ケ目か	斜方向のナデ	に赤い模 ・縦灰	—	1.5mm以下の黒褐・褐色砂粒。微細な透明藍物粒を含む。

第1表 下大五郎遺跡出土弥生土器觀察表（6）

器 器番 号	出土 地點	器種・ 部	法量 (cm)			手法・調整・文様他		色 調		胎土の特徴	
			口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
192	II号住居	壺・口縁部	—	—	—	横ナデ	横ナデ	に赤い黄緑	に赤い黄緑	1mmの大さの褐色。1mm以下の乳白・黒色砂粒を含む。	
193	II号住居	壺・口縁部	(48.2)	—	—	横ナデ、貼付突帯、斜方向のナデ	横ナデ、縦ナデ	に赤い黄緑	褐灰	1mm以下の乳白色。微細な黑色砂粒を含む。	
194	II号住居	壺・口縁部付近	(19.3)	—	—	横ナデ、縱方向のハケ目、横ナデ	横ナデ、縱方向のハケ目、横ナデ	に赤い黄緑	灰黄緑	4mm以下の浅黄緑・灰黄褐色砂粒。微細な透明氷晶物粒を含む。	
195	II号住居	壺・胸・底部付近	—	—	—	縱方向のハケ目	斜方向のナデか	相・灰黄緑	オーリーブ相	3.5mm以下の大褐色・浅黄緑・灰褐色砂粒を多く含み、1mm以上の黒色・透明白色物粒を含む。	
196	II号住居	壺・口縁部	8.7	—	—	横ナデ	横ナデ	に赤い相	に赤い相	2mm以下の乳白・褐灰色。0.5mm以下の透明氷晶物粒を含む。	
197	II号住居	壺・口縁部	—	—	—	ナデか	横ナデ	浅黄緑	に赤い黄緑	2mm以下の黒褐色・褐・黄緑・乳白色砂粒を含む。	
198	II号住居	壺・口縁部	(10.8)	—	—	円線文、横ナデ	横ナデ	に赤い相	に赤い相	2mm以下の灰白・白褐色砂粒を含む。	
199	II号住居	壺台・口縁部	(18.0)	—	—	横ナデ、縦ナデ	横ナデ	に赤い相	相	2mm以下の黒・灰白・褐色砂粒を含む。	
200	II号住居	壺・颈部	—	—	—	3条の貼付突帯、横ナデ、斜方向のナデか、ヒラミガキか	横ナデ、斜方向のナデか	相	相	3mm以下の黒褐色・褐・灰褐色砂粒。微細な透明氷晶物粒を含む。	
201	II号住居	壺・口縫付近・斜部	—	—	—	横ナデ、斜方向へのヒラミガキか	横ナデ、斜方向のナデ	に赤い相・に赤い黄緑	灰黄緑	5mm以下の赤褐色・灰褐色砂粒。1mm以下の黒褐色・透明白色物粒を含む。	
202	II号住居	壺・口縁部	—	—	—	斜方向のナデ、横ナデ	横ナデ	に赤い相	に赤い相	3mm以下の赤褐色砂粒を含む。	
203	II号住居	壺・口縫部	(11.4)	—	—	縦方向のヘラミガキ、縦ナデ	縦ナデ	相	相	3.5mm以下の明褐色・赤褐色砂粒。微細な透明氷晶物粒を含む。	
204	II号住居	壺・斜部	—	—	—	斜・斜め・横ナデ、工具による沈線	しばり痕	に赤い黄緑	褐灰	2mm以下の黒褐色・褐色砂粒を含む。	
205	II号住居	壺・口縫・腹部	(18.1)	13.5	26.3	横ナデ、縦方向のハケ目、ヒラミガキか、3条の沈線	横ナデ、縦ナデ、縦ナデ	に赤い黄緑	褐灰	1.5mm以下の黒褐色・乳白・褐色砂粒、微細な透明白色物粒を含む。	
206	II号住居	鉢・口縫・底部	(26.3)	(9.4)	19.9	貼付突帯、横ナデ、板状工具による斜方向のナデ、斜方向のヒラミガキ	横ナデ、縦・斜方向のナデ	灰黄緑・に赤い相・に赤い黄緑	灰黄緑	6mm以下の赤褐色・相・黑褐色砂粒、2.5mm以下の乳白・赤褐色砂粒。微細な透明氷晶物粒を含む。	
207	II号住居	壺・口縁部	—	—	—	横ナデ、円形浮文	横ナデ	に赤い黄緑	褐・褐灰	1mm以下の乳白・0.5mm以下の灰褐色の砂粒を含む。	
210	II号住居	壺・口縫・底部	—	20.9	4.5	30.0	横ナデ、斜めまたは縦方向のナデ	横ナデ、斜方向のナデ	に赤い黄緑・相	相	5mm以下の茶褐色・褐色。2mm以下の白色砂粒を多く含む。
211	II号住居	壺・口縁部	—	—	—	横ナデ	横ナデ	相	相	3mm以下の灰褐色・に赤い赤褐色・灰・灰白・浅黄褐色砂粒を多く含む。	
212	II号住居	壺・口縁部	—	—	—	横ナデ	横ナデ	に赤い黄緑	相	4mm以下の灰褐色・2mm以下の黒褐色砂粒。透明氷晶物粒を含む。	
213	II号住居	ミニチュア上器	—	1.9	—	ナデか	ナデか	黄緑	に赤い黄緑	2mm以下の灰褐色・灰・灰白・灰黄褐色砂粒を多く含む。	
214	II号住居	壺・底部	—	—	3.5	縦ナデ	板状工具による縦ナデ	に赤い黄緑	黄緑	5mmの灰褐色・相・3mm以下の乳白・灰褐色・灰白・赤褐色砂粒。白色・黑色・褐色砂粒を含む。	
215	II号住居	鉢・口縫部	—	—	—	ナデか	ナデか	相	相	2mm以下の相・相・黒褐色砂粒を含む。	
216	II号住居	壺・口縁部	—	—	—	柳描波状文、横ナデ	横ナデ	に赤い黄緑	相	微細~1mmの大さの黒褐色砂粒を多量に、1mm前後の透明白色物粒を少量含む。	
217	II号住居	ミニチュア上器	—	—	—	線刻、ミガキか	ナデか	に赤い黄緑	相	微細~1mmの大さの茶色砂粒。白色半透明・黒色氷晶物粒を含む。	
218	II号住居	ミニチュア上器	—	—	0.95	斜方向のミガキ	しばり痕、丁寧な縦ナデ	相	浅黄緑・相	2mm以下の灰褐色・灰・灰白・赤褐色砂粒。1mm以下の黒褐色氷晶物粒を含む。	
219	II号住居	壺・胸・底部	—	—	2.1	板状工具による縦ナデ	横ナデ	黒褐色・に赤い相	里褐	1mm以下の灰白・黑色砂粒。微細な透明白色物粒を含む。	
220	II号住居	壺・底部	—	—	4.9	斜方向のナデ	縦ナデ	黄緑	浅黄緑	2.5mm以下の灰褐色・灰白・灰黄・明褐色・に赤褐色砂粒を含む。	
221	包含層	壺・底部	—	—	3.7	工具による強い縦ナデ	ナデ	黄緑	浅黄緑	2mm以下の灰褐色・灰白・灰黄・に赤褐色砂粒を多く含む。	
222	II号住居	高环・口縫	—	—	—	横ナデか	横ナデ	相	相	3mm以下の茶褐色・白色砂粒を多く含む。	
223	II号住居	壺・口縫部	—	—	—	横・斜方向のナデ	横・斜方向のナデ	に赤い黄緑	相	1mm以下の灰・オーリーブ黒色砂粒を含む。	
224	II号住居	鉢・口縫部	—	—	—	横ナデか	横ナデ	浅黄緑	浅黄緑	1.5mm以下の黒・灰褐色砂粒を含む。	
225	II号住居	高环・口縫	—	—	—	斜方向のナデ、横ナデ	横ナデ	相	浅黄緑	4mm以下の灰褐色・灰白・白色砂粒、黑色砂粒を多く含む。	

第1表 下大五郎遺跡出土弥生土器觀察表(7)

器番号	出土地点	器種・部	法量(cm)			手法・調整・文様他		色調		胎土の特徴
			口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面	
226	12号住居	高环・口縁部	—	—	—	横ナデ	横ナデ	相	相・黒	2mm以下の灰・灰色砂粒が多く含む。2mm以下の黑色・白色砂粒を少し含む。
227	12号住居	高・口縁部	—	—	—	横ナデ	横ナデ	にぶい相	にぶい相	2mm以下の灰白・灰白色砂粒、透明・黑色砂粒を含む。
228	12号住居	高环・口縁部	—	—	—	横ナデ	横ナデ	浅黄相	浅黄相	2mm以下の灰白・褐色砂粒を含む。
229	12号住居	高环・口縁部	(26.8)	—	—	横ナデ・縦ナデ	横ナデ	黒褐・明黄 相	にぶい黄相	4mm以下の浅黄・灰白・黑色砂粒を含む。
230	12号住居	脚か・脚台部	—	(26.8)	—	縦ナデ・横ナデ	斜方向のナデ・横ナデ	相	相	4mmの大里・茶色砂粒少々と2mm以下の灰・灰・白色砂粒を多く含む。
231	12号住居	高环・脚部	—	(18.4)	—	斜方向のナデ・横ナデ	横ナデ	相	相	3mm以下の茶褐・白色、1mm以下の黑色砂粒を含む。
232	12号住居	脚・口縁部	—	—	—	横ナデ・斜方向のナデ	横ナデ・丁寧な横ナデ	にぶい相	にぶい相	6mmの大岩茶色砂粒少々、4mm以下の灰・灰・黒・白・茶色砂粒を多量、2mm以下の黑色砂粒を少量含む。
233	12号住居	脚・口縁部	(12.6)	14.0	8.7	丁寧な斜方向のナデ	斜方向のナデ	相	浅黄相・相	0.5mm以下の褐色砂粒を多く含む。
234	12号住居	ミニチュア上器	—	3.9	—	縦ナデ・縦方向のミガキ	横・斜方向のナデ	浅黄相	にぶい相	4mm以下の赤褐・褐色砂粒、1.5mm以下の灰白色砂粒を含む。
235	12号住居	ミニチュア上器	—	(1.6)	—	横ナデ	ナデか・指揮させ痕 にぶい相	相・灰黄相	相・灰黄相	4mm以下の褐色砂粒、2.5mm以下の明褐色砂粒を含む。
236	12号住居	ミニチュア上器	4.6	—	2.2	指頭压痕	ナデか	にぶい黄相	にぶい黄相	2mm以下の茶・灰・黑白・黑色砂粒、透明・黑色砂粒を含む。
237	12号住居	ミニチュア上器	4.9	0.8	3.4	指頭压痕	指頭压痕	にぶい黄相	にぶい黄相	3mm以下の茶・黑・白色砂粒、透明砂物粒を含む。
238	12号住居	ミニチュア上器	4.85	1.4	3.7	指頭压痕	指頭压痕	にぶい黄相・灰 相	相・灰	2mm以下の茶・灰・黑色砂粒、黑色・透明砂物粒を含む。
243	包含層	脚・口縁部	—	—	—	貼付刻目突帯、ナデか	ナデか	浅黄相	浅黄相	4.5mm以下の灰褐・褐・灰・明褐色砂粒を多く含む。
244	包含層	脚か・口縁部	—	—	—	円線・横ナデ	横ナデ	浅黄相	浅黄相	2mm以下の茶・黑・灰色砂粒、透明砂物粒を含む。
245	包含層	脚・口縁部	—	—	—	横ナデ・斜方向のナデ	横ナデ・斜方向のナデ	にぶい黄相	にぶい黄相	3mm以下の黒褐・褐色砂粒を多く含む。
246	包含層	脚・口縁部	(20.6)	3.5	20.3	横ナデ・縦ナデ・指 頭压痕	横ナデ・斜方向のナデ	浅黄相・灰 相	浅黄相・淡 黄相	7mmの大岩赤色砂粒、4mm以下の灰褐・灰・灰・灰白砂粒、1mm以下の黑色砂粒を多く含む。
247	包含層	脚・口縁部	(16.7)	—	—	横ナデ・縦ナデ・斜め・横方 向のナデ	横ナデ・斜め・横方 向のナデ	褐褐・灰 相	褐褐・灰 相	1.5mm以下の灰白色砂粒、1mm以下の透明砂物粒を多く含む。
248	包含層	脚・口縁部	—	—	—	横ナデ・横・斜方向 のナデ	横ナデ・斜方向のナ デ	浅黄相	にぶい黄相	3.5mm以下の灰褐色、1mm以下の灰白色砂粒、微細な透明砂物粒を含む。
249	包含層	脚・口縁部	(15.3)	—	—	横ナデ・縦ナデ	横ナデ・斜方向のナ デ	相・灰褐 相	相・灰褐 相	1mm以下の茶褐・灰褐・にぶい相・灰褐色砂粒、黑色・透明砂物粒を含む。
250	包含層	脚・口縁部	—	—	—	横ナデ・縦方向のナ デ	横ナデ・斜方向のナ デ	褐	にぶい相	1mm以下の明褐色・褐・黑色砂粒を含む。
251	包含層	脚・口縁部	—	—	—	貼付刻目突帯、横ナ デ	斜方向のナデか	黄相	浅黄相	3mm以下の灰白・灰褐・灰褐色砂粒を多く含む。
252	包含層	脚・口縁部	—	—	—	縦方向のナデ	横ナデ・斜方向のナ デ	にぶい黄相	にぶい黄相	3mm以下の灰・褐・褐・灰褐色砂粒、1mm以下の透明砂物粒を含む。
253	包含層	脚・口縁部	—	—	—	刻目突帯、横ナデ	横ナデ・指頭压痕	灰黄相	灰黄相	1mm以下の透明砂物粒・灰白・浅黄相砂粒を含む。
254	包含層	脚・口縁部	—	—	—	貼付刻目突帯、横ナ デ	横ナデ	褐褐	にぶい黄相	2mm以下の白・乳白・褐色砂粒、黑色・透明砂物粒を含む。
255	包含層	脚・茎・脚部	—	—	—	貼付刻目突帯、横ナ デ	横ナデ	灰黄相	にぶい黄相	3mm以下の淡褐・明褐・灰褐・灰白色砂粒を含む。
256	包含層	脚・脚部	—	—	—	貼付刻目突帯、横ナ デ	横ナデ	にぶい黄相	にぶい黄相	2mm以下の灰色・微細な黑色砂粒、透明砂物粒を含む。
257	包含層	脚・脚部	—	—	—	貼付刻目突帯、横ナ デ	横ナデ	相	相	2mm以下の白・灰色砂粒を多く含む。1mm以下の黑・褐色砂粒を含む。
258	包含層	脚・脚部	—	—	—	貼付刻目突帯、横ナ デ	横・斜方向のナデ	にぶい相	にぶい黄相	1mm以下の黒・茶色砂粒を多く含む。
259	包含層	脚・脚部	—	—	—	貼付突帯、横ナデ・斜 方向のナデ	横ナデ・指 頭压痕	にぶい相	にぶい黄相	3mmの大岩片、2mm以下の灰・褐色砂粒を含む。
260	包含層	脚・底部	—	(5.1)	—	縦ナデ	ナデか	明黄相	黒	1mmの大岩白・黒・茶色砂粒を多く含む。3~4mmの大茶色砂粒を含む。
261	包含層	脚・底部	—	(3.2)	—	上方へのケズり、縦 方向のナデ	強いナデ	にぶい相	灰	2mm以下の茶褐・黒・白色砂粒、黑色柱状の砂物粒を含む。

第1表 下大五郎遺跡出土弥生土器觀察表（8）

器 器番 号	出土 地點	器種・ 部 位	法量 (cm)			手法・調整・文様他		色 調		胎土の特徴
			口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面	
262	包含層	甕・底部	—	3.7	—	斜方向のナデ、横ナデ	縦ナデ	柾	柾	3mm以下の透明氈物粒、2mm以下の黒・灰・茶色砂粒を含む。
263	包含層	甕・底部	—	4.85	—	斜方向のナデ	工具による縦ナデ	柾・に古い にぶい黄柾	柾	4mm以下の透明氈物粒、15mm以下のおろし切削痕、透明白色砂粒の痕跡粒、15mm以下のおろし切削痕、無鉛氈物粒を含む。
264	包含層	甕・底部か	—	—	—	縦ナデ	縦ナデ、横ナデ	柾	に古い物	1mm～2mm大の黒・灰・茶色砂粒を多く含む。
265	包含層	甕・底部	—	3.9	—	斜方向のナデ	斜方向のナデ	明黄柾	柾	4mm以下の赤褐色・灰白・灰・黑色砂粒、透明氈物粒を含む。
266	包含層	甕・底部	—	7.45	—	—	ナデか	柾	柾・に古い 黄柾	3mm以下の明黄柾・に古い柾・に古い赤褐色・黑色砂粒・白色干涉・黑色柱状の痕跡粒を含む。
267	包含層	甕・口縁 側面部	(13.9)	—	—	横ナデの上に櫛描波 状文、斜方向のヘラ ミガキ	横ナデ、縦方向の指 ナデ、斜方向のナデ	柾	柾	3mm大の茶色砂粒をわざに含み、3mm以下の灰白・黑色砂粒を多く含む。
268	包含層	甕・口縁 側面部	(13.6)	—	—	櫛描波状文、横ナデ、 斜方向のナデ	横ナデ	に古い黄柾	に古い黄柾	2mm以下の黒褐色・褐・灰白色砂粒を多く含む。
269	包含層	甕・口縁 側面部	(13.6)	—	—	横ナデ、縦方向のヘ ラミガキ	丁寧な横ナデ	に古い黄柾 ・褐灰	に古い黄柾	2mm以下の茶色砂粒をわざに含む。
270	包含層	鉢・口縁部	—	—	—	櫛描波状文	横ナデ	に古い黄柾	に古い黄柾	5mm大の茶色・黑色砂粒を少頭、3mm以下の黒・灰・白・褐・暗紅・砂粒。透明氈物粒を含む。
271	包含層	甕・口縁部	4.4	—	—	横ナデ、縦ナデ	横ナデ	に古い柾	に古い柾	1mm以下灰白・褐・灰色砂粒を含む。
272	包含層	甕・口縁部	—	—	—	ナデか	ナデか	柾	柾	1mm以下灰白・褐・灰色砂粒。微細な透明氈物粒を含む。
273	包含層	甕・口縁部	—	—	—	横ナデ	ナデ、斜方向のナデ	に古い黄柾	に古い黄柾	4.5mm以下の灰褐色・に古い赤褐色・黒褐色・灰白・灰褐色砂粒を多く含む。
274	包含層	甕・口縁部	—	—	—	線刻鋸歯文、横ナデ	横ナデ	柾	柾	5mm以下の灰白・に古い赤褐色・2mm以下の灰白・茶色砂粒を含む。
275	包含層	鉢・口縁部	—	—	—	櫛描波状文、横ナデ	横ナデ	に古い柾	に古い柾	2mm以下の黒褐色・褐色砂粒を含む。
276	包含層	鉢・口縁部	—	—	—	横ナデ、櫛描波状文、 縦方向のヘラミガキ	横ナデ	に古い黄柾	に古い黄柾	1.5mm以下のおろし切削痕・黒褐色砂粒・透明氈物粒を含む。微細なに古い褐色砂粒をわざに含む。
277	包含層	鉢・口縁部	—	—	—	櫛描波状文、縦ナデ	横ナデ	に古い黄柾	に古い黄柾	1mm以下の黒・褐色砂粒を多く含む。
278	包含層	甕・口縁部	—	—	—	横ナデ、斜方向のナ デ	柾・に古い 柾	柾	柾	4mm以下の灰黄・灰・灰白・黑褐色砂粒。透明氈物粒を含む。
279	包含層	甕か・口縁 部	—	—	—	門線、横ナデ	横ナデ	浅黄柾	浅黄柾	3mm以下の灰・茶・黑色砂粒、透明氈物粒を含む。
280	包含層	鉢・口縁部	—	—	—	櫛描波状文、縦方向 のヘラミガキ	横ナデ	に古い黄柾	に古い黄柾	2mm以下の灰褐色・灰白・黑褐色砂粒、黑色・透明氈物粒を含む。
281	包含層	甕・口縁部	(24.0)	—	—	横方向のミガキか、 横ナデ	横ナデ	に古い黄柾	に古い黄柾	3mmの大茶色砂粒を少量、1.5mm以下の金色氈物粒、黄柾・灰白色的砂粒を含む。
282	包含層	甕・口縁部	—	—	—	貼付突帯、横ナデ、 横方向のミガキ	横ナデ	に古い柾	に古い柾	1mm以下の黒・褐色砂粒を含む。
283	包含層	甕・口縁部	—	—	—	刻目、ナデか	横ナデ	柾	に古い柾	2mm以下の灰・褐・褐・褐・暗褐色砂粒、黑色・透明氈物粒を含む。
284	包含層	甕・口縁部	—	—	—	貼付刻目突帯、横ナ デ	縦ナデ、指揮さえ	浅黄柾・柾	灰黄	2.5mm以下の灰白・白・黑色砂粒を多く含む。
285	包含層	甕・口縁部	—	—	—	刻目突帯、浮文、横 ナデ、縦ナデ	ナデか	柾	明黄柾	3mm以下の白・灰・灰白・茶色砂粒を多く含む。
286	包含層	甕・口縁部	—	—	—	貼付突帯、横ナデ	ナデか	に古い柾・ 灰褐色	に古い柾	4mm以下の灰白色・2mm以下の和 白色・白・灰・に古い・褐色・明黄色の砂 粒、黑色透光・透明氈物粒を含む。
287	包含層	甕・口縁部	—	—	—	貼付突帯、横ナデ	斜方向のナデ	に古い柾	暗灰	1.5mm以下のに古い・褐・暗褐色砂粒、1mm以下の暗褐色砂粒、透光・黑色氈物粒を含む。
288	包含層	甕・口縁部	—	—	—	貼付突帶、横ナデ	ナデか	柾	柾	6mmの大乳白色砂粒、4mm以下の乳白色砂粒、微細な透明氈物粒を含む。
289	包含層	甕・口縁部	—	—	—	貼付突帶、丁寧な横 ナデ	斜方向のナデ	柾	柾	1mm以下の黒・灰・黄褐色砂粒、微細な透明氈物粒を含む。
290	包含層	甕・口縁部か	—	—	—	斜方向のナデ後横方 向のミガキ	横ナデ	に古い黄柾 ・前灰	に古い柾	2mm以下の灰褐色・暗褐色・明赤褐色・暗灰褐色砂粒、微細な透明氈物粒を含む。
291	包含層	甕・口縁部	—	—	—	貼付突帶、横方向の ヘラミガキ	斜方向のナデ、斜方 向のハケ目	柾・黑褐色	に古い柾	3mm以下の灰褐色・暗褐色・透光氈物粒、1mm以下の灰白色・灰褐色砂粒を含む。
292	包含層	甕・口縁部	—	—	—	貼付突帶、横ナデ	横ナデ	に古い黄柾	暗灰	2mm以下の灰・黒・褐色砂粒、微細な半透明氈物粒を含む。
293	包含層	不明・口縁 部か	—	—	—	板状工具によるナ デ、凹線	不明	浅黄柾	浅黄柾	3mmの淡黄・褐色砂粒を含む。

第1表 下大五郎遺跡出土弥生土器觀察表（9）

標号	出土 地点	器種・ 部 位	法量 (cm)			手法・調整・文様他		色 調		胎土の特徴
			口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面	
294	包含層	壺・底部	—	—	—	丁寧な縦または横方向のナデ	斜方向のナデ	にぶい黄褐色	に深い黄褐色 ・黒褐色	5mm以下の茶・茶褐色・灰白色砂粒。黑色柱状の鉱物粒を含む。
295	包含層	壺・底部	—	(4.8)	—	縱方向のミガキ、斜方向のナデ	斜方向のナデ	にぶい褐色	に深い黄褐色	2mm以下の黒・灰・黑褐色砂粒。黑色柱状の鉱物粒を含む。
296	包含層	壺・底部	—	4.5	—	縱ナデ	斜方向のナデ	にぶい黄褐色	浅黄褐色	2mm以下の茶・灰・淡黄褐色砂粒。透明鉱物粒を含む。
297	包含層	壺・口縁部	—	—	—	横ナデ、縱ナデ	横ナデ	にぶい黄褐色	に深い黄褐色 ・灰褐色	2.5mm以上の明褐色・暗褐色・褐色にぶい茶・灰白色砂粒。黑色・透明・黑色柱状の鉱物粒を含む。
298	包含層	高杯・口縁部	(21.6)	—	—	横ナデか、指頭圧痕	横方向のミガキか、縱方向のミガキか	にぶい褐色	に深い褐色	微細な黒褐色砂粒を含む。
299	包含層	鉢・口縁部	(21.2)	—	—	ナデか	ナデか	にぶい褐色 ・にぶい黄褐色	にぶい黄褐色 ・浅黄褐色	3mm以上の黒・灰・茶褐色砂粒。2mm以下の透明・半透明・黑色柱状の鉱物粒を含む。
300	包含層	高杯・口縁部	—	—	—	横ナデか	縱方向のミガキか	にぶい黄褐色	に深い黄褐色	1mm以下の黒褐色砂粒を多く含む。
301	包含層	高杯・环部	—	—	—	横方向のミガキ、縱ナデ	縱方向のミガキ	にぶい褐色	に深い黄褐色	4mm以下の黒・灰・茶褐色砂粒。2mm以下の透明・半透明鉱物粒を含む。
302	包含層	鉢か・側部	—	—	—	縱方向のミガキ	縱ナデの後横方向の黒粗いミガキ	黒褐色	にぶい黄褐色 ・灰褐色	0.5mm以下の灰白色砂粒。微細な透明鉱物粒を含む。
303	包含層	高杯・杯部	—	—	—	横ナデ、縱ナデか	横ナデ	褐色	褐色	3mm以下の黒・褐色砂粒を多く含む。 1mm以下の白色砂粒を含む。
304	包含層	鉢・附・脚台	—	—	—	帶状突起に3条の沈線、上には櫛状突起、横方向のハラミガキ	横ナデ	にぶい黄褐色	浅黄・黒褐色 ・灰褐色砂粒	2.5mm以下の茶褐色・黒褐色・褐色にぶい茶・灰褐色砂粒。黑色・透明・黑色柱状の鉱物粒を含む。
305	包含層	高杯・脚部	—	—	—	斜方向のナデ、横ナデ	横ナデ	にぶい黄褐色	に深い黄褐色	1mmの大粒灰白色砂粒をわずかに含み、1mm以下の黒褐色砂粒を多く含む。
306	包含層	高杯・脚部	—	—	—	縱方向のミガキ	横方向にケズリ、横ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	2mm以下の黒褐色柱状の鉱物粒を多く含む。 1.5mm以下の灰白色砂粒、透明鉱物粒を含む。
307	包含層	鉢・口縁～底部	17.9	—	(8.8)	丁寧な横ナデ	横ナデ	にぶい黄褐色	に深い黄褐色	3mm以下の黒・灰・茶褐色砂粒を多く含む。
308	包含層	鉢・口縁部	(19.4)	—	—	横ナデ、指頭圧痕	横ナデ、指頭圧痕	褐色	にぶい褐色	2mm以下の黒・灰・茶褐色砂粒、透明・半透明・黑色柱状の鉱物粒を含む。
309	包含層	鉢・口縁～底部	(17.5)	5.5	15.4	横・斜め・縱方向のナデ	横ナデ	褐色	にぶい褐色	3mm以下の黒褐色・褐色・灰褐色砂粒を多く含む。 2mm以下の半透明鉱物粒を少額含む。
310	包含層	蓋・天井～脚部	(25.9)	12.8	4.0	指頭圧痕	縱ナデ、指の圧痕、指頭圧痕	黃褐色・灰褐色	褐色・灰褐色	3mm以下の赤褐色・黒褐色・黒・灰褐色砂粒を多く含む。
311	包含層	鉢・口縁～底部	(10.2)	4.7	10.7	板状工具による縱ナデ、斜方向のナデ、横ナデ、指頭圧痕	横ナデ、指頭圧痕	褐色	褐色	4mm以下の赤褐色・灰褐色・浅黄褐色・黒褐色砂粒を多く含む。 1mm以下の透明鉱物粒を含む。
312	包含層	ミニチュア上器	—	3.3	—	縱ナデ、横ナデ	縱ナデ	浅黄褐色	褐色	2mm以下の黒・灰・褐色砂粒を含む。
313	包含層	ミニチュア上器	5.05	1.15	3.4	指ナデ、指頭圧痕	横ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	1.5mmの茶褐色砂粒を含む。 1mm以下の灰白色・茶褐色砂粒をわずかに含む。
314	包含層	ミニチュア上器	5.95	—	3.65	ナデ、指頭圧痕	横ナデ、指頭圧痕	浅黄褐色	浅黄褐色	1.5mm以下の茶褐色砂粒を含む。
315	包含層	ミニチュア上器	4.7	1.3	2.8	指頭圧痕	指頭圧痕	灰褐色	灰褐色	2.5mm以下の透明・黑色柱状の鉱物粒、黄褐色砂粒を含む。
316	包含層	ミニチュア上器	4.3	0.35	3.1	指頭圧痕、ナデ	斜方向のナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	1.5mm以下の黒・灰褐色砂粒を含む。
317	包含層	舟形土器上部	—	—	—	指頭圧痕	指頭圧痕、ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	2mm以下の灰・黑・乳白・褐色砂粒を含む。
318	包含層	舟形土器上部	—	—	—	指頭圧痕	指頭圧痕、ナデか	浅黄褐色	にぶい褐色	1mm以下の黒・灰・茶褐色砂粒を含む。
319	包含層	舟形土器上部	—	—	—	指頭圧痕	指頭圧痕、ナデか	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	3mm以下のにぶい赤褐色・黒褐色・黒褐色砂粒を含む。
320	包含層	土器器・坪	12.0	5.6	5.15	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄褐色	にぶい褐色	2mm以下の黒・黑褐色砂粒。薄細な透明鉱物粒を含む。
321	包含層	陶器・蓋	4.4	3.7	1.45	施釉	無釉	黒褐色	にぶい赤褐色	精良

第2表 下大五郎遺跡出土石器計測表

図番号	出土位置	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材
8	1号住居跡	剥片	1.75	1.45	0.3	0.9	頁岩
22	2号住居跡	石庖丁	3.2	7.6	0.5	19	頁岩
23	2号住居跡	石庖丁	3.95	8.7	0.7	38	頁岩
24	2号住居跡	敲石	5.9	4.9	1.9	77.5	砂岩
25	2号住居跡	軽石製品	10.6	2.3	2.2	11.5	軽石
30	3号住居跡	剥片	5.4	3.15	0.8	11.3	頁岩
31	3号住居跡	打製石斧	7.85	5.05	1.9	92.8	頁岩源ホルンフェルス
32	3号住居跡	軽石製品	8.35	9	3	70.7	軽石
37	4号住居跡	磨製石鐵	3.8	2.6	0.2	1.8	緑色凝灰岩
43	5号住居跡	磨製石鐵	2	2.3	0.2	1.1	頁岩
44	5号住居跡	剥片	2.35	1.15	0.3	1.1	頁岩
45	5号住居跡	磨製石鐵	2	1.75	0.2	1	頁岩
46	5号住居跡	剥片	3.2	2.65	0.2	2.1	緑色凝灰岩
47	5号住居跡	砥石	9.35	7.25	1.15	81.8	砂岩
48	5号住居跡	軽石	11.1	8.85	4.5	149.7	軽石
49	5号住居跡	石皿	16.55	11.85	3.3	817	砂岩
111	6号住居跡	剥片	5.9	4	1.1	24.5	頁岩
112	6号住居跡	砥石	13.1	3	0.9	24.2	頁岩
113	6号住居跡	磨石か	6.2	2.6	1.45	39.6	砂岩
114	6号住居跡	凹石	15.7	6.45	4.7	617.1	砂岩
115	6号住居跡	敲石・磨石	16.8	6.3	4.5	137.6	砂岩
116	6号住居跡	軽石	9.1	6.1	3.5	30.5	軽石
117	6号住居跡	軽石	20.6	15.4	6.1	527	軽石
118	6号住居跡	ガラス製小玉	0.3	0.3	0.22	0.1以下	ガラス
119	6号住居跡	ガラス製小玉	0.36	0.4	0.25	0.1以下	ガラス
152	7号住居跡	砥石	12.7	5	1.85	178.2	頁岩
153	7号住居跡	軽石	14	5.8	4.95	79	軽石
167	8号住居跡	磨製石鐵	2.45	1.75	0.25	1.2	頁岩
168	8号住居跡	剥片	3.05	1.9	0.4	2	頁岩
169	8号住居跡	砥石	17.6	7.3	6.2	1103.7	砂岩
186	10号住居跡	砥石	19	4.1	1.6	147.8	頁岩
208	11号住居跡	磨製石鐵	1.95	1.7	0.2	0.9	緑色凝灰岩
209	11号住居跡	磨製石鐵	3.1	2.25	0.2	1.4	緑色凝灰岩
239	12号住居跡	剥片	4.65	2.95	0.55	8.9	緑色凝灰岩
240	12号住居跡	軽石製品	4.6	2.35	0.8	4.4	軽石
241	12号住居跡	軽石製品	7.9	5.3	1.1	13.1	軽石
242	12号住居跡	軽石製品	14.3	4.7	2.8	56.9	軽石
322	包含層	石庖丁	3.2	5.3	0.6	17.1	頁岩源ホルンフェルス
323	包含層	剥片	6.35	3.2	0.65	13.1	頁岩
324	包含層	剥片	3.15	1.7	0.4	1.5	頁岩
325	包含層	砥石	3.6	2.8	0.7	10.5	頁岩
326	包含層	砥石	4.4	3.65	0.45	9.1	砂岩
327	包含層	砥石	9.15	2.8	1.2	44.6	頁岩

4 まとめ

下大五郎遺跡では、前節までにのべてきたように、竪穴住居跡が12軒、棟持柱付を含む掘立柱建物跡2棟、溝状遺構1条、土坑2基が検出され、弥生土器、石器等が出土した。遺物の多くは住居跡からのものである。ここではこれらの遺構・遺物に関して若干の私見を交えながら解釈を加えまとめてみたい。

(1) 住居跡の形態的な特徴について

下大五郎遺跡では、遺構として竪穴住居跡12軒と掘立柱建物跡2棟が検出された。竪穴住居跡の特徴としては、以下のように大きく2つに分類できる。

A 方形プラン	a 間仕切りをもつもの	SA 2・SA 3・SA 11・SA 12
	b 間仕切りを持たないもの	SA 1・SA 4・SA 5・SA 8
B 円形プラン	a 間仕切りをもつもの	SA 6・SA 7・SA 9
	b 間仕切りをもたないもの	SA 10

住居の規模としては、最大の6号住居跡が長軸9mで最小の1号住居跡が4.5m程度で全体的に規模の大きな住居が目立つ。また、主柱穴は、2本ないし4本柱が最も多く、1軒ずつであるが5本柱や6本柱以上のものもみうけられた。間仕切り部分は、ベッド状遺構がないものや削平したものがみられる。しかし6号住居跡で間仕切り部分に8個体の長頸壺がみられたことは、その部分は重要なものを鎮座する大切な場所としての認識が為されていたのではないかと思われる。その住居からガラス製の小玉が検出されたことから下大五郎遺跡の中の中心的存在の家ではなかったのか。

(2) 弥生土器について

弥生土器は、甕・壺・高环・器台・鉢などが出土している。器種別にその特徴によって分類したい。

甕I類：口縁部が折れて「く」の字に外反し口縁部の下位に突帯をもつもの。(中溝式系土器)

a：突帯に刻み目を持つもの。(26, 28, 29, 38, 57, 157, 187, 189, 190, 243, 251, 253～259)

b：突帯に刻み目を持たないもの。(33, 35, 154, 193.)

甕II類：口唇部が明確な「く」の字状に外反し胴部との明瞭な境界線を持つもの。

(2, 9, 10, 39, 50, 54, 56, 123～127, 176, 188, 191, 192, 194, 210, 212, 246, 247, 248～250, 252)

甕III類：口唇部が緩やかに「く」の字状に外反するが胴部との明瞭な境界線を持たないもの。

a：口唇部はやや丸みをもつが平面に近いもの。(27, 51, 52, 120～122, 155, 156, 158, 159, 177)

b：口唇部に先細りや断面にやや丸みを持つもの。(1, 11, 53, 210, 245, 273)

甕IV類：甕の底部を一括した。(58, 59, 60, 62, 214, 260～263, 264～266)

甕V類：その他の甕を一括した。(160, 195)

壺I類：口縁部が二重口縁を呈していて、一部口縁部に櫛描波状文を施されているものである。

(3, 63, 64, 65, 67, 68, 70, 72, 135, 136, 138, 161, 162, 163, 178, 202, 207, 216, 244,

268, 271, 272, 274, 281, 297)

壺II類：直口口縁の壺の一群である。

a：口縁部は大きく開きながら外反するものである。

(34, 35, 40, 41, 69, 71, 75, 76, 178, 196, 200, 201, 204, 267)

b：口縁部は短く小さく外反するものである。(12, 13, 269)

c : 口縁部は頸部から緩やかに伸びながら外反するものである。(196, 197, 198)

壺Ⅲ類：口縁部が長頸の壺の一群である。(81, 83~89, 91~94, 144, 203)

壺Ⅳ類：口縁部が直立気味の短頸の壺の一群である。

(64, 66, 74, 80, 82, 90, 128~134, 139~142, 179~181, 211, 223, 270, 279)

壺V類：貼付突帯を有するものを一括した。(42, 73, 143, 161~163, 200, 282~293)

壺VI類：底部を一括した。(14~15, 36, 77~80, 82, 218~221, 294~296)

高环I類：环部は、一度明瞭に屈曲し直立または内湾気味に立ち上がるもの。(183, 205)

高环II類：环部は、一度明瞭に屈曲し緩やかに外反しながら立ち上がるもの。

(95~99, 103, 171, 298, 300, 301, 303)

高环III類：环部は、緩やかに屈曲し外反しながら立ち上がるもの。(100, 101, 222, 226, 227~229, 299)

高环IV類：脚部を一括した。

a : 脚部が細長くラッパ状に開くものと、短くラッパ状に開くもの。(20, 225, 231, 306)

b : 脚部は短く裾部内湾形を呈するもの。(146, 147, 305)

鉢a類：頸部で屈曲し大きく外反するもの。(170, 176)

鉢b類：頸部で内湾しながら立ち上がるもの。

(17, 106~110, 149, 164, 185, 206, 224, 232, 233, 302, 304, 307~309)

鉢c類：底部から直線的に立ち上がるもの。(16, 19, 148, 150, 172, 182, 215, 275~278, 311)

鉢d類：底部を一括した。(61, 145, 230)

以上、甲斐貴充氏の分類（下那珂編年：2004）をもとに本遺跡に置き換えて分類している。この分類を石川悦雄氏の編年（石川編年：1992）を基に考察し、竪穴住居跡の編年作業に生かしたい。壺I類は、g 煙光博氏等の研究成果から中溝式系土器である。石川編年で言うところのIVa期に相当する。壺II類は、石川編年のVa期に、壺III類は、Vb期にそれぞれ相当すると考えられる。また、壺I類は、石川編年のVa期に相当する。壺II類も石川編年のVa期に相当する。壺III類は、長頸壺でVb期に相当する。特に6号住居跡で検出されたものは、8個体とも住居の間仕切り部分に並べられていた。この集落の中心的な住居と考えられ祭祀に関係するものと思われる。壺IV類は、Vd期に相当する。高环I類は、石川編年のIVb期にあたる。また、高环II類は、Vc・d期に相当する。高环III類は、VI期に相当すると思われる。鉢a類は、Va期に相当する。また、鉢b類は、Vb類に相当する。鉢c類は、Vb類に相当する。鉢d類は、Vb類に相当する。以上のことから本遺跡出土の弥生土器は、ほぼ弥生後期の範疇内に収まると思われる。

（3）竪穴住居跡の時期的変遷について

本遺跡の竪穴住居跡は、先に述べたように12軒検出された。この住居跡群は切り合いが無く、一見すべて同時期に建てられたものと思われたが、念のために出土土器から編年を試みた。各住居跡の中でも古い様相と新しい様相が混在するものがみられた。そこで新しい様相で時期を決定した。1号住居跡（Va期）・2号住居跡（Va期）・3号住居跡（IVa期）・4号住居跡（IVa期）・5号住居跡（IVa期）・6号住居跡（Vb期）・7号住居跡（Vc期）・8号住居跡（IVa期）・9号住居跡（Vb期）・10号住居跡（Vd期）・11号住居跡（IVa期）・12号住居跡（Vb期）となる。従って住居の変遷は次の通りとなる。

弥生時代後期初頭（IVa期） 3号住居跡・4号住居跡・5号住居跡・8号住居跡・11号住居跡
弥生時代後期中葉（Va～Vd期） 1号住居跡・2号住居跡・6号住居跡・7号住居跡・9号住居跡・
10号住居跡・12号住居跡

以上のように、本遺跡は弥生時代の後期初頭～後期中葉の頃の集落であろうと思われる。

（4）棟持柱付掘立柱建物跡について

本遺跡では、花弁状間仕切り住居跡の他に掘立柱建物跡が2棟検出されている。そのうち1棟は棟持柱を持つ建物跡であった。九州でもその検出例は多くはない。北部九州では、佐賀県の立野遺跡で13棟の掘立柱建物跡が検出されているが、そのうち5棟が棟持柱を持つもので時期は弥生時代Ⅲ期である。いずれも小型の建物であるという点は、本遺跡に類似している。南九州では鹿児島県の例がある。いずれも弥生時代Ⅳ期に属するもので、鹿児島県王子遺跡・上野原遺跡・前畠遺跡で検出されているが、いずれも本遺跡に類似しており小型の建物跡である。宮崎県の事例は都城市的平田遺跡で棟持柱建物跡が5棟検出されている。他に宮崎市の椎屋形第1遺跡A地区では5棟の掘立柱建物跡が検出されているが、そのうち4棟が棟持柱建物跡である。この棟持柱建物跡の機能として広瀬和雄氏は、クラと「神殿」の複合的機能を提唱している。そして理由の第1として機能的に効果があるかどうか疑わしい独立棟持柱のような特殊な構造を持つことをあげている。この独立棟持柱を備える、すなわち屋根の軒びが大きいということは他の掘立柱建物跡と異なった外観をみせていることになる。宮本長二郎氏も「弥生時代以後の独立棟持柱高床式建築は、祭式儀礼にかかるる建物であった可能性が高い」とみなされている。そして第2の理由として当該建物は弥生絵画の主要な画題になっている。第3の理由として平面形からすれば「神明造」の祖形とみなすことができる点である。第4に祭祀遺物を伴う例を挙げている。

絵画を持つ弥生土器のことなどがよい例である。本遺跡では、7号住居跡で線刻を持つ弥生の壺が出土している。以上の理由から本遺跡の棟持柱建物跡は「祭祀」を司った「神殿」の可能性が考えられる。

（5）おわりに

本遺跡では、竪穴住居跡を12軒検出した。1990年当時としては、花弁状間仕切り住居跡は珍しく、その北限は、小丸川以南とされていたが、現在では宮崎県北部でも検出されるようになってきている。

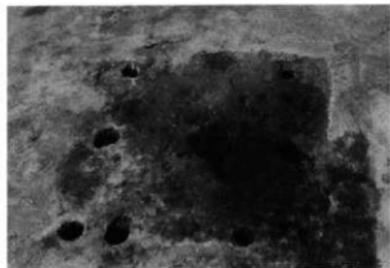
また掘立柱建物跡が2棟検出されているが、そのうち1棟は独立棟持柱をもつ建物ということが注目される。6号住居跡の間仕切り部の8個体の長頸壺は、棟持柱建物が「神殿」として利用されていたことを考えると現在で言う床の間のような機能を有しているのではないかと考えられる。

参考文献

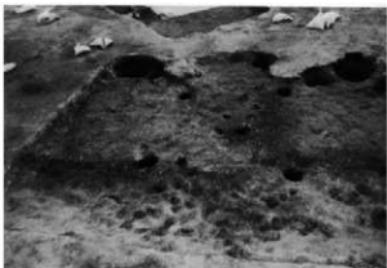
- 甲斐貴充 2004「下那珂遺跡」『県総合農業試験本場果樹園造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第90集
- 浅川滋男編 1998 「先史日本の住居とその周辺」『奈良国立文化財研究所シンポジウム報告』
- g 畑光博 2000 「中溝式系土器の検討」『古文化論叢』第45集
- 石川悦雄 1984 「宮崎平野における弥生土器編年試案－素描（Mk.II）」

遺跡近景（北から）





1号住居跡完掘状況



2号住居跡完掘状況



3号住居跡完掘状況



6号住居跡完掘状況（南から）



長頸壺出土状況



6号住居跡完掘状況（北から）

図版3
(下大五郎遺跡)



8号住居跡完掘状況



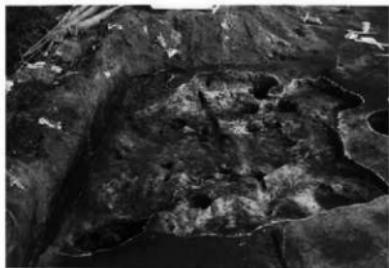
4号住居跡完掘状況



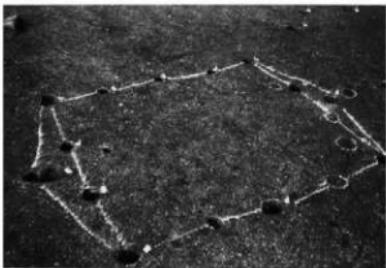
9号住居跡完掘状況



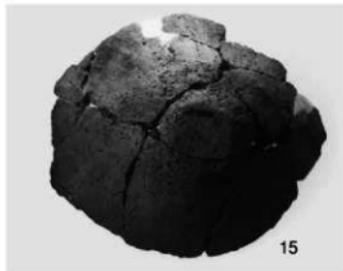
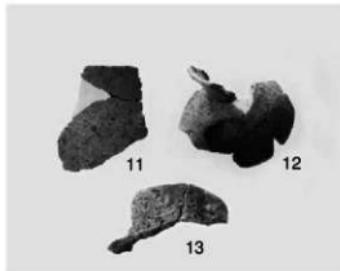
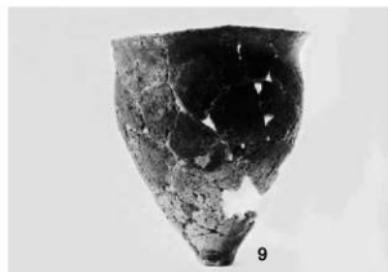
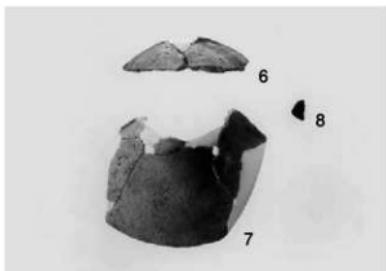
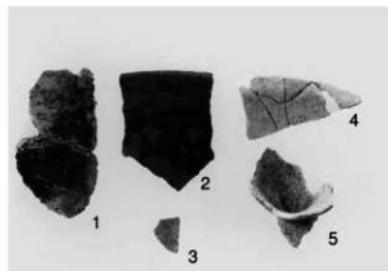
10号住居跡完掘状況（南から）



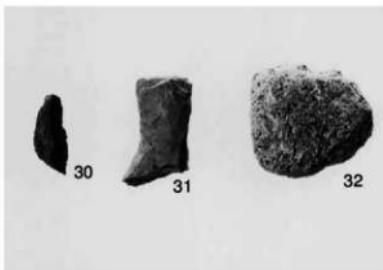
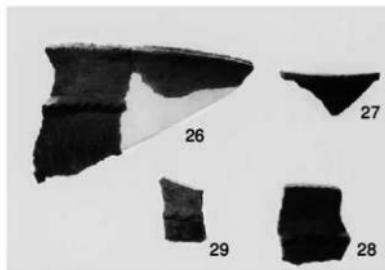
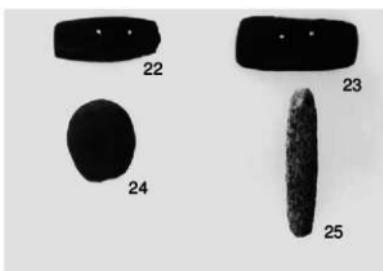
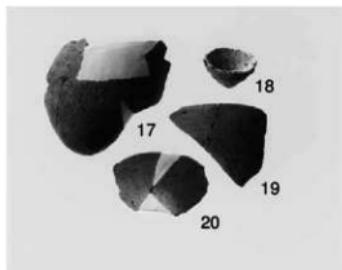
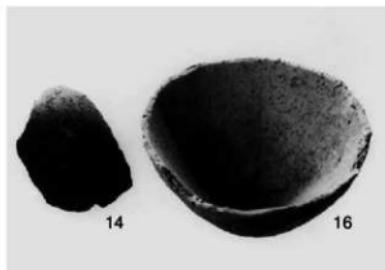
12号住居跡完掘状況



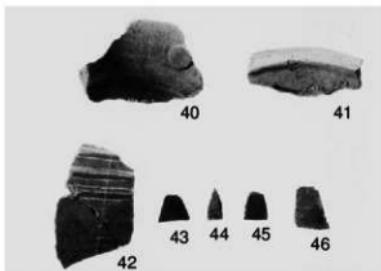
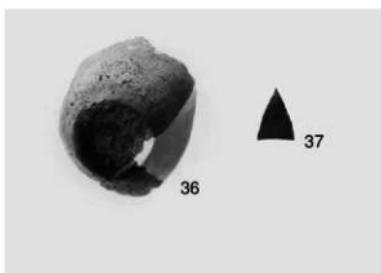
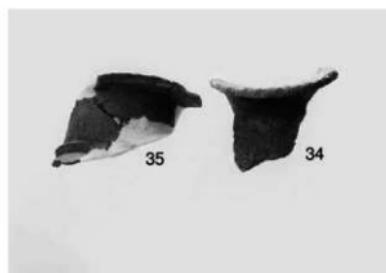
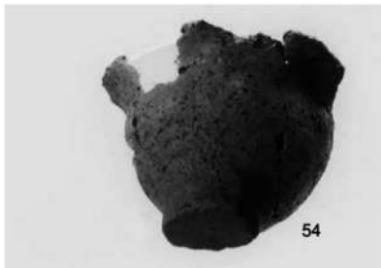
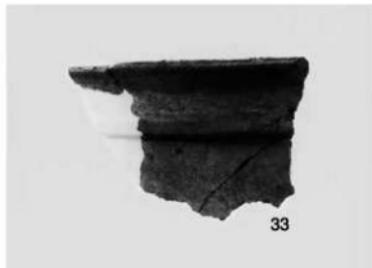
1号棟持柱付掘立柱建物跡



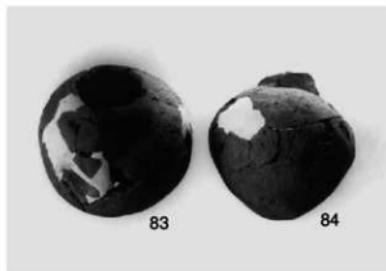
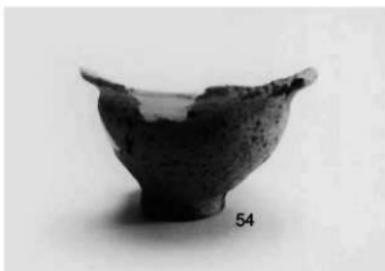
1号・2号住居跡出土遺物



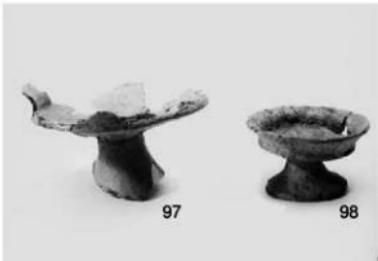
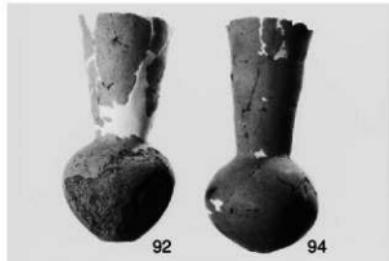
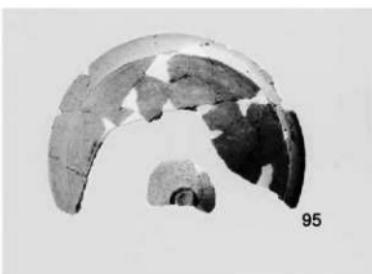
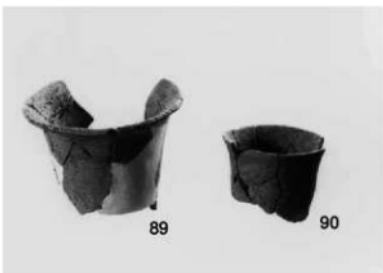
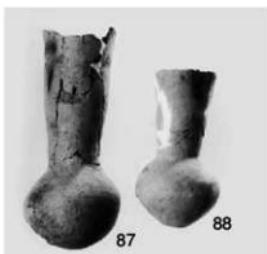
2号・3号住居跡出土遺物



4号・5号住居跡出土遺物

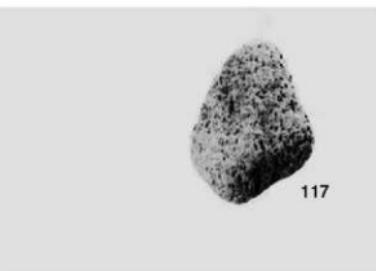
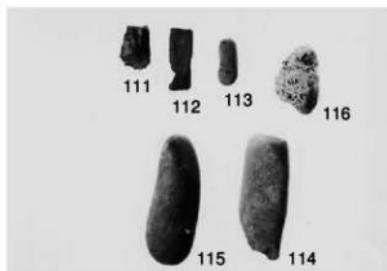
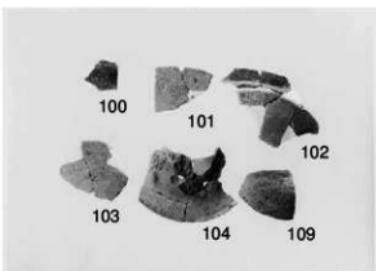


5号・6号住居跡出土物

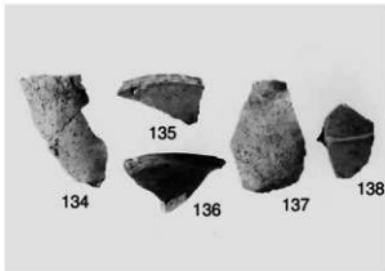
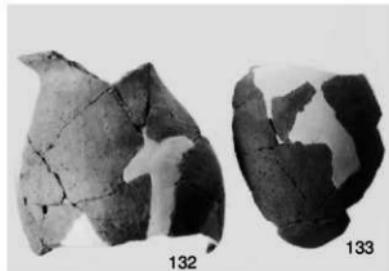
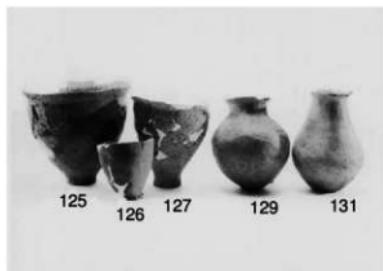


6号住居跡出土遺物（2）

図版9
(下大五郎遺跡)

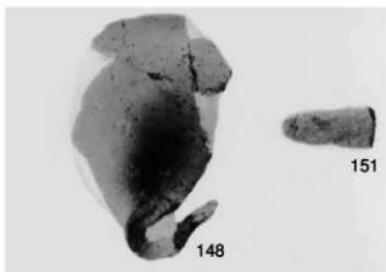
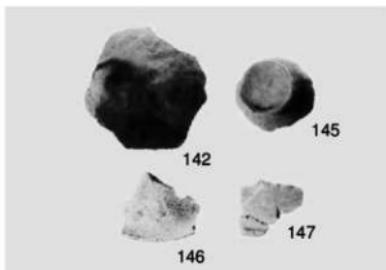
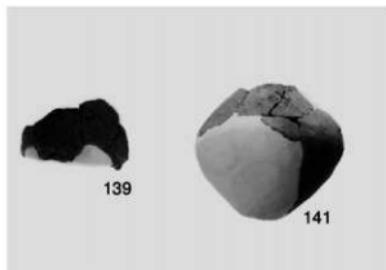


6号住居跡出土遺物 (3)

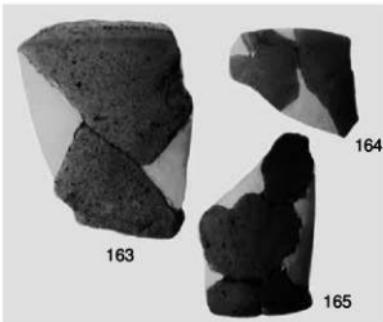
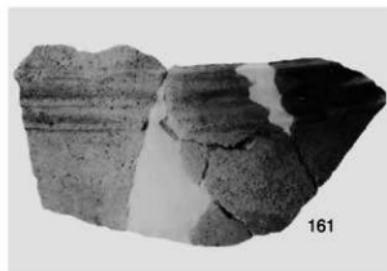
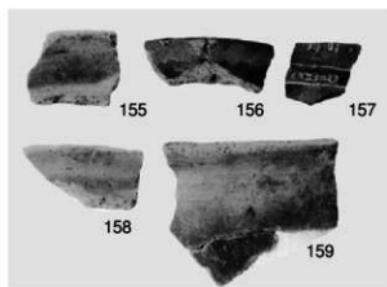
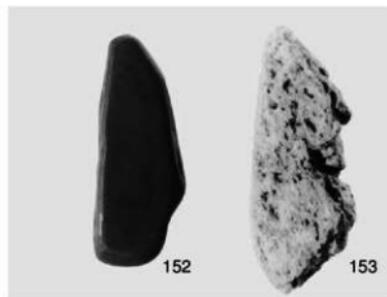


7号住居跡出土遺物(1)

図版 11
(下大五郎遺跡)

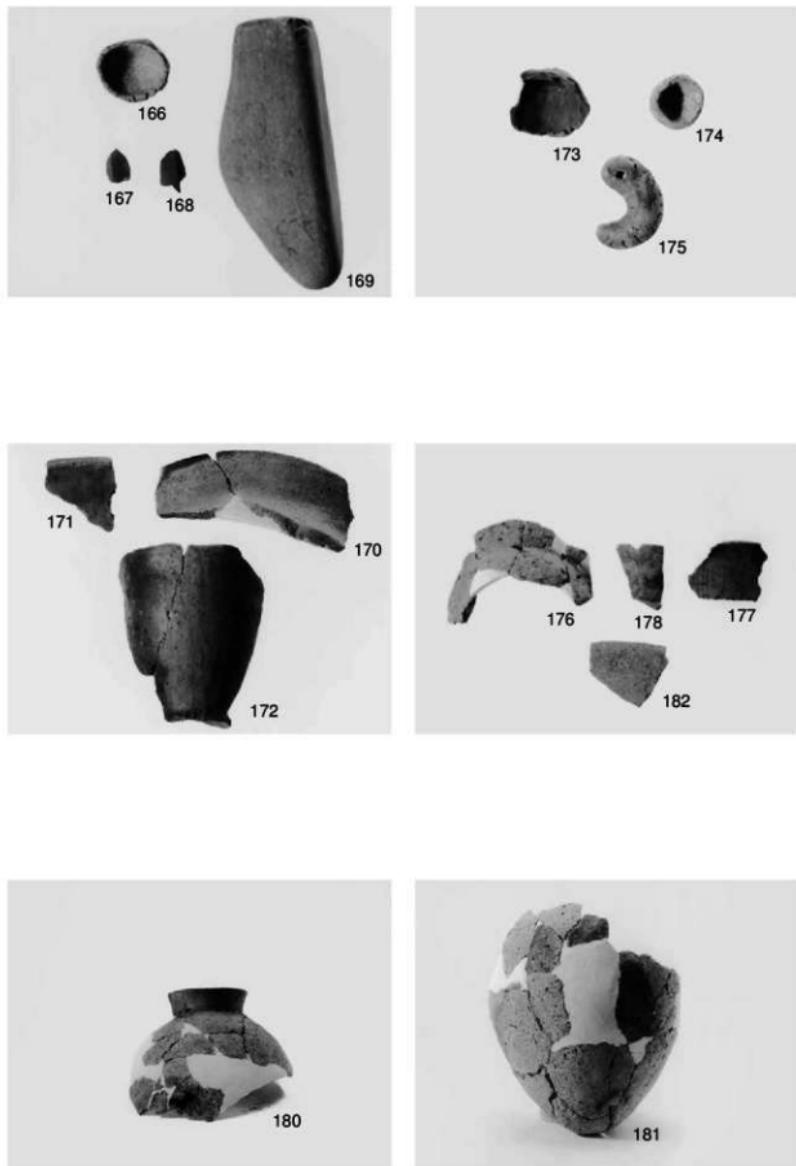


7号住居跡出土遺物(2)

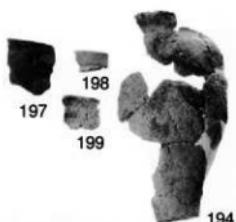
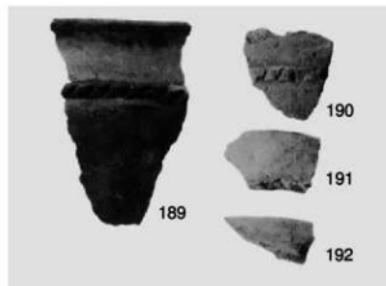
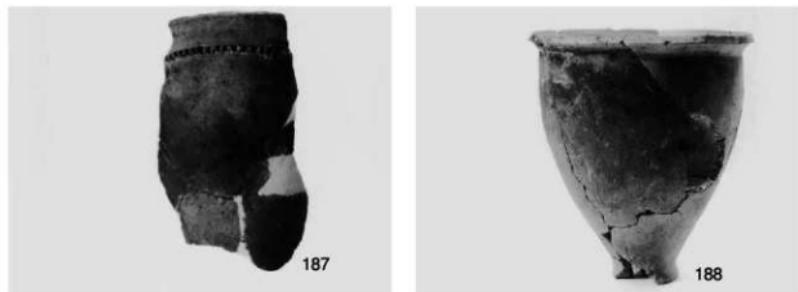
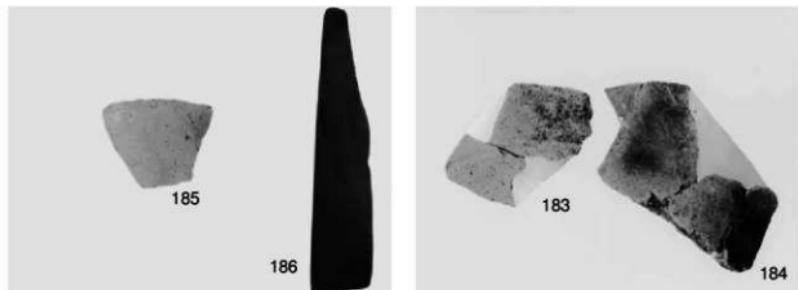


8号住居跡出土遺物

図版
13
(下大五郎遺跡)



9号・10号住居跡出土遺物



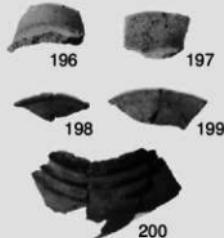
10号・11号住居跡出土遺物



194



189



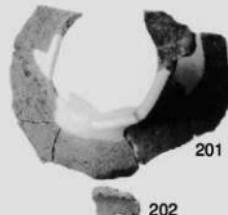
196

197

198

199

200



201

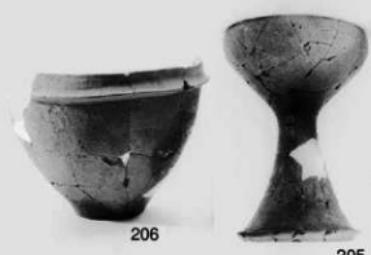
202



203

204

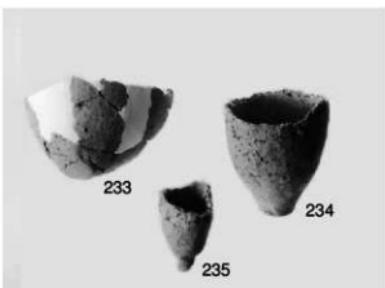
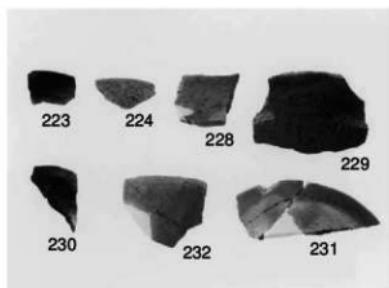
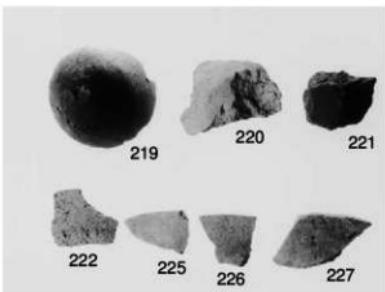
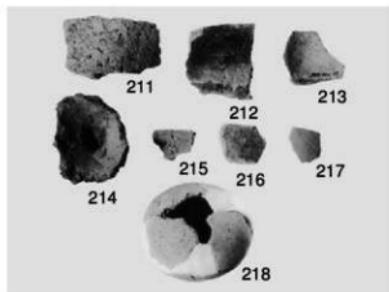
207



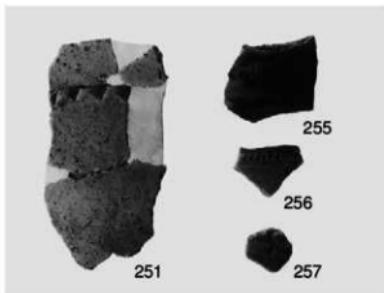
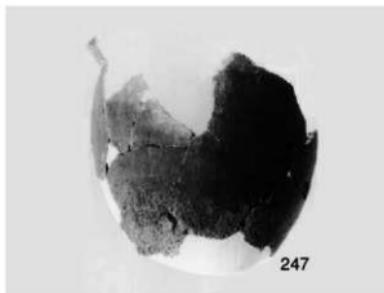
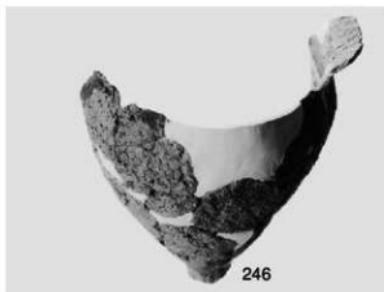
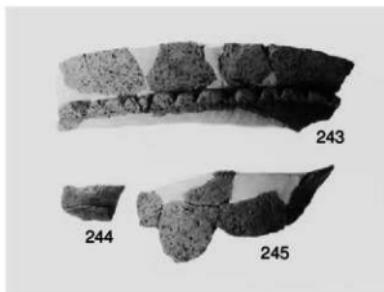
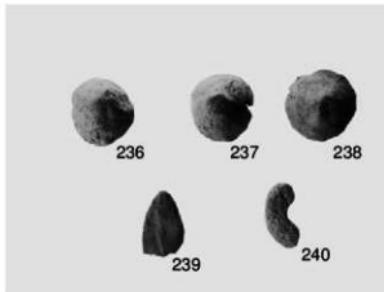
206

205

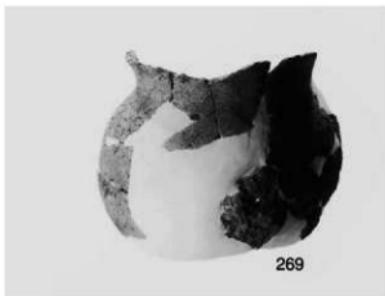
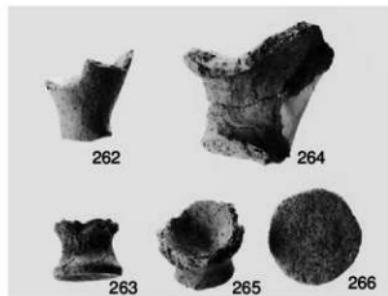
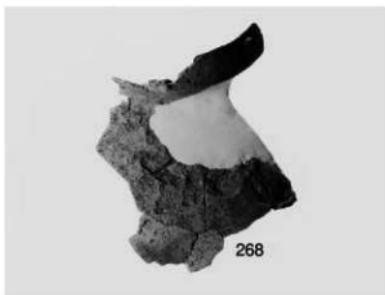
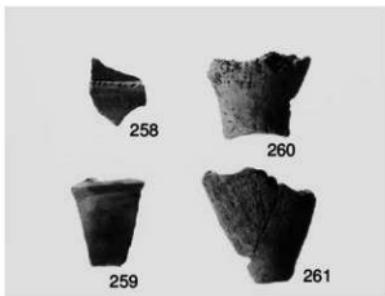
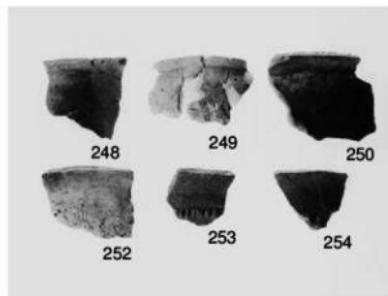
11号住居跡出土遺物



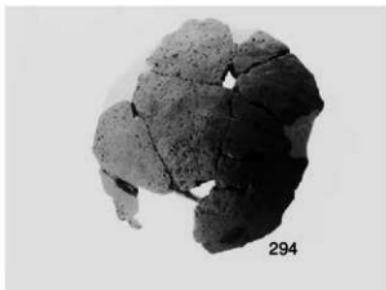
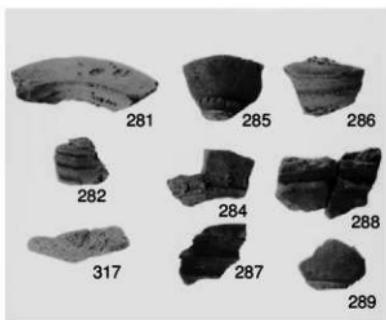
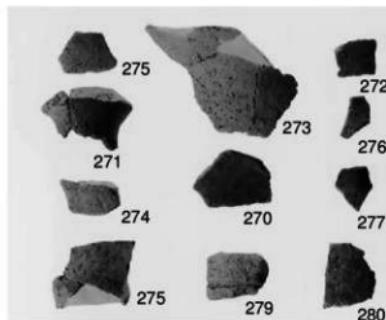
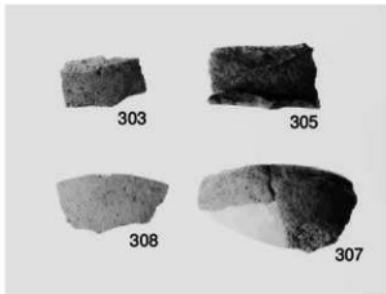
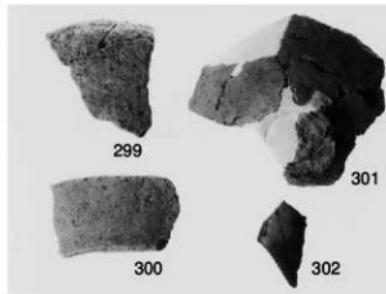
12号住居跡出土遺物



12号住居跡・包含層出土遺物



包含層出土遺物 (2)



包含層出土遺物 (3)

第2節 谷ノ口遺跡の調査

1 調査区の設定と概要

調査対象地は、丸谷川が扇状に蛇行する隣接地であり、河川改修事業により直線的に流露を整備する位置にある。現況は水田であるが、その立地条件から、過去に幾多の洪水被害に見舞われたことが容易に推測された。

調査対象地のうち、試掘調査により畦畔の存在が確認された地点を中心に調査区を設定した。多量の湧水が予想されたため、調査区を取り囲む排水溝を掘削し、水中ポンプにより排水を行った。

表土掘削では、現地表面より約1.5m下に見られた粗砂層（層厚15~20cm）までを重機により除去し、その直下の粘土層（VI層）を第1調査面に設定した。

調査区中央よりやや東寄りの位置に、土層確認のための土堤を掘り残す形で設置した。

第1調査面の精査終了後は、土層堆積の状況に応じて、部分的に順次掘り下げを行い、

表土より約2.8m下の第XV層を全面的に精査するものとしては第2調査面とした。第1・第2の両調査面の間にも、部分的な精査は行った。

第2調査面の深度は、丸谷川現河床よりも大きく下がる状態となり、それ以上の掘削・調査は不可能と判断されたため調査を終了した。

参考のために、第2調査面よりも下層を重機により約1m程度部分掘削したところ、厚く堆積した砂礫層から勢いよく水が吹き上がる状態であった。その砂礫層に混入して重機バケット中に掘り取られた粘土層からも、分析の結果、多くのプラントオバールが検出された。このことにより、第2調査面よりも更に下層に、水田包蔵の可能性があることが推定されたが、分厚い砂礫層中の薄い粘土層であり、ある程度の広がりを持つ安定した土層であるのか、洪水等で流出した部分的な粘土塊であるのかの判断はし得なかった。

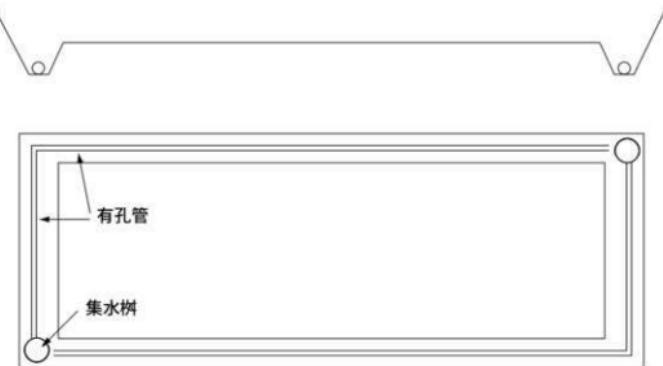
2 調査の経過

（1）調査区の設定と排水対策（第1図）

調査対象地のうち、大量に予想される排土置場を考慮し、試掘調査によるデータを基に85m×35mの範囲を設定した。

調査範囲のドライ化策として、オープンカットによる排水溝の設置と水中ポンプによる排水を併用した。調査区の最外部に深さ3m、幅1mの排水溝を設定した。外側法面は1:1の傾斜を取り、その結果、調査区（平面精査を実施した範囲）は、80m×30mの範囲となった。排水溝内には、直径15cmのネット状の有孔管を設置し、目詰まり防止のため御池ボラ（霧島御鉢噴出の火山軽石）で覆った。排水溝の四隅のうち北東及び南西の二隅は、更に0.5m程度掘り下げ集水樹を設置し、6inchのサンドポンプにて常時排水を行った。

これにより、調査区内のドライ化が確保され、平面精査が可能となったが、台風や長雨に見舞われたり、発動発電機の不調でポンプが停止すると、調査区内が水没し数日間調査が中断することになった。



第1図 谷ノ口遺跡排水対策概略図

(2) 第1調査面(第3図)

現地表面から約1.5m下に粗砂層(層厚15~20cm)が確認された。これは調査区のほぼ全域に広がっており、洪水による水田被覆層と推定された。この砂層を除去すると、調査区の全面に渡り押圧により扁平化した畦畔が検出され、洪水で被覆された水田であることが確認された。

調査区の南西隅付近の排水溝断面には、粗砂が自然堤防状に厚く堆積する部分と、現在の丸谷川方向に向かって強く傾斜する部分が確認され、丸谷川が流路を変化させていった痕跡と確認された。

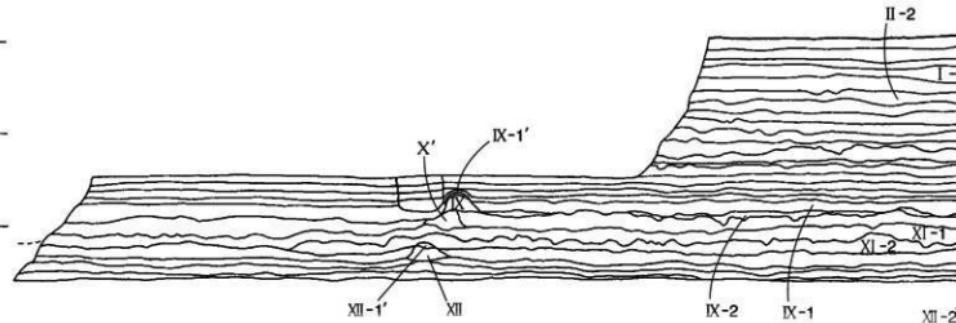
また、検出された畦畔と方向が多少異なる帶状の鉄分集中部が見られた。この帶状の鉄分集中部は、第1調査面よりも上位層における畦畔痕跡(プリント畦畔)と判断された。更に、調査面のほぼ全面に渡り、筋状及び楕円形状の窪みに砂が充満している状況が検出された。砂を丁寧に除去すると、楕円形状のものは、人及び牛の足跡であり、筋状のものは櫛歯状の農具を引いた痕跡であることが判明した。

検出された畦畔及びプリント畦畔、足跡、農具痕のそれぞれの関係を見ると、高まりとして検出された畦畔上には足跡、農具痕が見られるのに対し、プリント畦畔上にはほとんど見られないことが確認された。すなわち、第1調査面において検出された足跡及び農具痕は、プリント畦畔に伴うものであり、洪水による水田被覆砂層の更に上位層で行われた水田耕作の痕跡であると判断された。

第1調査面において検出された畦畔の方向性は、調査区周辺の現況水田区画にはほぼ一致するものであった。畦畔により区画される1枚の水田の面積は200~280m²で、現況水田に比べ約2割ほど狭いものである。遺物は、水田耕作土中から土師質土器や陶磁器の小片が僅かに出土したのみであり、水田自体の耕作時期を特定することは出来なかった。

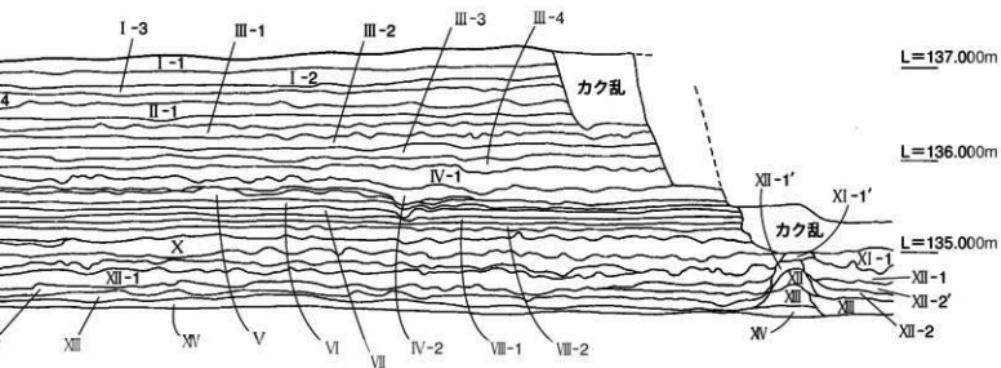
(3) 第2調査面(第4図)

第1調査面の精査終了後、約2.8m下の第1層を平面的に精査することとした。掘り下げの途中、断面観察にて明確な畦畔が観察された層について部分的な精査を実施したが、層の不整合などにより、調査区全面にわたる検出は出来なかった。第XIV層は、それより上層の各層が暗灰色の粘質土であったのに対して、色調に黒みが強く、平面的に掘り下げて精査することが比較的容易であった。とはいっても、水分



谷ノ口遺跡 基本土層注記

層順	土色	土色No.	特記事項
I - 1	にぶい黄褐色	10YR5/3	現水田耕作土。
I - 2	灰赤色	2.5YR4/2	糸根状斑鉄、白色輕質。
I - 3	灰赤色	2.5YR5/2	砂質。糸根状斑鉄、
I - 4	灰色	5Y5/1	砂質粘土。糸根状・
II - 1	灰色	7.5Y5/1	管状・雲状斑鉄を含む。
II - 2	灰色	10Y5/1	糸根状・膜状斑鉄、
III - 1	灰色	10Y6/1	砂質粘土。糸根状・
III - 2	灰色	10Y5/1	砂質粘土。糸根状・
III - 3	オリーブ灰色	2.5GY5/1	管状・雲状斑鉄を含む。
III - 4	灰色	10Y6/1	糸根状・膜状斑鉄、
IV - 1	灰オリーブ色	7.5Y6/2	糸根状・雲状斑鉄、
IV - 2	灰色	7.5Y6/1	糸根状斑鉄を僅かに含む。
IV - 3	灰色	7.5Y6/1	V層との混土層。
V	灰白色	5Y7/2	砂。火山ガラスを多く含む。
VI	灰色	5Y6/1	砂質粘土。糸根状・
VII	灰色	10Y5/1	砂質粘土。管状・雲状
VIII - 1	オリーブ灰色	2.5GY6/1	粘質土。管状・雲状
VIII - 2	オリーブ灰色	2.5GY5/1	粘質土。管状・雲状
IX - 1	灰色	10Y5/1	砂質粘土。糸根状・
IX - 2	灰色	10Y6/1	砂を多く含む。糸根状
X	暗オリーブ灰色	2.5GY4/1	糸根状斑鉄を含む。
XI - 1	灰色	5Y5/1	砂質粘土。砂を多く含む。
XI - 2	灰色	10Y5/1	糸根状斑鉄を僅かに含む。
XII - 1	灰色	10Y4/1	砂質粘土。弱グライ
XII - 2	灰色	10Y5/1	砂質粘土。弱グライ
XIII	灰色	7.5Y4/1	砂質粘土。弱グライ
XIV	オリーブ黒色	10Y3/1	粗砂。ウン管状斑鉄。



石を含む。
白色軽石を含む。
マンガン結核、白色軽石を含む。

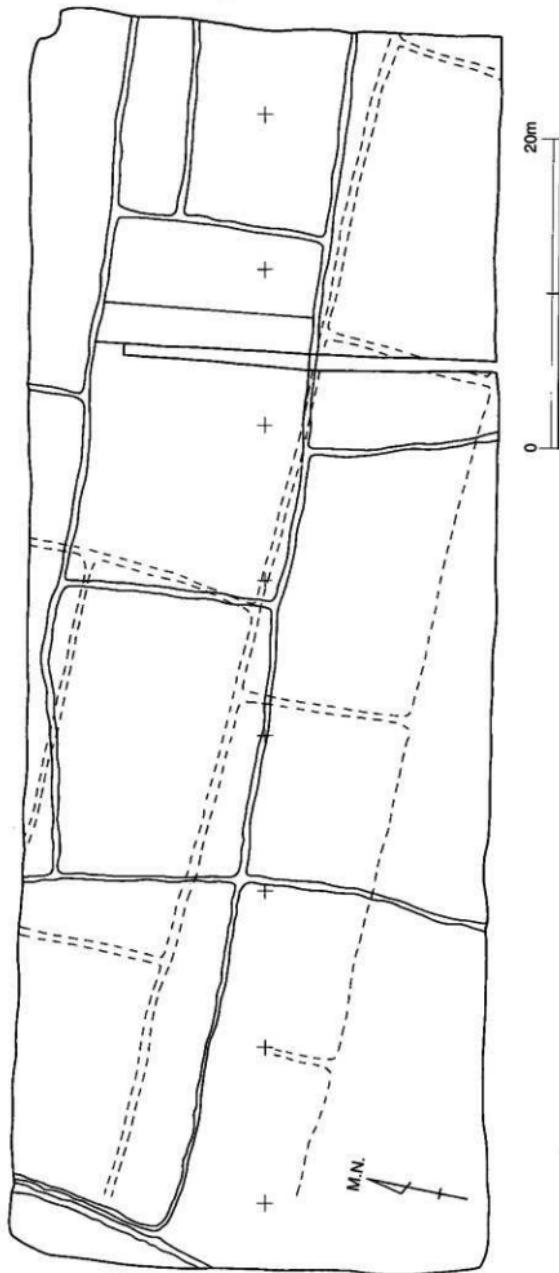
摸状斑鉄、マンガン結核、白色軽石を多く含む。
マンガン結核を含む。
雲状斑鉄、砂粒を多く含む。

雲状斑鉄を含む。
マンガン結核を含む。
白色軽石、炭化物粒を多く含む。
含む。

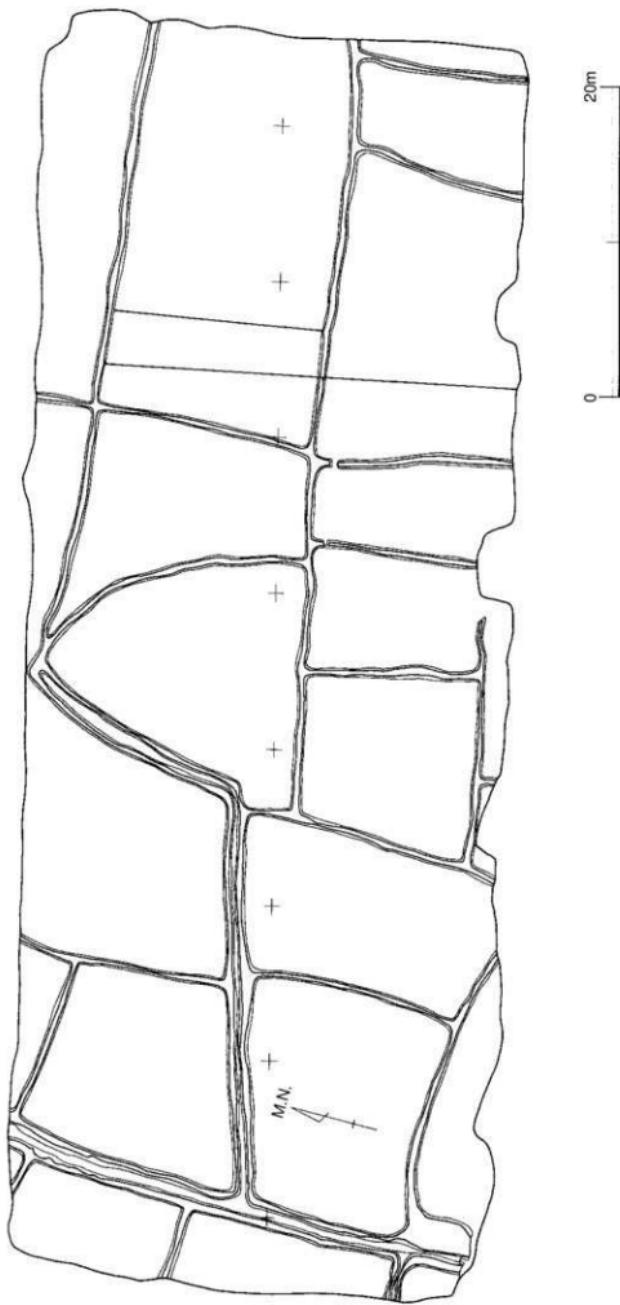
く含む。
雲状斑鉄を含む。
状斑鉄を含む。
斑鉄を含む。
斑鉄を含む。軟質。
雲状斑鉄を含む。
状斑鉄を含む。

含む。糸根状斑鉄を含む。
含む。
化。糸根状・雲状斑鉄、植物遺体（ヨシ類）を含む。
化。ウン管状・雲状斑鉄を含む。
化。植物遺体を含む。糸根状斑鉄を僅かに含む。
.植物遺体を多く含む。

第3図 谷ノ口遺跡第1調査面実測図 (1/300)



第4図 谷ノ口遺跡第2調査面実測図（1／300）



を多く含んだ粘質土は、ジョレンやネジリ鎌といった道具で平面的にスライスする作業に多大な労力を必要とした。

精査の結果、調査区全面に広がる畦畔や水路状遺構を確認した。畦畔は、押圧により扁平化していたものの明らかな高まりとして検出され、2箇所で隣接する区画に水を流すための水口も確認された。

検出された畦畔群のうち、東西方向の大まかなラインは第1調査面に共通し、南北方向の畦畔については、ほぼ一致するものと大きくずれるものが見られた。

3 小結

本遺跡の調査は、宮崎県内で初めて本格的に排水対策を実施した水田調査であった。この排水対策により、地表下約3mの層位に確認された水田面の精査を実施することが可能であった。残念ながら、検出水田の年代について明確にする根拠を得ることは出来なかったが、本県における低地水田遺跡調査の画期となる調査であったことは評価されよう。

この調査以降、県内の低地遺跡の調査件数は増加し、必要な排水対策を施した上で調査で、水田遺構を平面的に把握した事例が急増した。このことは、調査計画立案段階で必要機材と期間及び経費の確保と、調査現場における担当者の意識の変化が大きく影響しているものと思われる。



丸谷川と谷ノ口遺跡（東から）



谷ノ口遺跡全景（第XIV層、南から）



表土掘削



排水溝の設置



排水ポンプの設置



ベルトコンベアによる排土作業



土層断面（中央の白い砂層がV層）



土層断面（2）



丸谷川の流路変化の痕跡

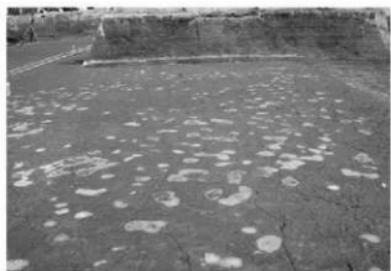


畦畔断面

図版3（谷ノ口遺跡）



第VI層（第一調査面）



足跡



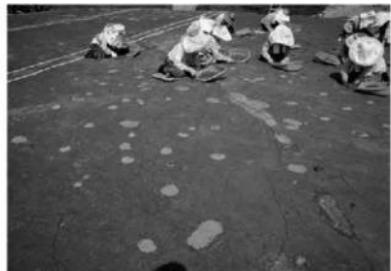
農具痕



珪畔及プリント珪畔



同左



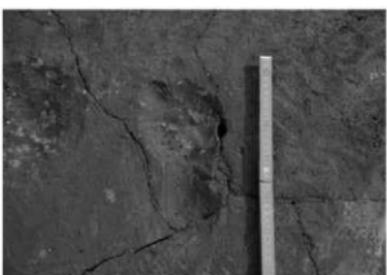
足跡の精査



足跡断面



足跡（牛）



足跡（人）



IX層に伴う畦畔



同じ位置に設定される畦畔



IX層水田



同左



第XIV層（第二調査面）



畦畔検出状況（1）



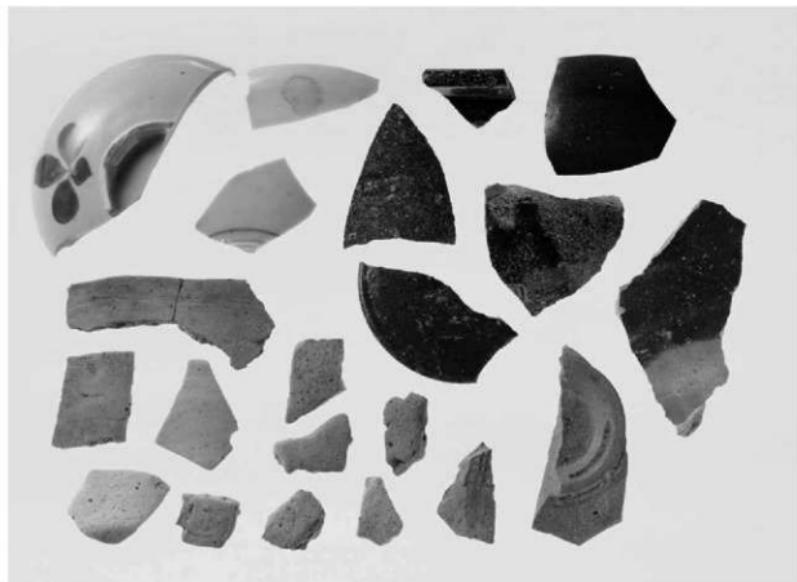
畦畔検出状況（2）



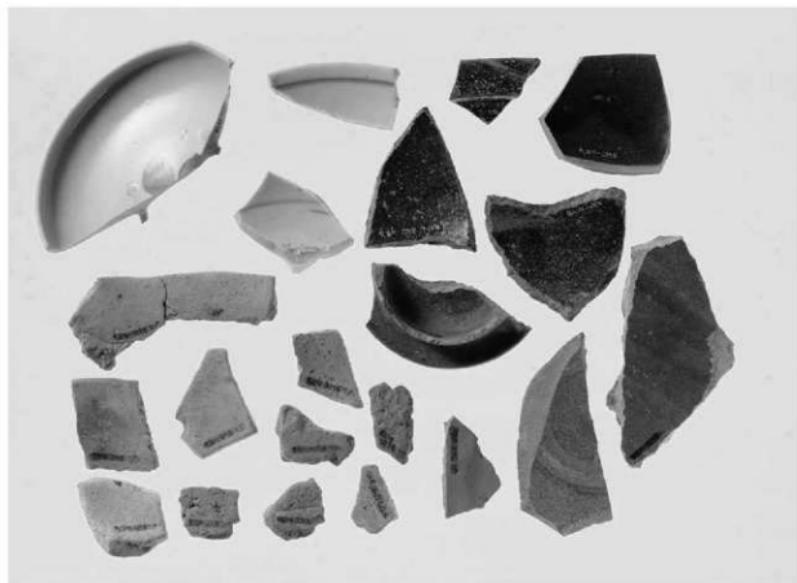
畦畔検出状況（3）



水口状に凹む畦畔



出土遺物（表）



同上（裏）

第3節 渡り口遺跡の調査

1 調査の概要

渡り口遺跡は、丸谷川の左岸にあり、平成6年3月の河川改修工事に伴う試掘調査により確認された。試掘調査では、植物珪酸体分析とテフラ検出分析委託も実施した。本発掘調査の時にⅢ区と設定した調査区付近の試掘トレンチでは、畦畔遺構が検出できた。また、テフラ分析から霧島新燃享保テフラ(1717年)よりやや古い時期の水田が広がることが想定された。さらに、下層に向かって掘り下げを行ったが、湧水が激しく、堆積している砂礫層もひじょうに厚かったため、本調査時の目標を霧島新燃享保テフラよりやや古い時期の水田面検出(第3図Ⅲ区土層断面図XII層の褐灰色土)に焦点を絞ることとなった。

また、本調査時にⅠ区とした調査区に設定した試掘トレンチでは、湧水がなく深く掘り下げることが可能であった。このトレンチでは遺構は検出できなかったが、霧島高原スコリア(788年)を由来とする火山灰層が混入した層の検出が見られ、古代にまで遡るような生産遺構面をとらえられる可能性が出てきた。また、河川の氾濫によると思われるラミナー状の粘性土の堆積が見られ、植物珪酸体分析でイネ等の栽培の可能性が高い土層(第2図Ⅰ区第VII層)を密閉している可能性が想定された。

本調査時にⅡ区と設定した付近の試掘トレンチでは、遺物の出土層が、霧島新燃享保テフラより新しい時期の可能性があり、18世紀前後の時期の水田が検出される可能性があった。

本発掘調査は、上流側から順にⅠ区-Ⅲ区として掘り下げを行った。調査区の周辺は水田が広がっており、梅雨時期に調査が重なったこともあり、水中ポンプの能力を上回る量の水が調査区内に入り込み、水没することがたびたびあった。調査面積はⅠ区が1,960m²、Ⅱ区が980m²、Ⅲ区が500m²である。

2 Ⅰ区の調査

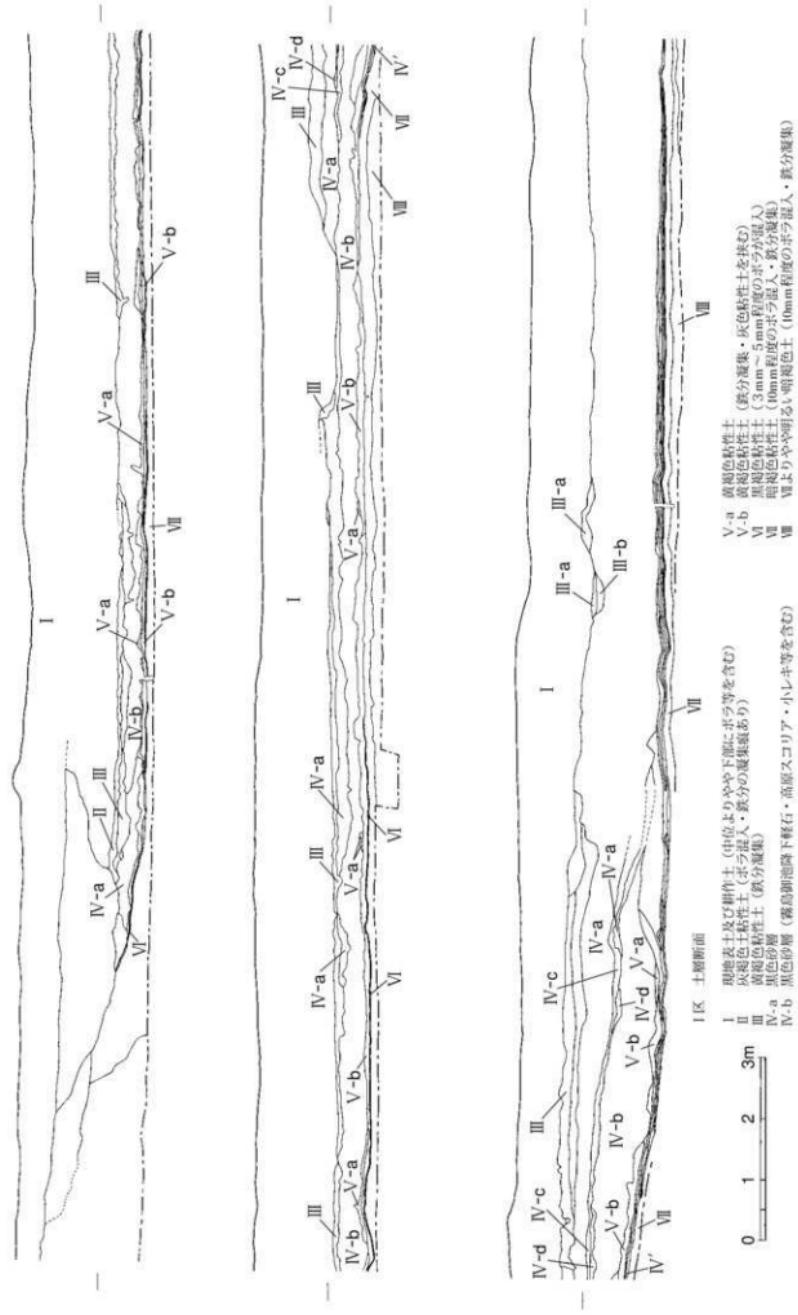
Ⅰ区は、IV-a・b層の上面までを重機により剥ぎ取り、VII層の暗褐色土の検出を目指した。IV層の黒色砂層を除去し、河川の氾濫による堆積と考えられたV-a・b層をはぎ取り、VII層面を徐々にあらわにしていった。調査区の北西側、現在の河川に近い部分では霧島御池鉄筋の安定した堆積層が見られ、暗褐色粘性土が南東方向に向かって緩やかに下っていく状況が見られた。調査区は北西から南西に向かい3つの段差が見られた。それぞれの段差は、調査区北西側の上段から中段が約80cm、中段から下段の段差は約100cmであった。

この調査で遺構の検出を目指した暗褐色土層(VII層)の直上にかぶるVI層の黒褐色土層は、上段部では薄いながらも安定した堆積であるが、中段から下段部にかけては、ラミナー状の堆積になり、間に粘性のある黄褐色土を挟むようになる。VII層面での植物珪酸体分析では上段、中段ともイネが検出され、稻作が行われていた可能性が高い。また、中段部ではムギ類の珪酸体も検出されている。

遺構は、上段部では、畝状の高まりが北から南の方向に伸びている状況が一部確認でき、ところどころに不定形の窪みが見られた。また、東側に湾曲し南北方向に伸びた硬化した道状の窪みも検出した。中段では南北方向あるいは東西方向に屈曲した畝状の高まりを検出している。下段では、明確な遺構は検出されなかった。

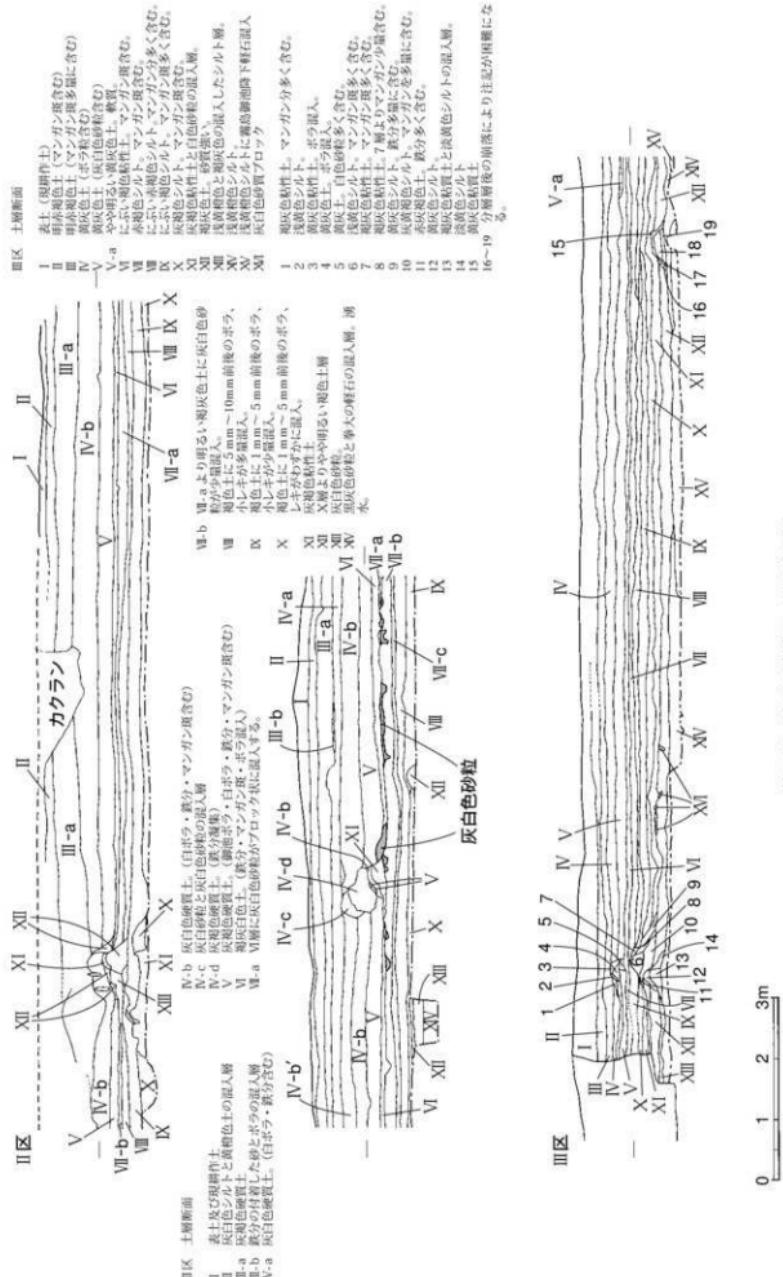


第1図 渡り口遺跡調査区周辺地形図 ($S = 1/2000$)



第2図 渡り口遺跡Ⅰ区土層図 (1/40)

第3図 渡り口遺跡II・III区土層図



3 II区の調査

II区は、X層の褐色土層での遺構検出となった。I区と違いシラス等を含んだ灰白色砂層が見られ、安定した水平堆積である。上層でも断面に畦畔や木杭等が確認できた。

遺構は、調査区西側で北西と北東方向に伸びる畦畔を確認できたが、水田の規模については確認できなかった。調査区の中央や東側では、それぞれ北東・北西方向に伸びた畝状遺構を検出した。また、不定形の窪みとそれに連結する溝状の遺構も検出している。

4 III区の調査

III区は、XII層の褐灰色土層面で遺構等の検出を行った。土層の堆積は水平に堆積しており、上位・中位・下位にそれぞれ畦畔が確認されている。試掘調査で、霧島新燃テフラの堆積を確認している層はX1層の灰褐色粘性土である。

遺構は、畦畔を確認しているが、水田の規模がわかるには至らなかったが、1辺に2つの水口を確認している。畦畔は調査区の南側で検出されており、北側や中央付近では検出されなかった。

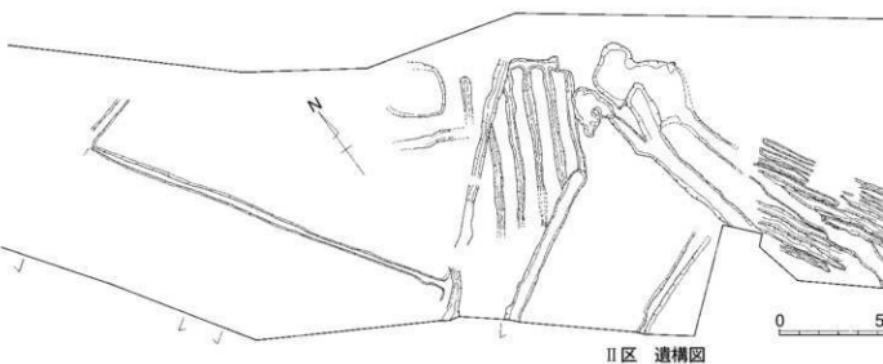
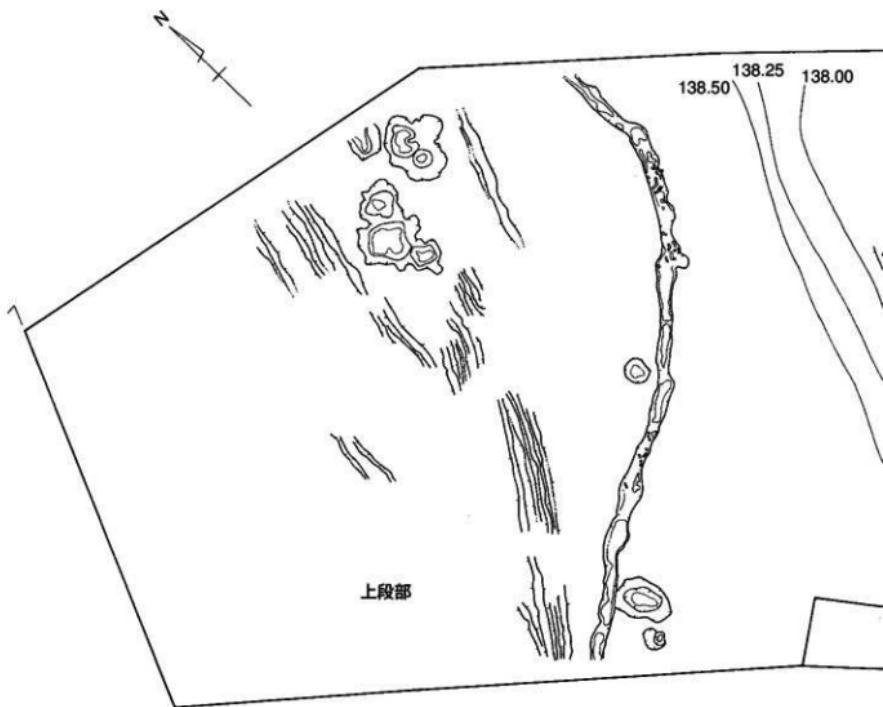
5 遺物

1は土師器の口縁部分で内面・外面ともナデが施されている。2は土師器の皿である。内面・外面ともナデがみられ、底部はヘラ切りである。3・5・6・7・9・10・12・13は薩摩焼である。5は壺または徳利等の袋物で内面・外面底部は無釉である。6は甕の口縁部と思われる。7は苗代川系と思われる拂り鉢で、スリ目の単位は不明である。外面には細かい横筋が見られ、口縁部内面は無釉である。9・12は土瓶の蓋と思われる。9は口径5.6cm、器高3.1cm、外面は黒の釉が施されている。12は口径4.9cm、器高3.4cmで外面は黒の釉が施されている。13は龍門司系の皿であり、見込みに蛇の目刺ぎを施す。また釉を飴釉と鉄釉の2種類に掛け分けている。底径は4.4cmである。10は土瓶の底部で内外面ともナデがみられる。

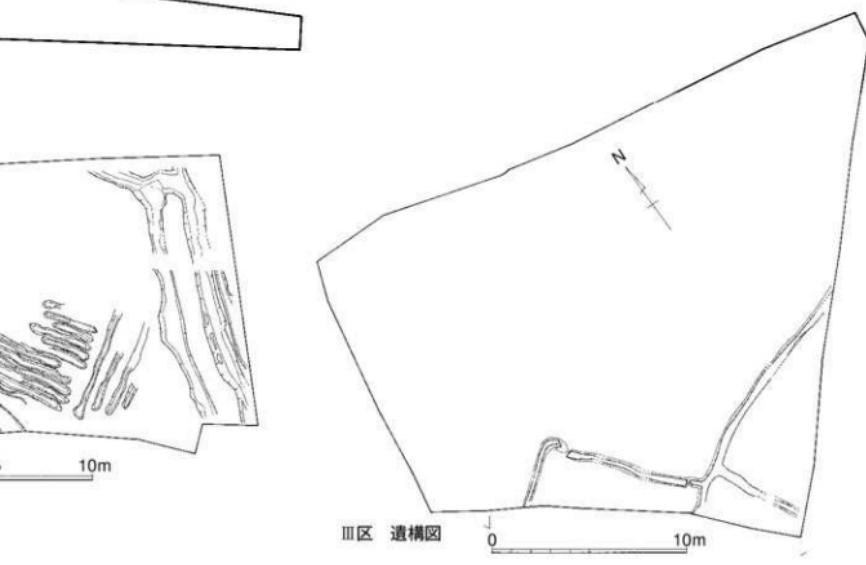
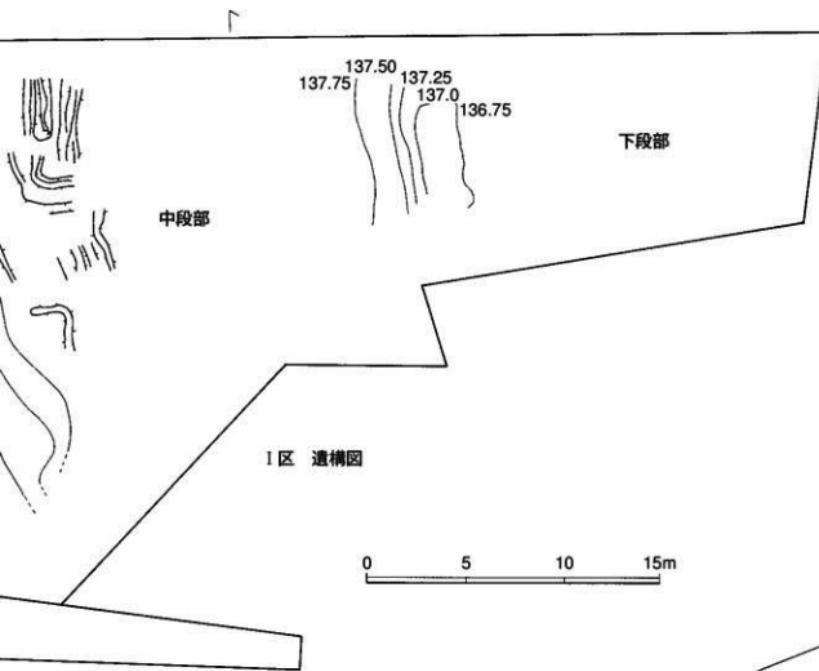
4はII区で出土した伊万里の染め付け碗である。外面に山水文を描いており、釉は壘付以外全体に施されている。壘付の一部は、工具等で削り取られた痕跡が見られる。口径10cm、器高7.45cm、底径4.4cmである。製作年代は江戸初期の1610年から1630年代と思われる。11は端反碗で、口辰部は釉を削り取っており、外面には染付で文様を描いている。内面は見込み蛇の目釉刺ぎを行っている。碗の形状から19世紀以降の製品と思われる。8は青磁染付碗である。朝顔形の碗で外面に青磁釉、内面口縁部附近に四方櫛文を帯状に巡らす。肥前系18世紀後半の製品と考えられる。15はII区で出土した砂目皿である。底径4.5cm、見込みに4ヶ所目跡が付着したため高台ごと削り取った箇所が2ヶ所見られる。14はII区で検出された砥石と考えられる。

6 まとめ

渡り口遺跡では、II区とIII区で18世紀前後の水田遺構の確認ができた。また、I区の上段部では遺物の出土はなかったが、テフラ分析と植物珪酸体分析の結果、古代以降稲作が実施されていた可能性が高く、一部検出した畝状の高まりが遺構の一部となる可能性がある。



第4図 渡り口遺跡遺構





第5図 渡り口遺跡出土遺物実測図

図版1（渡り口遺跡）



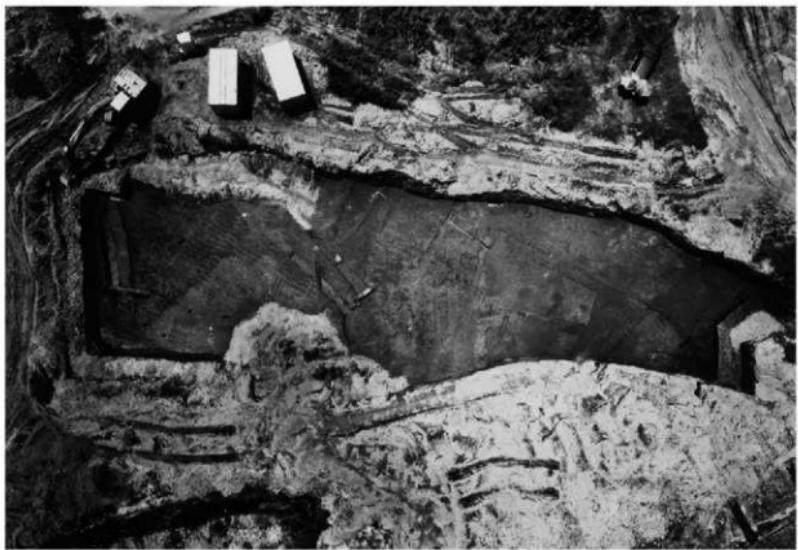
1 渡り口遺跡調査前の状況



2 渡り口遺跡Ⅰ区

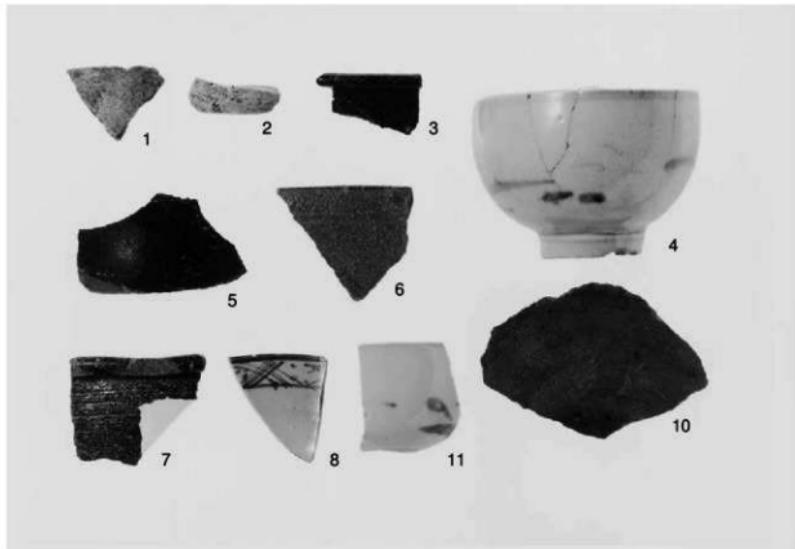


3 渡り口遺跡Ⅰ区とⅡ区

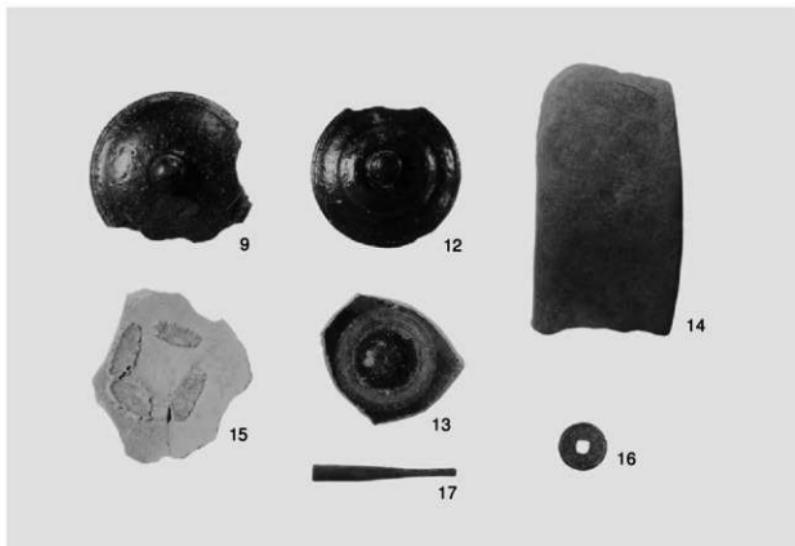


4 渡り口遺跡Ⅱ区

図版3
(渡り口遺跡)



5 渡り口遺跡出土遺物（陶磁器）



6 渡り口遺跡出土遺物（金属製品・石器）

第4節 下川原遺跡の調査

1 調査の概要（第1図、図版1－1）

下川原遺跡は山田町方面から流下してきた丸谷川が宮崎自動車道と交差する直前の左岸に隣接する。調査期間は、ちょうど水田に灌水する時期に当たり、河川水位が高く排水の手当も無い条件で、表土から1mも掘り下げれば大量の水が噴き上げるといった悪条件のなかで行なわざるを得なかったため、湧水の見られる砂層直上の、可能な限り古いと判断される水田区画の検出に調査の焦点を絞った。

農道を境にA区、B区の調査区を設定し、断面を観察しつつ掘り下げた結果、現耕作土から同じ位置で連續と続く畦畔が認められ、その最下層では、A区で6枚、B区で5枚の水田区画を検出することが出来た。

2 検出遺構（第2図、第4図～第8図、図版1－2、図版2－3、第1表、第2表、第3表）

A区で検出した6区画の水田は、基本的に11層の床土、畦畔に9層もしくは9'層の耕作土が対応すると考えられ、それぞれの区画は河川に沿った旧地形に規定された不整な長方形を呈している。調査区内では、区画の全容が判明する水田は無い。河川側には不連続な溝1と溝2が東西に走っていて、水田区画A4とA5の間は溝3によって区画されている。

B区では5つの水田区画のうち、3つの水田区画が比較的整然と配置されているのが認められた。B区の層位は複雑であるが、A区の11層に対応すると考えられる11層もしくは7層の床土、畦畔に6層あるいは17層等の耕作土が被さっていると考えられる。

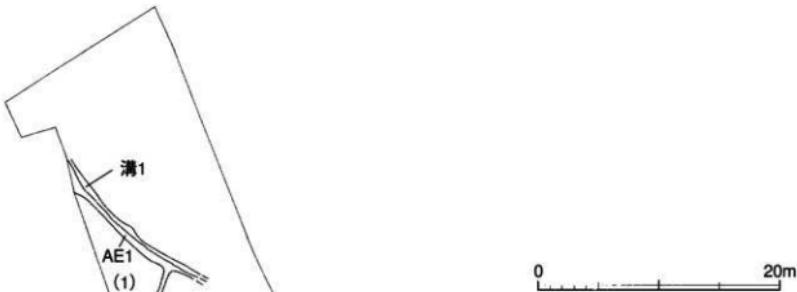
全容が検出された区画B2は、その面積が111平方メートルで平面形はほぼ長方形を呈している。区画B3では南辺のB E 1に2カ所、区画B2では北辺の畦畔B E 2と南辺の畦畔B E 1に水口1カ所ずつが設けてあり、このことから、水田に供給される水が、北から南へと流れ、川に隣接した溝4を経て、何処かで丸谷川へと排出されていたことを示している。B区で検出された溝4はA区の溝2と連続していると考えられる。

3 出土遺物（第3図、図版2－4）

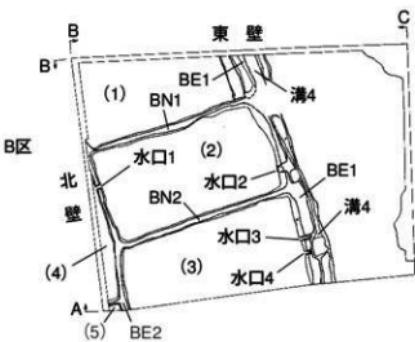
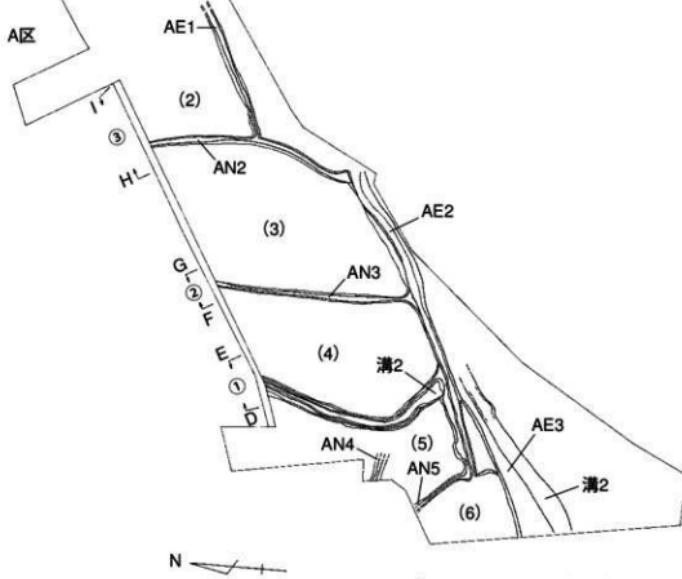
1は筒形碗である。外面に雪持筐文、腰部下に折れ松葉文を施す。肥前系の可能性が高いと思われる。時期的には18世紀後半から末に比定できる。2は土瓶の蓋で、薩摩焼苗代川系の製品である。3、4は土瓶の破片で、その胎土・釉薬から2と同様に苗代川系の製品と考えられる。概ね19世紀の所産と考えられる。5は手捏ねの土製品で、その形状から舟形のミニチュア土製品と思われる。船先は一部欠失しており、艤と見られる部分は2つの突起によって表現されている。舟底部の中央船先寄りと艤寄りに串状の尖ったものにより2つの小孔が穿けられており、前者は未貫通だが後者は貫通している。この小孔に帆柱が刺さっていた可能性がある。1～4は水田区画A4の最下層床土中から検出され、5は

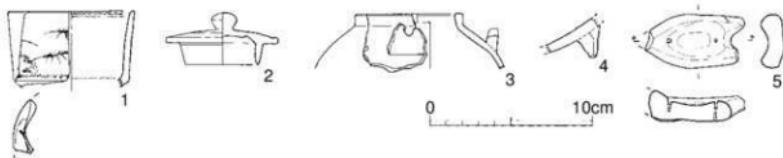


第1図 下川原遺跡周辺地形及び調査区位置図 (1/2000)



第2図 下川原遺跡遺構配置図 (1/400)





第3図 下川原遺跡出土遺物実測図（1／3）

水田区画B 1の最下層床土から検出された。

4 まとめ

報告紙数の都合により詳細な記述は割愛せざるを得なかったが、小河川の縁辺部に営まれた江戸後期から末にかけて、(断面の観察によれば明治期以降まで)の水田の姿を断片的に捉えることができた。

第1表 水田区画データー観表

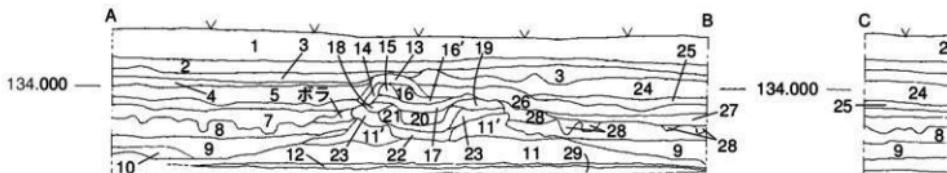
水田区画	長辺(m)	短辂(m)	面積(m ²)	形状	検出度	畦 畦	溝	水口
A 1	(10.6)	(6.6)	(34)	—	部分	AE1AN1	溝1	—
A 2	(24.4)	(8.8)	(223)	(台形状)	部分	AE1AN1AN2	溝1	—
A 3	(16.0)	(10.4)	(187)	(不整長方形)	部分	AE2AN2AN3	—	—
A 4	(16.0)	(8.0)	(132)	(不整長方形)	部分	AE2AN3	溝3	—
A 5	(19.0)	—	(89)	(不整形)	部分	AE2AN5	溝2	—
A 6	(7.8)	(6.0)	(36)	(長方形)	部分	AE3AN5	溝2	—
B 1	14.8	(7.0)	(70)	(長方形)	部分	BE1BN1	溝4	—
B 2	(14.8)	8.0	111	長方形	全体	BE1,BE2,BN1,BN2	溝4	水口1,2
B 3	15.4	(7.8)	(97)	(長方形)	部分	BE1,BE2,BN2	溝4	水口3,4
B 4	—	—	(8)	(長方形?)	部分	BE2BN3	—	—
B 5	—	—	(0.6)	—	部分	BE2BN3	—	—

第2表 畦畔データー観表

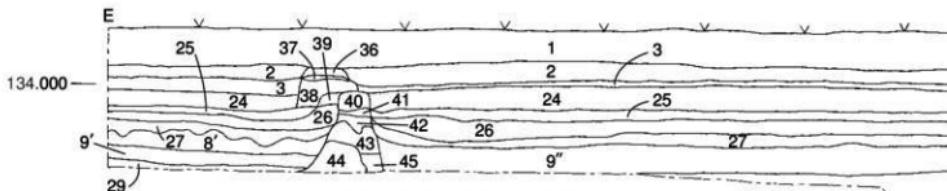
畦畔	幅(cm)	高さ(cm)	畦畔	幅(cm)	高さ(cm)
AE 1	80	10.0	AN 5	40	12.2
AE 2	60	16.5	BE 1	40	19.7
AE 3	140	14.5	BE 2	40	8.0
AN 1	40	—	BN 1	50	10.5
AN 2	40	17.1	BN 2	45	16.7
AN 3	45	10.0	BN 3	50	9.2
AN 4	30	41.6			

第3表 水口データー観表

水口	幅(cm)	深さ(cm)	水田区画
水口1	30	3.8	B 2
水口2	35	17.0	B 2
水口3	30	15.1	B 3
水口4	20	15.5	B 3



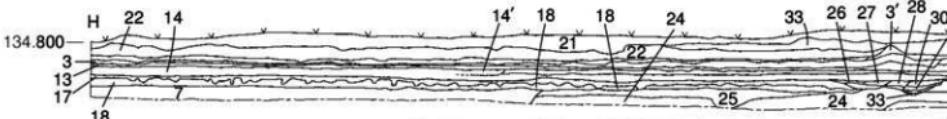
第4図 A区土層図① (1/40)



第6図 A区土層図③ (1/40)



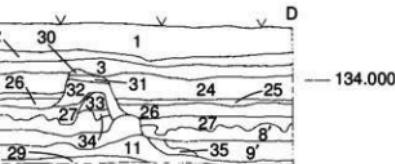
第7図 B区北壁土層図 (1/80)



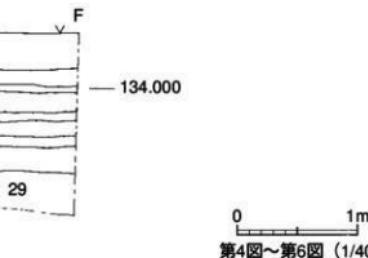
B区北壁断面土層及びB区東壁断面土層

第8図 下川原遺跡B区東壁土層図 (1/80)

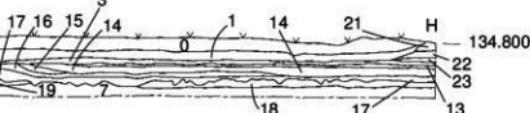
- | | | |
|-------------------------------|---------------------------------|------------------|
| 0 現耕作土 | 12 5より暗い砂質灰褐色土 | 22 2より明るい褐色土 |
| 1 褐色土 (現耕土、ボラを僅かに含む) | 13 黒褐色土 (ボラを含む) (畦畔) | 24 シラスを基本とした灰褐色土 |
| 2 褐色土 (より多くのボラを含む) | 14, 13よりボラが多く明るい黒褐色土 | 25 24類似の灰色シラス質土 |
| 3' 2に砂状の粒子が含まれる (新燃バミス?) | 14' 14類似の黒褐色土 (ややボラが少ない) | 26 わずかに色調の異なる |
| 3' 基本的に3と同じ褐色土だが若干灰色が強い (畦畔) | 15 14より明るくボラをほとんど含まない褐色土 (畦畔) | 27 ラを多く含む) |
| 4 2より明るい砂質明灰褐色土 (ボラを含む) (畦畔) | 16 15より明るい灰褐色土 (ボラを含む) (畦畔) | 28 |
| 5 4より灰色が強い砂質明灰褐色土 (ボラを含む) | 17 その基部に酸化層と白色層の互層の見られる灰褐色土 | 29 |
| 6 砂質明灰褐色土 | 層 (畦畔) | 30 灰色シラス質土 (ボラを |
| 7 明灰褐色質土 (ボラを多く含む) | 18 7より黒い14に類似した黒褐色砂質土 (ボラを多く含む) | 31 灰白色砂質土 |
| 8 白色砂を含む灰色砂質土 (畦畔) | 19 暗褐色砂質土 (ボラを多く含む) | 32 黑灰色シラス質土 |
| 9 5より明るい明灰褐色土 (白色砂を多く含む) (畦畔) | 20 灰色砂質土 | 33 赤褐色土 |
| 10 黄灰色砂質土 (多くのボラを含む) (畦畔) | 21 1より明るい褐色土 (酸化土を含む) 現耕作土 | 34 ボラ層 |
| 11 5より多くのボラを含む砂質明灰褐色土 (畦畔) | | |



第5図 A区土層図② (1/40)



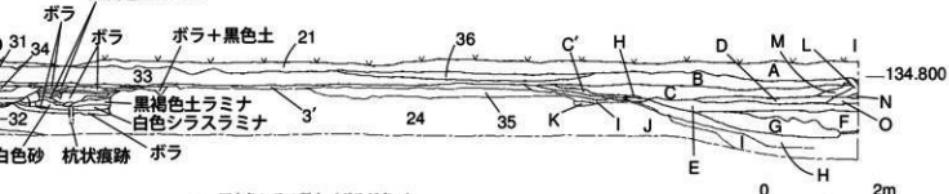
第4図～第6図 (1/40)



A区断面①・②・③土層

- 1 現耕作土
- 2 現床土上部（ボラを少し含む）
- 3 現床土下部（ボラを少し含む、2より酸化が弱い）
- 4 3に灰白色シラス質土が混じる
- 5 4と基本的に同質だが、シラス質土がやや暗い
- 6 暗灰色シラス質土（ボラを多く含む）
- 7 暗灰色シラス質土
- 8 6よりボラが少ない暗灰色シラス質土
- 9 灰色シラス質土（ボラが少ない）（鞋群）
- 9' 暗灰色シラス質土（9よりもさらにボラが少ない）
- 9'' 暗灰色シラス質土（9よりもさらにボラが少ない）
- 10 灰色シラス質土
- 11 灰色シラス質土と酸化層がラミナ状になった層
- 11' 層を盛り上げたようなブロック状の層
- 12 白色粘土
- 13 灰白色シラス質土（鞋群）
- 14 灰色シラス質土（鞋群）
- 15 灰白色シラス質土（鞋群）
- 16 暗灰色シラス質土（鞋群）
- 16' 暗灰色シラス質土（ボラを非常に多く含む）（溝及び溝埋土）
- 17 灰色シラス質土（溝及び溝埋土）
- 18 ボラのブロック（溝及び溝埋土）
- 19 ボラのブロック（溝及び溝埋土）
- 20 ボラのブロック（溝及び溝埋土）
- 21 暗灰色シラス質土（溝及び溝埋土）
- 22 ボラのブロック（溝及び溝埋土）
- 23 灰色シラス質土（溝及び溝埋土）
- 24 暗灰色シラス質土（ボラを多く含む）
- 25 灰色シラス質土に24ブロックが混在する（ボラは含まない）
- 26 24より暗い暗灰色シラス質土（ボラを多く含む）
- 27 灰色シラス質土（砂質岩层混在する）
- 28 17に類似した灰白色シラス質土
- 29 青灰色シラス質土（ラミナ状）
- 30 灰色と黄灰色シラス質土のブロックが混在する（鞋群）
- 31 黄灰色シラス質土（酸化）（鞋群）
- 32 灰色と灰白色シラス質土が混在する（鞋群）
- 33 31と同質の黄灰色シラス質土（酸化）（鞋群）
- 34 9類似の灰白色シラス質土に白色シラス質土が混在する
- 35 34よりわずかに明るい灰白色シラス質土
- 36 2の酸化度合が強い層（鞋群）
- 37 36よりわずかに明るい（鞋群）
- 38 灰白色シラス質土（酸化）（鞋群）
- 39 38より白っぽい灰白色シラス質土（酸化）（鞋群）
- 40 38より青が強い灰白色シラス質土（酸化）（鞋群）
- 41 40より酸化が強い灰白色シラス質土（鞋群）
- 42 41より明るい灰白色シラス質土（鞋群）
- 43 灰白色シラス質土（鞋群）
- 44 灰白色シラス質土と酸化層がラミナ状になった層（11に類似）（鞋群）
- 45 青灰色シラス質土（酸化が強い）

黒褐色土ラミナ



色土（酸化した部分がある）
(河川土手)
35 灰白色シラス質土（ボラが多い）

36 黑褐色土（ボラを若干含む）
A 0と同じく現耕作土（農道下部）（旧河川）

B 酸化した灰色シラス質土（33から著しいに色調が変化している）（旧河川）

C B層に砂粒を多く含む（旧河川）
C' Cより砂が少なくBに近い（旧河川）

D 明灰色砂質土にC層ブロックを含む（旧河川）
E 明灰色砂質土に酸化ブロックを含む（旧河川）

F 灰色ブロックに砂と酸化ブロックが混在する（旧河川）
G 黑褐色土に酸化したボラと大きな鉢石が混在する（旧河川）

H 酸化粒の多いラミナ状の砂質土（旧河川）

- I ラミナ状になった灰色砂質土と黒色砂質土（旧河川）
- J 酸化マンガン粒を多く含んだ明灰色砂質土（旧河川）
- K 小粒ボラ層（旧河川）
- L 酸化した灰色シラス質土（旧河川）
- M 砂層（旧河川）
- N 砂が多く含まれた酸化褐色土にシラス質ブロックを含む（旧河川）
- O 酸化した灰色シラス質土に砂が混在する（旧河川）



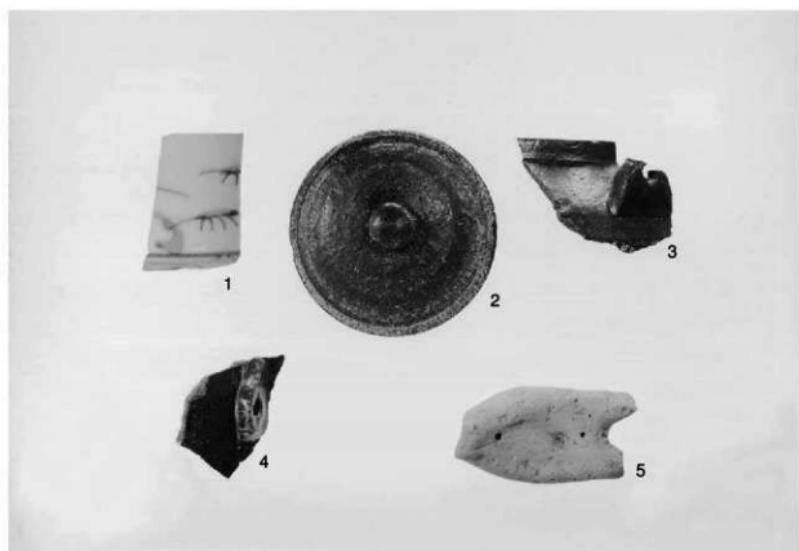
1 下川原遺跡調査区全景（南から）



2 下川原遺跡A区



3 下川原遺跡B区



4 下川原遺跡出土遺物

報告書抄録

ふりがな	しもだいごろういせき・たにのくちいせき・わたりくちいせき・しもかわばるいせき						
書名	下大五郎遺跡・谷ノ口遺跡・渡り口遺跡・下川原遺跡						
副書名	丸谷川広域基幹河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘報告書						
卷次							
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書						
シリーズ番号	第113集						
執筆・編集担当者	山田洋一郎・東憲章・飯田博之・石川悦雄						
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター						
所在地	〒880-0212 宮崎郡佐土原町大字下那珂4019番地 TEL 0985-36-1171						
発行年月日	2005年3月18日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
下大五郎遺跡	宮崎県都城市丸谷町字下大五郎1495番地 1	45202	31度48分30秒	131度5分58秒	1990年7月30日～ 1990年10月30日	4,000m ²	丸谷川広域基幹河川改修事業に伴う発掘調査
下川原遺跡	宮崎県都城市丸谷町字下川原		31度48分25秒	131度5分49秒	1991年7月8日～ 1991年10月11日	2,100m ²	
谷ノ口遺跡	宮崎県都城市丸谷町字谷ノ口		31度48分21秒	131度5分16秒	1992年7月7日～ 1992年10月30日	2,500m ²	
渡り口遺跡	宮崎県都城市丸谷町字渡り口		31度47分50秒	131度4分55秒	1994年3月24日～ 1994年8月9日	3,300m ²	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物	特記事項		
下大五郎遺跡	集落跡	弥生時代	堅穴住居跡12軒・ 掘立柱建物跡2棟・ 土坑2基	壺・壺・鉢・高环 器台等		下大五郎遺跡の6号住居から8個の長頭壺が出土した。	
下川原遺跡	水田跡	近世	水田・畦畔・溝	陶磁器			
谷ノ口遺跡	水田跡	近世	水田・畦畔・溝	陶磁器			
渡り口遺跡	水田跡	近世	水田・畦畔・溝	陶磁器			

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第113集

下 谷 渡 下 大 五 郎 遺 跡
谷 渡 原 口 遺 跡
ノ り 川 原 口 遺 跡
川 原 遺 跡

丸谷川広域基幹河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2005年3月18日

発 行 宮崎県埋蔵文化財センター
〒880-0212 宮崎県宮崎郡佐土原町大字下那珂4019番地
電話 0985-36-1171

印 刷 株式会社 宮崎南印刷
〒880-0911 宮崎県宮崎市大字田吉350-1
電話 0985-51-2745
